
超能力者の観察日記

河道 秒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超能力者の観察日記

【Nコード】

N3545V

【作者名】

河道 秒

【あらすじ】

冬のある日、戦争が始まった。それは超科学と名乗る組織と超能力者によるものだ。そんな最中、一人の超能力者である綾瀬恭耶あやせきょうやはとある人物から依頼を受ける。その依頼の場所は誰もいないような廃ビルだ。しかし、その場所には神原沙希かみはらしほという少女がいた。その少女と話していると超科学の兵士がやってきた。その鎧はビームやら怪力やらと化け物じみた能力を持っていたのだった。

そして、その鎧との戦いが始まったとき、波乱の戦争が幕を開ける。尚、この小説は別のサイトでもアップしています。

戦争勃発

十二月二十三日。午後九時四十三分。唐突の宣告だった。家に帰ってきて、ふとテレビをつけたときだった。

『我々は超能力者という血の歴史を作った、人類ではない存在に憎悪を抱いている！』

テレビで壇上に立った中年の男が言った。どのチャンネルもこの宣告を中継しているようだ。

『日本だけではない。世界各地でその超能力者らは我々人類の命を刈り取っている！』

俺は固唾を呑みながら画面を見つめていた。

『そして八年前のクリスマス。東京で多数の死者が出た。その超能力者によつてな！』

テレビ中継をしている場所では観客も大勢いるらしく、彼らは男の発言に対し、罵詈雑言や賞賛の声まで上げていた。まるでロックバンドのライブのような盛り上がりだ。

『あれから八年。我々は血の滲むような努力と研究を重ね、ついに彼奴らに対抗する手立てを得たのだ！』

男の後ろがスポットライトで照らされる。そこには、全体的に丸みを帯びた人型をした、鉄の塊があった。頭部はドラム缶のような形をしており、野暮ったいという表現がしっくりくるようなものだ。

『これが我々、人類の科学の結晶……「超科学」だ！』

テレビ越しからでも分かるくらいに人の声が爆発した。そのせいか、リポーターの声はつきりと聞こえない。

『この鎧は彼奴らに十分対抗出来る能力を秘めている。これは技術の革新ともいえよう！』

こんなふざけた技術革新などあってたまるものか。

『そして、我々人類はこの「超科学」を用いて超能力者を一匹残ら

ず排除することをここに宣言する！」

またスポットライトが照らされたかと思うと今度はその男の一つ下の段に男と同じ制服を着た人間がずらりと並んでいた。

そして俺は啞然としていた。昨日まで普段どおりだった世界がガラガラと音を立てて崩れてゆくのが分かった。

『八年前に散っていった命のためにも我々はこの命を賭けることを誓おう！ 人類に希望を与えることも誓おう！』

全身から嫌な汗が噴き出してくる。そして同時に腹の底から身勝手な思想に対する怒りが湧いてきた。この俺、綾瀬恭耶、生きてきた十七年で一、二を争うような怒りだった。

『良いか、人類の諸君、そして世界中の人類に非ず超能力者！ これは……』

観衆が一瞬だけ、水を打ったような静寂に包まれ、

『これは、戦争だ！』

人々の声が爆発した。そう、今日、この日、この時間 十二月二十三日午後九時四十五分 をもって、超科学と超能力による戦争が始まった。

パァンッ。また人が弾けた音がした。これで何回目だろう。

人の悲鳴、肌を裂くような寒さ、人が弾ける音、降り積もる雪、白い地面が赤く染み込んでいく。自分の足元には血を吐いて、脳の中身をぶちまけた死体が複数あるだけ。損傷のひどいやつだと内臓までこぼしている。

生きている人間の中にはこの状況に耐えられず、頭がおかしくなつてよだれをたらしながら浮浪者のように歩いている人間もいた。生きている女を犯しているやつもいた。

クリスマスのはずだった。家族三人で暮らしていたんだ。両親、それと自分。

その平和が、隣の家の悲鳴で壊れた。上着も羽織らず、家族全員で窓から逃げて、とにかく走って走って走って。

気付いたら、俺の後ろには、知らない人間の死体があるだけだった。

「はあっ……！ はあっ……！」

古い家は燃えさかり、からくも死を逃れた人間を容赦なく丸焦げにしてい。それが分かったのは火に包まれた人が、ぼとり、という音を出して地面に落ちてきたからだ。まるで戦争でもしているかのような風景。

そう、数時間前までクリスマススムードに包まれていたこの町は今や地獄絵図と化しているのだ。目の前にも、後ろにも、横にも、自分の死角にも、人間の死体が転がっている。

もはや原型を留めていないものもあった。明らかに銃とは違う何かで殺されたのだ。例えば、骨が内側から突き出していたり、人の体のパーツごとに分解されていたり。

そんな光景を見て俺は思う。なぜ自分は生きているのだろう、なぜこんなところにいるのだろう、なぜこんなことになったのだろうという疑問が頭の中を無限に駆け巡っていた。

そしていつもたどり着く答えは、抗いようの無い暴力なのだ、これは。そういう、諦めにも似た感情だった。

不幸中の幸いなのか俺に当たっている銃弾は肩に一発だけだった。走っている足がもつれ、俺はついに赤く染まった雪の地面に倒れた。「うわっ……！」

そして、俺が見上げた先には、薄い笑みを浮かべた男が立っていた。

「ッ！？」

ああ、朝からなんて寝覚めが悪いんだ。昨日の仕事が激しすぎた

か。しかし、よりによってこの夢だとは……最悪の一言に尽きる。
今日が十二月二十三日という日だからだろうか。あの事件ももう八年も経つ。

そして自分のベッドの横の目覚まし時計を見るとセットしていた時間より三十分も早かった。二度寝する気にもなれないし、何よりも最高に気分が悪くなったのでさっさと準備を済ませて家を出ることにした。

「くそ……イライラすんなあ……」

ピンポン。面倒だな、と思いつつドアを開けると、

「ハロー！　じゃなくてグツモーンツ、綾瀬くん！　ちよつと早く起きちゃったテヘツ」

フリルのついた洋服　ゴシックロリータ風だったはずだ　を身につけ、茶色のサイドポニーにピンク色のリボンをつけた少女が立っていた。今は、仔犬のようなくりくりとした目で、女の子の中では可愛い部類に入るだろう。

そして俺は彼女の前で、ボタン。速攻でドアを閉めた。ちなみに、俺は高校二年生だ。留年は一度もしていない。

そしてさっきの女は湖南英理子。まあ簡単に湖南こなんについてを説明すると、『見た目は最高、頭脳は最悪。その名は迷探偵、湖南』だ。分かりにくいだろうがおいおい分かるだろう。

俺がドアをもう一度開けると、

「綾瀬くん……ダメ、だったかな？」

「いちいちキャラを変えるなめんどくさい」

「綾瀬……付き合い悪い」

直後、猫のようなするどい目つきに変わった。とりあえず俺と彼女について説明しよう。勘違いされるのも困るからな。

俺たちは近所の探偵事務所で働いている。しかし探偵事務所というのは建前で、一概に言うとなんでも屋だ。掃除から汚い仕事までなんでも請ける。それで俺たちはそのバイト仲間というわけ。

そこで湖南は男に色仕掛けをかけて、依頼を完遂させる、という

ポジションにいる。例えば、一人の男が借金をしているとす。湖南はその男に近づき、色々世話を焼く。その男と湖南が付き合う直前に、事務所の人間が男に、「俺の女に手出しすんな」というようなことを吹っかけて金を回収する。ようは美人局だ。つもたせ

そういう仕事柄、臨機応変に行かなくてはならない。それで彼女はさつきみたいにキャラがコロコロ変えられる。まるで怪人二十面相だ。

頭脳が最悪と言ったのは、湖南は性根が腐りきっているからだ。

自分を中心に世界は回っているんだというような横暴な立ち振る舞い。彼女の本質を知った人間なら誰でも距離を置きたがるようなそんな、人間である。

「で、こんな朝早くに何の用だ？」

「所長から仕事。あんたみたいなゴミに時間を使わされるなんてひどいものだわ」

「俺はゴミですか……で、仕事内容は？」

「確か『血のクリスマス』に関するなんとか……だったような。詳しいことは所長に聞いてよ」

「……分かった」

「あたし、学校あるから。じゃあ」

そういつて湖南は立ち去った。

それにしても依頼内容が『血のクリスマス』に関する内容だとはイヤだね。

八年前、東京で虐殺が起きた。十二月二十四日のことだ。ある集団が勝手な理由をつけて東京で虐殺をした。その集団は、超能力者の集団だ。

超能力。俺が生まれた頃、3Dテレビが発売された頃ならにわか信じがたい話だが、それは実在する。それは、人類の突然変異種だと推測されている。詳しいことは未だ説明されてはいないが、ここ何年かで見られる現象だ。

それでその超能力の集団がその日、東京北部で五千人を殺したの

だ。銃や、彼らの持つ能力で。俺はその体験者で、生存者でもある。警察と自衛隊が相応の犠牲を出して鎮圧したのだ。能力者の数は少なかったものの人知を超えた力というとてもない兵力を持っている。だから数で押すしかなかった。事件が終わったとき意識が明滅としていた俺の周りには人が二、三人ほどしかいなかった。これが東京大虐殺、別名『血のクリスマス』の顛末である。今までも若干の差別もあったのだが、それを境に激化し、超能力者は隔離されるか、江戸時代のえた非人のように差別されるか、自分の能力を隠すことでしか生きることが出来なくなったのだ。

ちなみに俺は超能力者だ。

今のところそれを知っているのは俺を『血のクリスマス』で拾った人と探偵事務所の所長だけだ。二人には他言無用ということにしてある。能力に目覚めたのは事件直後のことだった。

友達関係は、『深くなく、浅くなく』というさじ加減のもと営んでいる。深く関われば、俺の能力のことがばれてしまうことだってあるし、浅ければ浅いで色々不都合が出てくるのだ。

「なんで俺が……」

あの事件を思い出すだけで嫌な汗が噴き出してくるのに、なぜ所長は俺にやらせたがるうとするのだろうか。分からなかった。

あの事件に全てを壊された。あの事件が俺の家族を、大切なものを壊した。思い出すだけで気分が悪くなる。

「チッ……」

頭を振り、陰鬱な気分を払拭する。とりあえず事務所によってから学校に行くでしょう。微妙に温かいオンボロなアパートから俺は冬の外気に身を当てにいった。

東京某所。雑居ビルの三階にその事務所はある。氷室探偵事務所。

見るからに胡散臭い名前だ。

俺はそんなところで働いている。事務所の前のドアを軽くノックし、

「おはようございます氷室さん……ってあれ？」

その事務所の所長たる、氷室佳苗さんがいなかった。黒いストリートヘアでトップモデルばりのプロポーションを持ち、かつ怪しげな雰囲気を持つ女性なのだが……

「呼んだかい？」

「うわああっ!？」

俺の背後にいた。驚愕したのはその姿である。『リング』の貞子のように長く、黒絹のような輝きを持つ髪の毛を前にたらしっていたのだ。

「いきなり背後から現れないでくださいよ……寿命が縮むかと」

「大丈夫だ。綾瀬くんはまだ若い! 気にしないでくれたまえ! はっはっは」

女性らしくない豪快な笑いかたをする彼女の素性はほぼ不明。年齢、永遠の二十五歳。趣味、不明。住所、不明。

何もかもが分からないのだ。しかし、ここで働いている人間は決して素性を探ろうとはしない。なぜならここで働いている人間は全員、何かしらのことを隠している。

俺なんかの場合だと、『血のクリスマス』に巻き込まれたこと、超能力者だということだ。

「それでこんな朝早くから来たのは何の用だ？」

「分かっているでしょう。とばけないでください。この件はさっさと終わらせたいんです……」

「まあそれもそうだな。とりあえず座ろう」

書類やら何やらで足の踏み場が少ない事務所には氷室ビル、と呼ばれる書類で山積みになった彼女のデスクがある。地震があるとあのビルは倒壊し、俺たちが一緒になって片づけをしなければならぬという暗黙の了解もある。

客が来るときは大抵、床に積み上げてあるものは脇によけるのだ。そんな汚いところにも客が入ってきてくれるのはとてもありがたいのだが、汚いところには汚い仕事が半分くらいあるのだ。

類は友を呼ぶ、みたいな感覚なのかもしれない。

「今度の依頼は『血のクリスマス』の首謀者についてだ」

「……………」

あの事件の首謀者は未だに捕まっていない。警察と自衛隊は首謀者以外は全員、逮捕、もしくは死亡している。警察の取調べで分かったことだが、首謀者の名前は能力者の集団の幹部でさえもは分かっていた。いなかった。

「首謀者の可能性のある人物の素性を探ってもらいたい」

「…………誰からの依頼ですか？」

「お前を拾った人間だ」

氷室さんは薄い笑みを浮かべつつ言った。

「断るに断れない相手ですね……………そもそも何で俺がそんなことやんなきゃいけないんですか」

「湖南くんは仕事、他の人たちも仕事や私用で行けないんだ。君は暇だろう？」

「暇っちゃ暇だけど……………」

首謀者をいまさら捕またとところで何になるんだ。家族は死んだ、何も無いのだ。いまさらそいつを見つけて殺したからって俺の何が満たされる？

「超能力の原点に関することになるとしたらどうする？」

「ほう……………」

俺は自分の能力を一刻も早く消して周囲の人間におびえる生活から解放されたいのだ。それを知った上での氷室さんの頼みか。

「分かりました……………今日中には答えを出しますよ」

「ありがたいな。待ってるよ」

そう言っただけ俺は事務所を後にした。

「つたく……」

事務所からイライラした足取りで俺は通学路を歩いていた。あんな仕事絶対やりたくないのだが……

「恭耶さん」

この甘ったるい声の持ち主は、

「恭耶さん」

この際、面倒だから無視しよう。

「なんで無視するんですか？わたし怒っちゃいますよ？」

そう言っていると彼女は俺の横に並んだ。女子の中では小さい部類に入るであろう身長をした女の名前は天笠時雨だ。あまかさしぐれ黒髪の肩までかかったショートヘア、湖南とは正反対のまっすぐを見据えた大きな瞳。制服を強引に大きく隆起させる二つのカタマリは人並み以上の大きさだ。性格や友好関係などはよく知らないが、俺以外と接しているときは内向的な性格を見せる。

「あなたの愛妻ですよ？お嫁さんですよ……」

そうして無視し続けていると、

「うつ……うつ……ひ……」

泣き始めた。どんだけ面倒な女なんだ、こいつは。

「ああ……無視して悪かったな。おはよう、天笠」

「おはようございますっ！ 恭耶さんっ」

袖口で顔をごしごし拭いて、

「わたし朝から恭耶さんと会えてすごく嬉しいですっ！ ああもうすごく幸せ……」

「気分をそれ以上昂揚させるな！ まずいことに……ゴフッ！？」
ズドン！

今の音は俺がアスファルトにめり込んだ音である。

言ってしまうと天笠は超能力者である。物理法則を増幅させる能力……だっけか。だがそんな能力も制御できなければ意味がない。

「ああ！ 恭耶さん、大丈夫ですか！？」

「ああ大丈夫だから早く俺から離れ……ゴフッ」

天笠は重力という物理法則を増幅させたのだ。一部の超能力者には感情と能力に何らかの関係があるようだ。で、彼女の場合は感情が不安定になると能力が暴発するといった具合で見事に俺がアスファルトにめり込んでいるのだ。

「まずは深呼吸だ、天笠」

未だに重力が増幅しているようで立ち上がれない。まるで背中に人が五人くらい乗っかっているような感覚だ。

「はっ、はいっ！ スー……ハー……」

ようやく背中の重みが和らいできた。あのままだったらおそらく血を吐いて死んでいただろう。それにしても天笠の能力は強大である。効果範囲がいくら狭いとはいえ、俺を苦しめるとは。

「これ以上俺から血を抜くなよ……死ぬ……」

俺は現在、貧血なので血を抜かれると貧血がもつとひどくなってしまうのだ。それだけは避けなければならない。いろいろ問題が発生するからだ。

「ごめんなさいっ……恭耶さん……」

「いや別にいいから……それと早く学校に行かないと遅刻するぞ。」

このアスファルトはどうでもいいからさっさと行くぞ」

見るとアスファルトの道路にはくつきりと俺がめり込んだ形が残っていた。同級生たちに見られていなければいいが。俺はほこりを払いつつ、

「ボサっとするな。走るぞ」

「あ、はい！ 待ってください、恭耶さん」

一つ追記しておこう。なぜ彼女がそんなに俺にひつついてくるのか。他人から見れば俺はただのモテ男だろうが、違うのだ。この事情はもつと歪んでいる。ま、今はそんなことどうでもいいか。

「これで何とか間に合うな」

「そうですね恭耶さん」

「なんでお前はこっちに来てるんだ。お前は一年生だろ。教室は一階のはずだ」

「身体的、社会的には一年生かもしれませんが、わたしの心はいつも恭耶さんと同じ年齢ですっ」

お前の身体つきは二年生以上だぞ、と言ってやりたかったが心に留めておくことにした。それでまた天笠の感情を揺さぶって、この廊下の床が抜けて地面にひれ伏すのもイヤなのでな。

「だからほら、さっさと行け。遅刻になるぞ」

「……わかりました」

すこし不服そうな顔で階段を下りて行く天笠だった。彼女は俺が視界に入る限り俺を見るらしく、横目でずっと俺を見ていたのは怖い限りである。

「ふう……」

なんとかホームルームぎりぎりのところで間に合い、教室に入る。担任が適当に挨拶をして、その後何もなく一時間目が始まった。これといって特筆することは何もない。強いて言えば俺が体育の時間に教室で寝ていていつの間にか授業が終わっていたということくらいだろう。そして今、昼休みに至る。

「綾瀬くん！」

湖南か。学校では元気っ子を演じてるんだっけな。学校にいる間は彼女の三文芝居に付き合わなければならぬという俺と湖南で交わした規定がある。

「なんだ、湖南」

まあ、俺は普通の態度で接するだけだが」

「今度の仕事はなんだって？」

「『血のクリスマス』に関することだったよ。それも結構重要そう
な」

「へえ……所長も無理言うね。まあ、ファイトだ！ がんばれ！
プロテインだ！」

彼女の本質を知っている俺にとってはこのセリフは、『へえ、あつそ。別にどうでもいいんじゃない？』という風にしか聞こえないのだ。しかしクラスの男子から湖南は一目置かれているらしい。な

んでも、あの無邪気さがたまらないだとか、純粹に可愛いとか。女子にも受けが良い。さすがは現代の怪人二十面相。世渡り上手である。

ウワサによれば、この学校の美少女ベスト3くらいに入るくらいなんだとか。どうでもいいか。

「ほどほどにがんばるよ」

「そいじゃ、わたし先生に用事あるから。バイバイ」

湖南はスタスタと行ってしまった。

そして今気付いたのだが、周りの男子数名の視線が痛い。お前らだって湖南に愛想振りまいてもらっているだろう？ あいつは人間関係で失敗しないからな。

「恭耶さ〜ん」

教室のドアの前に天笠が立っていた。俺は日常茶飯事のように、逃げるための常套句を言った。

「誰か保健委員はいるか？ 急に頭が痛くなってきたから保健室まで連れて行ってくれ」

「だっ、大丈夫ですか！？ 今すぐ薬をお持ちしますねっ！」

ダッ、という音と共にどこかへと消えていった。さて、今のうちにカバン持って逃げてそこで飯を食うか。とすると……

「あ、ありがとうございます！ 先生！」

天笠が保健室から出ていく。彼女は俺のウソを信じ込んだらしく、保健室に来て頭痛薬を取りに来たのだ。コンビニでは売り切れだったらしい。ちなみに俺は今保健室の人体模型の裏に隠れている。

「もう良いよ、綾瀬くん」

「はあ……サンキュ、千紀先生」

せんき まこと

そう言ったのは保健室の先生、千紀信である。しかし彼は保健の先生とは思えないような風貌なのだ。ダルそうな目に、ぼさぼさの頭。無精ひげを生やし、タバコのような危険な何かをいつもふかし

ている。身なりをしつかりすれば相当男前になるのだが。

「いや、綾瀬くん、お熱いねえ……」

「そんなんじゃないの？」

ちなみにこの先生、俺のかかりつけの病院の医師である。だから彼と俺は親交も深い。千紀は勤務医で、暇なときさえあればここにきているらしい。学校はそれで助かっているようなのだが。

「で、何しに来たの。カウンセリングか金を借りに来たか、はたまた実験台になりに来たか」

「今アンタ医者として言っちゃいけないことを言った気がするぞ！？」

「気にしない気にしない」

千紀には自分が医者だという自覚が無いようだ。大変困る。

「話を戻すと……俺はここに休憩がてら飯を食いに来た」

「別にいいけどさ……君、ネクラなの？ それとも昼行灯？ パシリ組？」

「どっちも違う。今日は気が向かないだけさ」

「別にこの部屋をどうしようとか構わないんだけどさ……あ、その植物にだけは触らないで。高かったんだから」

この植物、テレビで見たことあるな。確か持ってるだけでお縄にかかる植物だ。なんで学校にこんなもの持ってるんだろう。不思議だ。

「じゃベッド借りる」

「あいよ」

ここに来る途中の購買で買った菓子パンを食いながら、天井を見上げる。ああ、つまらないな。まだ仕事をしているときのほうがスリルがあつて楽しい。俺の仕事の内容も後々分かるだろうからあえて説明しない。

そんなことを思っていると、

「悪い！ また怪我しちゃったぜ！」

男口調で保健室にズカズカと入ってきたとなりのクラスの女子生

徒の名前は秋月七紫だ。あきつき ななし特徴といえば人懐っこく、誰とでも話せる人間である。ポニーテールにした髪の毛は手入れが行き届いていて、ちよつと鋭い目つきと口調が男勝りを加速させている。ボディラインは標準よりすこし控えめである。運動でもしてきたのか、彼女の体からは女性特有のにおいがあつた。

「千紀先生、絆創膏持つてきてくれないか？ サッカーやってたら転んじゃってさ……」

「ちよつと待つて。新しいの開くから……あれ、どこだっけ……」
千紀のあの調子だと絆創膏を見つけるまでに時間がかかりそうだ。
七紫は俺の横に座り、

「お！ 綾瀬！ ちわっす！」

「七紫、ちわっす」

彼女は苗字より、名前のほうで呼ばれることを望んでいるため俺もそうしている。クラスメイトのやつらだつてほとんど名前で呼んでいる。

「綾瀬は何してんの？」

「見りや分かるだろ。飯食つてんだ。それにしても、お前は相変わらず元気だな」

「おう！ 元気が取り柄だからな、アタシは」

「それも見れば分かる。七紫、お前が転ぶなんて珍しいな……ファールでもやられたか？」

彼女はクラスの中で抜群に運動神経がよく、たまに部活の助っ人としてやっているくらいなのだ。しかし、七紫は部活には所属していない。事情は知らないが、彼女なりの事情があるのだろう。

「いや、たまたま足がもつれただけだ。カッコ悪いよなあ……」

「人には失敗なんてつき物だ。気にすることは無い」

「サンキュ、綾瀬。そうだ、お前も一緒にサッカーやらないか？」

お前、けっこう運動できたはずだよな？」

「全然できない」

「ウソつくなよ。お前、痩せてそうに見えて結構引き締まった身体

してるしな」

良い観察力をしているなと思う。俺の身体つきを気にするヤツもいないし、見抜くヤツも相当少ないだろう。

「俺の着替えでも見たか？」

「いや！　べ、別に見たくて見たわけじゃないぞ！　ほ、本当だからな！」

「別に良いけど……」

なぜそんなに動揺するのがよく分からん。別にどうでもいいことじゃないか。

「ごめん、秋月さん……見つかるのに手間取っちゃって。はい、絆創膏」

「ありがと、先生」

そう言つて、絆創膏を慣れた手つきで貼ると、じゃあな！　という一言を置いていつてしまふのであった。

「はあ……」

「どうしたの、ため息なんかついて。綾瀬くんらしいっちゃ綾瀬くんらしいけどさ」

「いや、世の中元氣があるやつはあるんだなあと感慨にふけていただけだ」

「低テンションだね、君は……おっともうこんな時間だ。雑談も楽しいけど、そろそろ僕は病院のほうに戻るから。カギ置いておくから職員室に返しといて」

「分かった」

彼は机の横にかけてあったカバンを持ち、タバコのようなものを灰皿に置くと、部屋から出て行くのだった。

「……寝るか」

授業を受けるのも面倒なので、ここで寝ていこう。留年さえしなきゃいいのだ。俺はくだらないことを思いつつ、まどろみの中に、身を落とした……。

……………。

.....
.....
.....。

キンコンカーンコン。

「ふあ……」

まぶたをこすりながら時間を確認する。眠っていたらいつの間にか帰る時間になっていたらしい。寝起き宜しく、身体が重い。

「そうだ……事務所寄って行かないと」

あの件についてまだ話がついていなかった。報酬を高めにして、受けようかな。どうせ頭の切れる氷室さんのことだ。受けないという選択肢は俺には与えられてないのだろう。

保健室の鍵を閉め、職員室にそれを戻して今まで真面目に授業を受けていた生徒に混じり、学校を出る。

東京の雑居ビルの階段を三階まで上がって、扉を開く。すると、

「湖南か。早かったじゃん」

「アンタが保健室で寝ただけでしょ。あー、そんなことよりお茶持ってきてお茶」

「俺はお前の奴隷じゃないんだ。自分で取りに行け」

ちなみに俺は氷室さんの勅命で湖南（素）に社会的ルールを教えろという命を受けている。だからこんな柄でもないことを言うのだ。

「何？ アタシに逆らうってワケ？ 良い根性じゃない……」

「俺に非は無い。常識を言っただけだ」

「死ね！ このっ……！」

彼女が俺に襲いかかろうとしたとき、

「そこまでだよ、湖南くん」

「なっ……」

何の前触れも無く、氷室さんが俺たちの間に立っていた。

「ケンカはよしたまえ、君たち。大人気ないぞ」

「へいへい」

「分かったわ……」

俺は適当にそれを流し、湖南は忌々しげに了解の言葉を言うのだ。
「た。」

「それじゃ、綾瀬くんは座ってくれ。本題に入ろう。ああ、湖南くんは仕事に出てくれ」

「はい」

湖南はダルそうな足取りで事務所から出て行った。俺に聞こえるようにしたうちをして。かくいう俺は朝と変わらず、書類で埋もれた道を突き進んで椅子に腰掛けた。

「綾瀬くん、あの件は受けてくれるのかい？」

「どうせ受けないって言っても受けさせるようにするんですよ。受けますよ……その代わり、給料をすこし多めにしてくださいよ」

「はっはは。良いだろう、その代わりしっかり働いてくれたまえ」

「で、内容は？」

「横浜のほうに廃ビルがある。そこが首謀者の隠れ家だったようだね……その調査をお願いしたい。資料があるらしいから、それを警察よりも早く見つけて欲しい。もし先に誰かに取られてたら……」

俺は氷室さんの剣幕が変わったことに気付き、生唾をゴクリと飲み込む。

「殺して構わない」

俺の仕事は大半が一般的なものだ。猫探したり、不倫疑惑のかかっている人のあとをつけたり、学歴を詐称してないか調べたり。ヒマなときもちゃんとある。

ただ、この探偵事務所は基本的に何でも受け付けるので、たまに危険な仕事が舞い込んでくるのだ。

殺し。

ヤクザとヤクザの間での抗争に首を突っ込んで人を殺したりする。殺して欲しいという人間を殺す。そんな仕事は大抵俺に回ってくる。

なんせ超能力者なのだから。

その仕事は生傷が絶えないので、千紀先生特製のクリームを塗って傷を見えないようにしている。彼はあんなでも腕だけは確かなのだ。

「殺すんですか？」

「ああ。ちよつとこれは大事な用件なんだ。まあ、できるだけ早く行って無駄な犠牲を出さずに済ませてくれ」

「……分かりました」

殺してでも依頼を成功させろ、というのは相当な依頼主とそれ相応の報酬なのだろう。

「じゃあ、そのビルに行くのは明日だ。明日、学校が終わったらこの地図の場所に行ってくれたまえ」

氷室さんはノートパソコンを指差す。そのパソコンで検索した地図に印がついていた。

「じゃあ、あとでそれ印刷してもらっていいですか？ 携帯でも見れますけど、分かりづらいんで」

「分かった」

印刷機から地図を受け取る。明日は大事な仕事のようにだ。今日は早々に帰ろう。

「それじゃ」

「ああ、がんばってくれ」

気付けば、それはオレンジ色になっていた。帰りがけに飯でも食って帰ろうと思い、店に入ると、

「……おっちゃん、おかわり！」

なぜか、七紫がいた。なんかアニメで出てきそうな大きさのどんぶりを持っている。あれをおかわり？ 空耳だよな。うん。

「よう、七紫」

「あ、綾瀬！？」

「俺もここに食いに来たんだ。安かったからさ」

「ぐぬぬ……」

なんか俯いてるぞ。おかわり宣言したときとはまるで正反對のテンションだ。

「どうした？ 具合でも悪いのか？」

「そうじゃないんだ……えと、さ……」

「なに？」

「いや、なんか……こうガツガツ食ってる女の子ってカッコ悪いと思わないか？」

彼女も一応女子なのだから、派手に食っているところを見られて恥じらいを感じたのだろう。

「別に気にならないけど。でも、それが七紫っぽいといえば七紫っぽいからそういう食べ方のほうが良いかもな」

「そうか……うん、そうだよな」

「えと……俺はそうだな、焼肉定食一つ」

七紫は物理法則を超えたような反応速度で俺のほうへ振り向き、

「綾瀬！ 分かってるな！ この店の一番のお勧めメニューは焼肉定食なんだ！」

「へえ、そうだったのか。七紫も焼肉定食か？」

「当然そうだぜ！ この店の焼肉はムチャクチャうまいんだ！」

「だいぶ気に入ってるみたいだな」

そう無駄口を叩いていると、七紫絶賛の焼肉定食が俺の目の前に置かれていた。その焼肉を口に運ぶ。

「うまい……」

硬すぎず、そして柔らかすぎない肉の弾力。そして万人の舌に合

うように味を調整されたタレがきつちりと肉に染み込んでいて、白米に自然と手が伸びる。この味は非常にクセになる味だ。

「良かったな！ 綾瀬！」

「ああ……お前は普段からここに來てんのか？」

「親が帰り遅いから……大半はここで食べるな。値段も結構安いほ
うだし、おいしいしな」

「そうか。俺もコンビニ弁当やめてここ來ようかな……七紫もいる

「んだろ？」

飯のときの良い話し相手にもなりそうだ。飯は一人で食うより、複数で食ったほうが気分が良い。

「大抵はいるぜ？ それなら時間帶來ようぜ！」

「ああ。じゃあ今くらいの時間でいいか？ あ、でもたまにバイトで来れないことがあるし……」

バイト、、というのは当然事務所の仕事である。何時に終わるかはその依頼と俺の腕にかかっているため、九時近くになるときもあるし、仕事開始から十分で終わることもあるからだ。

「じゃあさ……」

七紫はその小さな唇をゆつくりと動かし、

「携帯の番号交換しないか？」

「いいぜ。そのほうが連絡も取りやすい」

ということと七紫の携帯の番号をゲット。必要外の場合はあまり使わないようにしよう。それが礼儀だろう。

「じゃ、俺そろそろ帰るわ。七紫もほどにしとけよ。腹壊すぞ」

「ああ、でも今日はこれで終わりだぜ。じゃあな、綾瀬」

「おう」

代金を払い、店を出る。十二月の寒さが上着を着ているときでも肌を突き刺す。

「寒い……」

町はクリスマススムード一色である。ホログラム技術を試用した、イルミネーション。サンタクロースに扮して店の宣伝をやっている若い女性。そして何よりも、街には本番一日前だというのにもかかわらずカップルがちらほらちらほら。正直に言くと、イライラする。なんか見せ付けられてるような気がするのだ。全国五千万人の彼女に恵まれない男子全員が思うことだろう。俺にも彼女が欲しいな……

「わたしのこと、呼びましたか？」

「あ、天笠！？」

後ろから、しかも俺の心の中の声を読んでタイミングよく現れたのだ。

「で、今までどこ行つてたんですか？ わたし今までずっと恭耶さんのことを捜していたんですよ？ ねえ恭耶さん、どうして騙したんですか！ わたしはあなたのことをこんなに思っているのに！ しかもその店で他の女の子と食事してたじゃないですか！ わたしとは一緒にしないのに！ ねえどうしてですか！？」

そう言つた瞬間、彼女の能力の暴発により、電柱がすこし曲がつた。周りの人間はあまりそれが視界に入っていなかったようだ。気が付いた人数は少数で、彼らもこのことをすぐ忘れると思う。

そして、なぜ、彼女が俺にここまで執拗についてくるのか。それは一年前ほど前の話だ。

彼女は自殺を図つていたことがある。

いじめだか何かで精神的に追い詰められたのだろつ。当然今の学校とは違ふところだ。それで、天笠を心配した彼女の母親が事務所に依頼に来たのだ（なぜ素直にカウンセラーの所に行かなかったのかは、分からない）。

それで俺が相談役を務めることになり、その仕事を遂行するべく天笠の部屋に入った瞬間、彼女は首を吊つていた。すぐさま俺が下ろして一命を取り留めたのだが、どうも助けに来た俺を自分にとつての王子様や何かと勘違いしてるらしく、俺に付きまとうのだ。

わざわざ、転校先を変えたり、通学路を遠回りしたりと。まあ、そんなところである。

「悪かつたよ。騙してゴメンな」

「あつ……いえ、ゴメンなさい……わたしつい……」

「良いんだ。こっちが原因なんだし、すまなかつた」

「じゃ、じゃあ……途中まで一緒に帰つてください……」

上目遣いで俺を見上げる天笠。上着からも二つのカタマリが隆起しているので、そちらには目線を行かないように自分をコントロールする。

「分かった。ただし、俺の家まで来るなよ、約束だからな」

「はいっ！」

会話などは特に無く、歩く。ほんのちょっとした道のりなのだが、天笠を意識してしまう。だって今日はクリスマス前日だぜ？　こんなことしていたらカップルみたいではないか。

「恋人同士みたいですね……」

「……そうだな」

面倒だ。恋人なんて、大切なものなんて、作ったところで失ってしまうのが関の山だ。どうせ……

「？　顔色悪いですよ、恭耶さん。どうしたんですか？」

「いや……なんでもねえ……」

落ち着け。平常心だ、平常心。ふうと大きく息を吐き、気分を落ち着ける。すると、いつの間にか天笠と別れるところまで来ていた。

「んじゃあな。また今度」

「さよなら、恭耶さん」

おそらく、俺が視界の外に行くまで彼女は俺のことを見ているだろう。過去にもそういうことがあった。しかし、俺はあえて振り返らない。彼女にはしがらみのない生活を送って欲しいのだ。

感情を動かす要素があれば、天笠の超能力は発動してしまうのだから。そんな要素　要するに俺だ　を気にしなければ、普通の生活を送っていけるのだから。

トボトボと歩いているといつの間にか俺のアパートの前についていた。ポケットから鍵を取り出そうとすると、

「あれ……」

いつも入れている場所に無かった。カバンの中にも、その他のポケットにも入ってなかった。

「面倒だな……」

仕方が無いので、鍵を作ることにした。材料は鉄で良いはずだ。なぜか、筆箱の中に黒いドライバーが入っていた。おそらく午前中の授業のどこかで入ったのだろう。

これくらいあれば十分だ。鍵の形を思い出す。毎日使っているものだ、鮮明に思い出せる。視界が一瞬ぐらりと揺らいだ瞬間、

「はあ……」

後ろの部分が黒い、サイズ大きめの鍵が出来た。

俺の超能力は手に触れたものの物質を変化させる。そういつても材料にしたもの以上のものは作れないし、材料以下のものも作れない。一は一を足さない限り、二にはならず、一を引かない限りゼロにはならない。所詮一は一でしかないのだ。

そして何よりもこの能力、欠点があるのだ。それは、能力を使う度に俺の血液を消費する。だから貧血のときが多いのだ、俺は。しかし、この能力があつたおかげで生き残ってこれたのもまた事実である。

作つた鍵をさして、家の中に入る。壁に寄りかかり、テレビの電源をつけた。

例の人類の技術革新集団からの宣戦布告から十時間あまりが過ぎた。未だにメディアはこのことを報道し続けている。超科学もあの後に兵器のデモンストレーションをした。二トンハイブリットトラックをその人型兵器が片腕で持ち上げたとか。それは人が乗って使用するもののように、動きも思いのままらしい。

俺はあの後、布団に入ったが、二時間しか眠れなかった。こんな最悪のコンディションで仕事に行くのは嫌なものである。

昨日同様今日も仕事現場に向かう足取りは、鉄球をつけているかのように重い。とりあえず電車を乗り継いで、その廃ビルの前に到着。鉄骨やら何やらがあるから身を守るのに苦労はしないだろう。いざというときは能力を使っただけだ。

「何も無い……」

人気がない。足音を立てずに、奥へと進んで行く。そして一番奥

が視界に入った瞬間、俺は息を飲んだ。人が、いたのだ。とっさに身を隠す。

後ろ姿からして女。身長はそれほど大きくなく、ウェーブのかかった髪が肩まで届いている。ごそごそと何かを探しているらしい。まだこつちには気付いていないようだ。

（殺すか……？）

何人も殺してきているのに。殺すことに仕事だから、と言いついてきていたのに。どうして、こんなに鼓動が加速しているのだろう。まるで、初めて人を殺すような感覚だ。

昨日のことで俺の何かが揺らいでいるのか。一体何に？ 分からない。とにかく、さっきからうるさいほどに動悸が激しい。

「あつた……」

女が透き通るような声でしゃべった。あれは……ストラップ？

（何を迷っているんだ……！？ 俺は！）

俺は物陰からダツ、と飛び出し、その女が気付いたときには彼女の目の前に立っていた。澄んだ瞳、まだ中学生くらいだろうか、顔にすこしあどけなさが残っている。

「ここに何をしにきた」

務めて冷静な声でたずねた。

「え……えと……」

動悸がまだ止まない。彼女に恐怖を感じているのか。そんなハズはない。一体俺が何回窮地を切り抜けてきたと思ってる？

「わ、忘れ物ですつ……」

「何を忘れた？」

「ストラップなんです……大切な……大切な」

愛おしいように手に握ったものを見つめる。

そうだ、殺さなくなつて良いんだ。誰もいなくなつたと氷室さんに報告すれば済む話じゃないか。ははっ、アホみたいだ。

「そうか……俺もここに探しものに来たんだ。宝探しみたいなもんだ」

「面白そうですっ」

こいつは幼稚園児か。

「お前は帰れ。っーか学校はどうした」

「そういうあなたも学校をサボっているんじゃないんですか……？」
凶星である。

「そういえば、申し遅れました。わたし、神原沙希かんばら さきと言いますっ」

「俺は名乗るほどのものじゃない」

「ズルイですっ。大人な逃げ方はダメですっ」

どうやらこれは神原という女の中では大人な逃げ方に入っているらしい。というか俺は何をしてるんだ。仕事をしなければいけないのに。

「良い子は帰れ。後ろのそのデスクに探し物があるんだ」

「ダメですっ」

「どけ」

「ダメですっ」

「どけこの野朗」

「ダメですこの野朗っ」

「どかねえと剥くぞこの野朗」

「わたしは剥けませんこの野朗っ」

実に子どもっぽいや会話になってしまった。ここは、

「じゃあ、どうしてダメなんだ？」

実に温厚かつ、優しい口調で言った。

「それは……」

彼女が何かを言おうとした瞬間、

「ッ！？」

ガンツ、と鉄に何かをぶつけたような音がした。何かがこちらへ向かっている。これは足音だ。それも複数。

そして現れたのは、昨日の超科学の鎧だった。

「貴様ら、何をしている」

そうだ。超能力者だっということがバレたら殺される。ニトンの物を

片手で持ち上げられるほどの力で。

「ああ、昨日の……」

「ああ。そうだ。このあたりに超能力者がいると命を受けたんだが……貴様ら知らないか？」

「知らないよ、俺はここに探し物に來ただけだ」

「そうか……」

その超化学の鎧が立ち去ろうとしたとき、

「やってやりますっ……」

神原が懷から取り出した手榴弾を持って、そいつに突撃していった。そのまま背後に投げ　ズドン！

鼓膜を引き裂くような轟音が轟き、爆発した。一步間違えれば、この廢ビルごと壊れていただろう。

「えっ？」

俺は驚愕した。爆発の粉塵舞う中、その鎧は傷を残すどころか、爆発を吸収したかのように赤く光っていた。

「貴様……何をする！？」

「そ、そんな……」

鎧の腕が上げられる。神原は腰が抜けて動けない。あのままでは神原は人肉ミンチになる。だから、何だというのだ。何度も見てきたじゃないか。それがどうした。助けたら、俺が超能力者だってバレルのだ。

それなのになぜ、俺は、走っているのだろう。

「神原、下がれ！」

地面のコンクリートを使い、自分の目の前に壁のようにそびえ立たせた。神原を抱きかかえるようにして伏せる。

そして、俺の後ろでそれがはじけた。

「お前は走れ！　分かったな！？」

あー。なんでこんなことしてんだ、俺。別にこいつを助けたところで何の利益にもならないだろう。良心でも芽生えたのか。

「貴様……超能力者だな……」

「ああ、そうさ。それにしても随分頑丈そうな鎧だな」

「貴様の質問に答える義務は無い！」

鎧だけってことか。こつちには地の利がある。材料があれば、こつちのもんだ。いくらでも武器が作れる。もういけどな。あとは、どう相手に取り付くか、だ。取り付いたら勝てる策はある。

「ふんっ！」

鼻先数センチのところで凶暴な腕が振り回される。流石に相手の鎧の原理や弱点が分からない限り、体力を削られるだけだ。

俺は大きく距離をとり、壁に手をあてて、棒のようにして伸ばした。それは向かってくる鎧に当たるが、砕ける。まあ、コンクリートなのだから、期待はしていない。

「無駄なことだ」

「次だ……！」

しかし、血を抜かれるっていうのはイヤことだ。頭がくらくらする。

さっきの攻撃をもろともせず、鎧が突っ込んでくる。速い。車くらい速いのではないだろうか。俺はとっさに横に飛んで、突進を回避した。

コンクリートの壁に穴が開き、鉄骨が見えた。そしてその鉄骨でさえも、曲がっていた。驚異的な硬さとスピード。取り付くには何かで相手の気を引くしかない。

「それにしてもさっきの女逃がして良かったのか？　もしかしたら超能力者かもしれないぜ？」

「心配には及ばん。貴様を粉々に砕いて、それからじっくりといったぶってやるのだからな」

「遠くに逃げているかもしれない。タクシーとか電車とか使ってさ」「それもまた然り。この鎧によって身体能力が強化され、数十倍に上がっているのだ」

「へえ……それよりもなんでこんなことをしようとしたんだ？　『血のクリスマス』はもう八年前のことだろう？　捕まってるのは

ああああ！」

俺はこのとき、人生で二度目の死を意識した。とにかく、周りの物を全部鎧に向けて伸ばし、鉄骨を使い、鉄の壁を作る。時間を稼いで、逃げるしかない。

「はあっ、はあっ……！」

逃げても追いつかれるだけだ。走るのは無駄なことだが、仕方ない。本能的に逃げてるのだから。

「神原、お前なんでここにいるんだよ!？」

「そんなこと今は良いじゃないですかっ！ それより、あの鎧どうにかしてください！」

「なんでだよ!？ お前超能力者か？」

「そうですっ」

なんてこった。ここに超化学に反逆する者が約二名。ああ、なんだが不運だ。

「良いか、お前はとつとと逃げる。俺のほうがおそらく実戦慣れしてるからな……ひとまず遠くに行け」

「イヤですっ！ あなたは命の恩人なんですから、見捨てるわけにはいきませんっ……それにわたしはあの鎧に関する情報を少し知ってますし」

「本当か!？」

後ろから鎧が追ってこない不自然だ。あのスピードで走れば、俺たちなんて瞬時に捕まえられるだろうに。

しかし、そんなことは後回しにして、今はこの危機的状況をどう回避すればいいかを先決しなければならぬ。それには弱点などの特徴を掴む必要がある。

「知人から聞いた話だと、あの鎧は一定の耐久力があるみたいなんです……あと銃は連射性能は悪い、だとか……」

「鎧に耐久力？ どれくらいで壊れる？」

「分かりませんが……爆弾一つ程度では壊れないという事ではないでしょうか……」

まだ、不明瞭だ。こうなったら別の手を考えるしかない。となる
と、

「神原、今から言うものを捜してきてくれ」

「ふう……」

背後に気配。ようやくお出ましのようだ。

「遅かったじゃないか。オイル交換でもしてたか？」

「オイルなど時代遅れのものは差さん。貴様の作ったコンクリート
だの、鉄だのの壁を破壊するのに手間取っていただけだ」

プラズマガン、という武器はどこかに捨てたらしく、手に持ってい
なかった。はたまたどこかに収納してあるのかもしれない。どち
らにしる俺にはそんなことどうでも良かった。

「超科学と言ってもそこまでか」

挑発すれば、相手が勝手に乗っかってくるはずだ。こちらに来て
くればそれでいい。

「愚弄したな！？ このゴミがあああああああ！」

人間では考えられないスピードで突進してくる。まるでダンプカ
ーにはねられる寸前みたいだ。

「よし……」

俺は陰に隠れている神原に合図を出した。そして、突如、恐るべ
き量と水圧で水が飛び出した。そう、水道管を割ったのだ。さっ
き確認したところ、廃ビルであるがまだ水道が通ってるらしかった
のでこれを使った。

その水圧は超科学の鎧をも止めるほどの威力だった。

「なっ……！？」

俺は金属で作った槍を片手に鎧に突っ込んだ。動きを止めている
今がチャンスだ。

「そりゃ！」

槍を力一杯鎧に向かってぶつけるがビクともしない。まるでコンクリートの壁にぶつけたような、振動での痛みが走る。

槍を投げ捨て、俺は素手でその鎧の胴あたりに触れ。

「貴様らのようなゴミ如きがアアアアアアアアアアア！」

「この野郎……！」

直後、鎧の背中から棘が出た。赤い液体を帯びた、棘が。俺は鎧の形を変化させて、内側から破壊したのだ。外がダメなら内側、すなわち肉体を攻撃すればいいだけの話。

鎧の前側を材料に、それを棘にして後ろ側へ伸ばせば肉体に直接ダメージを与えられる。

そして、最後は頭。

「ク、ソ、能力者ど、も……」

「クソじゃ、ない……」

ズブリ、と俺だけにしか聞こえないくらいの大きさで頭を貫通する音が響く。こんな至近距離で頭を貫くのは初めてだ。

ちなみに、前側の鎧が少しへこんで、背中側から大きな棘があるだけなので、死体は見えない。関節部分であろうところからは溢れた血液が少しずつ出てきている。神原はこのような惨状を見慣れていないだろう。ましてや頭を貫かれた死体なんて俺でもきつい。

「終わった……」

能力を使いすぎたせいか、足元がおぼつかない。家に帰れば、輸血パックがあるからそれを使えば応急処置程度にはなるだろう。

「だ、大丈夫ですかっ!？」

「ああ、全然問題ない……ゴフッ」

「血吐いてるし、顔色が真っ青ですよ!？」

「じゃあ、タクシー呼べ……それでオーケーだ」

「あ、分かりましたっ。えと……」

「表出て、タクシー呼べ」

「はいっ」

神原は小走りで外に向かって行った。ちなみにこれはウソだ。こんな廃ビルの前にタクシーが来るとも思えないし、疲れていたの少し休憩したかったのだ。疲れきった俺は、ゆっくりと、目を閉じた。

意識がだんだんと覚醒してきた。あれ、なんかすごく身体が軽い。さっきまでの自分の身体とはおもえないほどに。

「……あ、う？」

辺りを見回すと神原がちょこんと座っていた。まあ、普通、来なかったら外で待つか、知り合いにタクシー回してもらうか、ここか家に帰るしかないわけだが。彼女はあえて一番不利益な解答を選んだというわけだ。

俺のことはもう、おそらく超科学の連中に知られているだろう。

超科学の手先を一人殺したのだから、またあの鎧に追われたって不思議なことは何も無い。

「おい、神原……」

「あ、気が付いたんですね、綾瀬さんっ！」

「……なんで俺の名前を知ってるんだ？ まさか……」

「おそらく綾瀬さんの言ってるそのまさかだと思いますっ。お財布の中に入っていた学生証を確認させていただきましたっ」

追われるはずの身の俺は意外と無防備だった。

「はぁ……で、財布は？」

「ちゃんとともに戻しましたよ？」

ズボンの右ポケットを確認するとしつかりと財布が入っていた。

「そういうところは礼儀正しいんだな……で、ここに残ったっていう事は俺に何か用でもあるのか？ それとも何だ、おうちに連れて行ってくださいの願いか？」

「ええええええ！？ どうして分かったんですか！？ 綾瀬さん、未来予知の能力も持つてるんですか！？」

「んなわけねえ。しかも超能力を二つ持っているヤツなんて未確認だぞ」

「そうでしたね、えへへへ」

照れくさくなったように笑う神原。それにしても家まで送って行つて、子どもかこいつは。

「あ、神原ちなみにお前、歳いくつだ」

「女性にそういうことを軽はずみに聞いてはいけませんよ？ 失礼です」

「何でお前から説教されなきゃならんのだ」

「わたしと同じ年だからです」

「理由になつてねえよ！」

一体なんなんだ、こいつは……ちょっと待て。俺と同じ年？ こんな童顔の女の子が？ またまたご冗談を、と思い頬をつねってみると痛かった。

「なんで、ほつぺたつねってるんですか？ もしかしてわたしがウソついてるとか思ってます？ これでもわたしは高校二年生です！

綾瀬さん、失礼です」

「ははっ、俺、死んでんのかな……？」

「現実から目を背けないでくださいっ！」

両手を上に挙げて怒る様子はまるでマンガの幼児がやるような行動であつた。神原を一言で表現するなら小動物が一番正しいだろう。

「それに綾瀬さんはわたしの恩人ですけど、わたしは綾瀬さんの恩人でもあるんですよ？」

「どういうことだ？」

「綾瀬さんの顔色、元に戻ってます。身体は戦う前のように軽いです。さてどういうことでしょうか？」

そういえば、こいつも超能力者なんだった。要するに自分の能力はなんでしょう、って聞きたいのだろう。彼女は自慢げに腰に手をあてて俺の解答を待っているようだ。

「治癒系の能力か？」

「ブブブー！ 違います残念でした！」

神原はしめしめというような擬音が似つかわしいような顔を浮かべ、満面の笑顔を浮かべた。

「私の能力は……」

一千万円目の前にした出題のときの某クイズ番組司会者のごとき長い沈黙の後、彼女はこう言葉をつむいだ。

「対象を元に戻す、能力です」

「わたしは綾瀬さんの身体を戦闘前に戻したんです。記憶はそのままです。ある程度の制御ならできますっ」

「ああ……」

そんな芸当が出来るのか。それはちょっと驚きだ。超能力っていうのはまともなものがないと思っていたからな。井の中の蛙大海を知らず、と言った所か。

「通りで身体が軽いわけだ……もしかして、血も元に戻ってるのか？」

「はいっ」

「よっしゃ！ これで頭痛にならなくて済む！」

少し、というか超絶に嬉しかった。

「俺は能力で血を使うんだ。だから、貧血になる。それがないとなると相当、楽だ」

「それは良かったです……ただ、私の能力、どうやら生体にしか使えないみたいなんです……」

「物とかには使えないのか……じゃあ、質問だ。それは死んだ人間にも使えるのか？」

「……いいえ。死んだ人間は生体として認識されないみたいで元に戻せません……。死んだ人間は生き返らない、ってことなんですかね……」

少しだけ彼女の声のトーンが下がった。どうやら不快な思いをさ

せてしまつたらしい。

「そうだな。死んだ人間は生き返らないんだ。生き返したら、その人が死んだ意味がなくなるんだ。安易にそんなことをやっちゃいけない」

「綾瀬さん……顔つき悪いけど考えてることは善人みたいですねっ。あなたは優しい人ですっ」

「んなわけあるか……」

「照れてます？ 照れてるんでしょう？ 顔が少し赤いですよ」
神原はニヤニヤした顔をぐいぐいと近づけてくる。そのウェーブのかかった髪の毛からはほんのりといい香りがした。

「おいコラ……俺、一人で帰るぞ？」

「あ、ひどい！ 綾瀬さん鬼ですっ」

「さっきと言っていることが正反対なんだが……まあいい。さっさと帰るぞ。また連中に見つかるど厄介だ」

軽くなった身体を起こし、ビルの出口へと向かう。

「ま、待つてくださいよ」

何か大事なことを忘れてる気がするが……まあいいか。神原は俺の横をとことこ歩いてた。送り迎えまでしなきゃいけないのは面倒だがこいつはこいつで頭痛を回避してくれた恩人だ。せめてもの謝礼ぐらいはしないといけないのが道理だろう。

「で、お前の家ってどっちだ？」

「こっちです……ああ、電車使います」

「どこに住んでるんだ？」

「東京です」

「あ、そ」

住んでいるところが近所さんとかそういうアニメ的展開は望んでいないからな。氷室さんが手を回しているとそうなってしまうそうだから怖い。

「早くしないと電車乗り遅れちゃいますよっ」

「あ、ああ……」

電車にギリギリで乗る。かけ込み乗車は控えましょう。

あれ、氷室さん？ 氷室さん、仕事、依頼、書類……。

「はっ!？」

「どうしたんですか？」

「やべえ……書類取り忘れた……」

「書類？」

「あの机に書類があるはずなんだ……俺はそれを取りに行かなくちやならなかったんだ。やばい……帰らないとあの人に殺される……でも帰っても殺される確率が高い……」

絶対的な絶望状況。氷室さんの制裁は死ぬよりも怖い目にあうので避けたいものだ。それをやられると、社会的に死ぬ。

「書類ってこれのことですか？」

「は？」

神原が拾ったと言っていた、ボウリングのピンのストラップはフタで開閉するらしく、キュッキュツとそれを回すと、小さな紙が出てきた。

「なんで、そんなこと知ってた……お前？」

「いえ……別になんてこと無いですよ。わたしもこれを捜していたんです」

「そうか……」

当初、殺せといわれたのだが……今からでも遅くはないだろう。

殺すか、殺さないか。

「くっ……」

そつだ、今派手な行動を取ると超科学の連中に気付かれる恐れがある。不用意な行動は慎んだほうが身の為であろう。それに今はクリスマスイヴ。人が多いのだから、超能力を使うと不都合だ。

「あ、ここで降ります。のりかえですっ」

ぼつと考えていた頭が神原の言葉で醒める。

「ふむ……」

まあ、帰り道が途中まで一緒なのだから反対方向に行ってから帰る、などという二度手間は省けたわけだからよしとしよう。

それにしてもこいつ小さいな……でもよく見ると愛嬌のある顔かもしれない。なんか、誰かに似てる気がする……

「な、なんですかっ……！？　そ、そんなに顔近づけないでくださいよう」

「ああ、すまん神原。ちょいと動物を観察していた」

「わたしは動物じゃありませんっ！　れっきとしたホモサピエンスですっ」

「普通そこは人間です、って言わないか？　自分は動物ですみたいな言い方になってるぞ。凶星だったか？」

「違いますっ！」

「はははっ、面白いな、お前」

むすつと膨れる神原。こいつといると、湖南とは正反対の気持ちを得られるな。なんていうか……和みっていうのか。

「わたしを侮辱した罪として今から名前で呼んでくださいっ！　あ、別にそういうんじゃないからね！」

「キャラ作るな。俺の知り合いと被るから。はあ……えとお前の名前って沙希だっけ？」

「はいっ！　わたしは苗字はあまり好きではないので……だから、名前で呼んでくださいっ」

まるで七紫みたいな理由だが、慣れているので気にしない。名前でも苗字でも俺にはあまり変わりないと思う。

「ふうん……じゃあ、沙希で良いのか？」

「はいっ」

「じゃあ、沙希。その書類をよこしてください」

「めちやくちゃですね、その言葉遣い……どうしましょうかねえ……

…命がけで取ってきたものですしねえ……」

「頼む！　それが無いと俺は……俺は……」

「そうだ、社会的に死んでしまうんだ」

あれ、今氷室さんの声が……ああ、幻聴か。ありがとう、その君。誰か知らないけど。とにかく、うつ病にならずに済ん

「幻聴ではないよ、これは」

全身がカタカタと震えている。氷室の中に叩き込まれたかのように全身から熱が抜けていったような、そんな悪寒が俺の背筋を走った。

「なんで、この電車に乗っているんですか、氷室さん……？」

後ろを振り向くと、

「理由は特に無いよ……しっかり仕事はしてきたよね、綾瀬くん？ うん？」

「当然ですよ……この中に入っているのがその資料ですよあははははは」

氷室さんに見えないように、沙希の手からストラップと書類を抜き取り、氷室さんに見せる。ついでに彼女の口も塞いでおく。

「よくやってくれた。それは後で事務所に届けてくれ……で、さっきから君の後ろで喚いている子は誰なんだい？」

口を塞いでいたがモゴモゴなっていたらしくばれた。というか電車の中でこんなことしていいのか、俺。

よく考えると、昼間の乗車率が低いときにこんなことをしてたら最悪警察行きだ。もしかして氷室さんはそれを狙っていたりして……

「ああ、こいつは天竺……俺の高校のやつ友達でして……神原沙希っていうヤツです」

「苦しいですよ、綾瀬さんっ！ ひどいですっ、失礼ですっ！」

「あつはつはは！ そうか、そういうことか……まあ私がいても邪魔なだけだな、失礼するよ」

氷室さんは豪快に笑うと違う号車に移っていったのだった。はあ、一時はどうなるかと思ったが神がかった俺の判断能力でセーフだった。

彼女は唇を突き出しながら、

「綾瀬さん、激しいんですもん」

「何がだ」

「口を押さえるの。ちょっと痛かったですよ……」

「……悪かったよ。でもああでもないし本当に不味かったもんでな……許してくれ」

「わかりました。あなたは命を救ってくださった人ですしね」

「ガキが生意気を……って同い年か」

とそんな間の抜けたことを言っていると、どうやら沙希の家の最寄り駅に着いたらしく、俺たちは電車を降りた。

「割と俺の家と近いのな……まあ、いいか……で、俺はどこまでついていけばいいんだ？」

「家の前までお願いしますっ」

「面倒なんだが……ここで良いだろ。俺は行くところがあるんだ。さっきの人に届けもの頼まれてるんだ」

「……では電話番号の交換を！」

「しねえよ。しかも唐突すぎだ！　なんでそういう話題になってしまうんだ……？」

彼女は彫刻の考える人のようなポーズをし、黙考した後、

「分かりませんでしたっ。でもこんな可愛い女の子から番号交換を迫られて断らない男性はどこにもいないでしょう……って綾瀬さん！　待つてくださいいよっ」

「なんだよ、俺は今から行くところがあるんだが」

「わたしの家はここからすぐ近くですから、ついて来てくださいよ」心細いんですっ。わたしは弱い女の子なのですからっ

超能力者が何を言うか、と言いそうになったがそれは流石に失礼だと思ったので心に留めておくだけにしておいた。まあ、一刻を要する事態でもないのでもちよっただけなら付き合ってやるか、という譲歩を心の中で決め、

「分かったよ。で、こっから何分でお前の家なんだ？」

「徒歩三十分ですっ」

「あ、じゃあ、さようなら」

徒歩三十分、2キロ半くらいあるじゃねえか。足が疲れるから綾瀬くんは歩きたくありません。

「ば、バスを使えば、十分くらいで行けますよ……」

「そうなのか？　だとしたら行くが……」

しかし、なぜか彼女の物言いがなんだか不自然である。俺から目を背けているというか、挙動不審というか。警察の取調べではないが、なんとなくそういう挙動は分かる。

「それで、沙希。バスの時刻表はどれだ？　停留所なら表示がそこにあるんだが……」

「バスは二時間に一本です……」

「田舎か！？　山の中に家があるのか！？　まさか徒歩三十分っていうこと自体が嘘だったりしないか！？」

「実は、徒歩四十分だったりもします……あ、でも山の中じゃないですよ？　過疎地域なだけですから」

「そういう問題じゃねえよ！」

なんで、こうも面倒くさい女と関わってしまったのだろうと自分を戒める。今日はなんだかついていない。超科学のヤツに見つかって戦ったり、こいつに絡まれたり。

「ついて行かないからな。さっきから言ってるように俺は忙しいんだ。じゃあな」

「待つてくださいっ」

突然、彼女が腕に飛びついてきた。重さは軽く、柔らかな肌と、小さな膨らみが俺の腕に当たる。

「飛びつくな！　俺はお前のおもちやじゃないんだ！　つーかここまで来れば大丈夫だろ！　離せつての！」

沙希はまるで木にぶら下がるコアラのように俺の腕にぶら下がっていた。ぶらーんぶらーんと傍から見れば仲むつまじい兄弟のように遊んでいるように見えるだろうが、全くの逆である。

そしてそんな俺に追い討ちをかけるように、

「恭耶……さ、ん？」

「げっ、天笠……」

天笠が俺の今の状態を見た瞬間、彼女の瞳から生氣と光が消えうせた。このままではまた潰されるのではないだろうかという予想は80%近くで当たるだろう。

「恭耶さん……誰ですか、その女……？ 見かけない顔ですね」

「……いや、さっき知り合ったはた迷惑なホモサピエンスだ。気にするな」

「違いますっ、わたしは神原沙希という立派で可愛い名前がありますっ」

「ははっ、そうなんだ……」

天笠の笑顔が今は怖い。というか若干寒気がする程の怖さである。「そうだ、今の恭耶さんは幻想なんだそう、幻想だ……。幻想じゃなきゃダメだ。幻想幻想幻想幻想幻想幻想幻想幻想幻想幻想幻想幻想幻想……」

天笠が現実逃避を始めた。彼女彼女なりに感情を落ち着かせようとしているのかもしれない。俺の言ったことは必ず実行する女なのだ。そういう点においては実に気味が悪いが。

俺は沙希を振り落とし、

「おい、しっかりしろ。これは幻想じゃないぞ」

「っ！？ あ、本当だ。恭耶さんだ。こんにちは、恭耶さん。奇遇ですね、こんなところで会うなんて」

俺が天笠の肩を叩いて、前後に振ったらやっと気付いた。まるでロボットである。

「……ああ、よう。お前のほうこそ今日はどうしたんだ、こんなところで」

「恭耶さんを……じゃなくて、お買い物です。それにしても嬉しいなあ、恭耶さんと会えるって」

屈託の無いその笑顔に俺は喜ぶほかなかった。男は女に騙されると言っが、騙されてもしょうがないだろうと思う瞬間だった。

「で、その女は何ですか？」

彼女の声が険悪なものに変わる。

「はっ、始めまして！ 神原沙希と言いますっ。綾瀬さんとはついさつき友人になったばかりでして……別にあなたが思っているような関係ではありません」

「へえ、そうなんだ」彼女は何かを噛みしめるように頷き、「うん、わたしは天笠時雨。これからよろしくね、神原さん。あなたとは仲良くなれそう」

明らかに態度を変える天笠。一体天笠は何がしたいんだ。

「それでは、わたしは買い物がありますので……綾瀬さん、このあと忙しいですか？」

「ああ、ちよつと行かなきゃいけないところがあるんだ。ごめんな」「いえいえ！ 良いんですよ全然……では、さようなら」

「天笠！ 気をつけるよ、最近物騒だからな！」

彼女も超能力者なのだ。いつ、感情が揺さぶられて捕まってしまうのか分からない。それは天笠が一番分かっていることなのだが、念には念を、ということであえて言ったのだ。

「ありがとうございます。気をつけますね」

手を振りながら、遠ざかってゆく。その顔は俺の視界から消えるまですっと笑顔だった。

「それで、沙希。流石にそこまで遠くにはいけないから今日は帰る。この書類はありがたく受け取っておくぜ。気をつけて帰れよ」

「まあ、それはお礼としてあげますけど。その代わりストラップは返してくださいっ！ 大切なものなんですっ」

「別に構わないが……」

ストラップを手渡す。すると彼女の表情がほんの少しだけ緩んだ。「じゃあ、わたしはバスを待ちますっ」

「ああ。じゃあな、気をつけるよ」

さて、ここから氷室さんのビルまでどう行くか……やはり電車で行くのがいいか。そう思い、俺は駅のホームへと戻った。

暇になったので携帯を開く。現代っ子の悲しい性である。

携帯をネットにつないで、ニュースのページを見るとやはり超科学に関する記事が多かった。しかも、もう二十人の超能力者を殺した、とまで公言しているらしい。確かに数十時間で二十人殺されたって不思議ではないぐらいの兵力は持っているだろう。ただ、あの鎧、相当金がかかっているはずだ。一体どこから金が出ているのだろうか。そしてどうやって超能力者であることを確かめるのだろうか、という疑問が湧いてきた。

さらに記事を読み進めると、超科学の連中はその鎧に使っている技術を非公開にしているらしい。あの技術は今までのとは一線を画しているから、技術提供でもすれば人類全体の大きな進歩になるかもしれないのに。

財源では、超科学に寄付をする団体でもあるのだろうか……そのあたりの調査は氷室さんに頼んだほうが早く情報が集まるだろう。これから俺、その他諸々の超能力者は逃げ隠れしつつ、生活していかなければならない。お先真つ暗といったところだろう。

そもそも、あんな鎧軍団に囲まれたら一環のおしまいだ。単体だけであそこまできつかったのだ。複数で来られたら勝てるはずも無い。

「はあ……憂鬱だ……」

そうこうしているうちに雑居ビルの前に着いた。階段を上り、事務所の扉を開けると、

「あれ？」

氷室さんはまだ帰っていないようで、留守番の一人もいないようだった。また、後ろから出てくるんじゃないかと、と勢いよく振り返るもそこには誰もいなかった。相変わらず無用心である。

彼女が帰ってくるまで待つのも面倒なので、書類を氷室ビルの横に置く。ついでに、『超科学の鎧に関して調べてくれませんか 綾瀬』と書置きを残し、外に出た。

やはり昼間は人が少ないな。まあ、普通は勤務時間帯だったり、学校に行っていないければいけない時間なのだが。クリスマスイヴだ

というのにも関わらず学校もよくやるもんだ。

今頃、ネット掲示板では自宅警備員のベテランたちが自分達とは正反対の人間に向かつて、憎悪の念を書きこみ、互いの傷を舐めあっているのだろう。実に虚しい。というか俺もその仲間の一部ではあるが。

「帰るか……」

この時間じゃ、話し相手になっってくれるであろう人間はいないし。そもそも俺、友達と呼べる人、少ないし。しかし、なんとなく帰るという人生負け組確定な行動に抵抗を感じたので、

「はぁ……なんでここにいるんだ、俺……」

近くの公園で一人寂しくブランコを漕いでいた。こうやってる時点で俺は人生負け組だと思う。そう思っていると、

「あ？ 綾瀬じゃん」

「湖南かよ……はぁ……」

「おいコラその根暗モヤシ。人の顔見た瞬間ため息つくってどういうこと、ええ？ どうせアンタはやることがないけど、家に帰るのも癪だからどこか寄ろうと思って挙句の果てに公園に着いたってところでしょ？」

「完全なる解答！？」

なんですか、美人局ってここまでやれるものなんですか。こんなクリスマスイヴに公園でブランコを漕いでいるような高二男子の行動パターンも把握できるんですか。

かく言う湖南のファッションはニット帽にマフラー、白のジャケットにスカートという格好である。今からクリスマスイヴを謳歌してきます、みたいな意気込みが感じられる。というか、足、寒くないのだろうか。

「というか直視しないでくんない？ 気持ち悪いんデスケド」

「罵倒しすぎだろ！ 俺、お前に何かしたか？」

「まあ……ねえ？」

「そんなところで横目で見て、君、やったよね？ みたいな空気を

醸し出すのやめてくんねえ！？　すごく迷惑なんですけど……」

「どの辺りが？」

「自覚してねえのかコイツ！？」

彼女は大きく、ため息をついて、俺に背を向けた。

「そんなことより、あたしはこれから仕事だけど……ゴミ瀬くんはこんなところでなにやってんのかしら？」

「人をさらつとゴミ扱いしないでくれないか。すごく悲しいんだ……

俺はお前と反対でバイト帰りだよ」

「へえ……そうだ、今所長、事務所にいる？　ノミ瀬」

「ゴミからノミに変えたところで、何の変化も無いから普通に呼んでください……氷室さんなら俺が事務所に行ったときにはいなかったよ。用があるなら書置きを残しておけばいいんじゃないか？」

「分かったわ。ありがとう、変態」

「おい、名前を呼べと何度言えば分かるんだ。しかも俺は変態じゃねえよ！？」

「えっ……ちよつと待って。頭の整理が追いつかない……」

「初めて知った、みたいな顔すんじゃないか！？」

世界の終わりでも見たかのように、目を見開く湖南。俺、もう精神的なダメージが大きすぎるよ、辛いよ。

「ということで、あや……ゴミ瀬に付き合ってる暇はないから、もう行くわ」

「言い直すなよ！　ああ、分かった。良い暇つぶしにはなったよ」

「ふうん」

と、彼女は関心の無さそうな声を出し、俺に背を向けて歩くのだった。ああ、寂しい。

「さて……帰るか」

とりあえず夕飯は七紫のいつている店で食うことにしよう。それまでは……布団にくるまっていよう、と俺は決心し、今度こそ本当に帰路についた。そのときに考えていたのは、やはり脳裏に焼きついてしまっていた、鎧のことだった。

カロリーメイト一本で昼飯を済ませ、惰眠を貪り、起きたときにはもう日が沈みかけていた。それなりに急いで基本的な身支度を済ませ、家を出る。時間に遅れる、というのは男として七紫に申し訳ない気持ちがあったからだ。

「くっ……リア充どもが……」

やはり俺も思春期真っ盛りの男子である。色恋沙汰には興味があるし、楽しみたいが、先ほどの通り、俺はあまり明るい性格ではないから女子と接する機会があまり無いのだ。

「おっ、綾瀬！ 来てくれたのか」

「ああ。約束だからな」

七紫は一回家に帰ったのか、制服ではなかった。彼女の足より一回り長いズボン、赤色のパーカーに同色のマフラーといったボーイッシュなスタイルで来ている。

「じゃあ、早速行こうぜ。あたし腹減ってた。今日は何にしようかな……」

「俺も結構腹減ってるからな。楽しみにしてた」

暖房の聞いた店内に入る。聖夜の夜前日というのにも関わらず、ここは人が少ない。比較的立地条件も良いのだから、もっと人が入ってもいいと思うのだが。

座席に着く。七紫はメニューに穴が開くのではないかというぐらい、それを見ている。かくいう俺は二日連続焼肉定食というのも悪くは無いと思っただが、保守派な考えは良くない。食には日々革新を求めるのだ、という本の受け売りを気にしつつ、メニューに目を通していった。

そうだ、これにしよう。

「すいません、カキフライ定食を……」

「二つだ！ 二つな！」

「あいよ」

七紫が慌てた語調で言った。どうやら、お互いメニューをじっくり見た拳句、こうなったらしい。

「七紫は普段、カキフライ定食食べるのか？」

「食べない……というか、カキフライ定食自体が新メニューだったんだ。昨日はメニュー見てなかったから、気付かなかったんだ」

「カキフライ定食って結構定番だろ？ どうして今頃になってメニューなんかに出したんだ？」

「ここのおっちゃん、本当に自分が自信を持って、最高に美味しく作れるものしか出さないんだ。しかも、そのおいしさのハードルが異常に高いから、中々新メニューは追加されないんだぜ」

「へえ……あの人、昔なにやってたんだろ……」

あの顔から見て、歳は五十から六十歳といったところだろう。ベタな例をあげると、有名なホテルで料理長をやっていたり、三ツ星レストランのコックだったりする。機会があったら聞いてみることにしよう。

「なあ、綾瀬」

「なんだ？」

「なんで、今日学校来なかったんだ？ なんか大事な用でもあったのか？」

「いや……色々あったんだ……」

俺がそうはぐらかすと、彼女は表情を一変させ、

「綾瀬、あたしはウソが大嫌いだ。この世で一番嫌いだ。勉強より、ムカデより、ゴキブリより、世界の何よりも、ウソが嫌いなんだ」

彼女の今まで一度も見たことが無いような剣幕に俺は気圧される。いつもの笑顔いっぱい七紫ではなく、何か憎んでいるものを見る顔つきで俺の顔をその大きな瞳で捉えていた。

この顔を俺はよく知っている。何せ、俺が一番よくしていた顔なのだから。

「……バイトだよ。バイトやってんだ、俺」

「うん。それは本当だ。あたしには分かるぞ。綾瀬、やっぱりお前は優しいやつだ！」

「そいつはどうも」

彼女の雰囲気がいっつももの明るものに戻る。一瞬、別人に見えたくらい纏っているものが違ったのだ。まあ、俺もそうだが、人には言えない事情があるのが当然だ。深く追求はしないでおう。好奇心で人の触れてはいけない部分に近づくのはマナー違反だ。

「お待ち」

「おおっ！ 待ってたぜ！」

考えにふけっていると、いつの間にか料理が出来ていたようだ。流石にカロリーメイト一本じゃ腹が減るので、遠慮せずに早速、力キフライを口に運ぶ。

「……やっぱ、うまい……」

衣はサクサク、中の力キはぷりぷりとした食感。力キを食べたときに出るあの独特の汁。この店オリジナルのソースとも相性はばつちりで、やはりこれも白米を食べようとする欲求を加速させる。

「おっちゃん、ごはんおかわり！」

「はやっ！？」

「いやあ……今日、体育ではしゃいじまったもんだから、腹減って……」

「はははっ、七紫らしい理由だな！」

その後、彼女はご飯を四杯完食し、学校での世間話をして、店を出た。

店を出ると、冬の寒い風が俺たちをさらおうとした。街は俺が店に入ったときより、賑やかになっている。老若男女、紳士淑女たちがクリスマスイヴを満喫しているのだろう。

「あたし、今日ちよつとこっちに用があるんだ」

七紫は彼女の家とは逆の方向を指差した。

「じゃあ、途中まで一緒に帰るか。近頃危険だし、女子が一人で歩くのも危険だしな。まあ、七紫なら大丈夫だろうけど」

「な、なんだよ！　まるであたしが女であって女じゃないみたいと言いだなっ！」

「意外にも的を射てるぞ、それ」

むくれる七紫と並びながら歩く。クリスマスイヴだからなのか、もうちょつと親密な関係にもなりたいたいものだな、と不覚にも思ってしまった。

七紫は男勝りではあるが、顔は端正だし、運動をしているおかげなのか、スタイルも中々のものだ（胸まわりを除く）。

こんな彼女がいたのならきつと自慢できるんだろうな……

「どうしたんだ、綾瀬？　なんか遠い目してるぜ？　何か悩み事でもあるのか。あたしはいつでも相談に乗るぞ！」

「お前に相談しても、的確なアドバイスがもらえないような気がする……」

「バカにするなよ。あたしは勉強が留年ギリギリのラインでも、人の悩みぐらいいは聞けるんだ」

「そこ、何も接点が無いぞ」

彼女はスポーツは万能だが、勉強がダメダメという典型的なパラメータの持ち主である。だがそこがいい、という男子の声も上がっている。

だからこそ、接しやすいのかもしれない。どこか垢抜けていて、でもどこかしつかりしていない、というのが理由であろう。

「なあ、綾瀬。昨日のアレ、見たか？」

「アレって？　あの超科学とかいう連中の中継か？」

「そうそう、それ。あいつら何かウソついてるぜ。絶対に許せないんだ、そういうの」

「お前は強いな……。俺はビビってるよ……」

と、俺が言った瞬間、身体の全身がぞつとするような音を聞いた。「っ！？」

金属の音。しかし、それは鉄でもなく、アルミでもスチールでもない、異質な音だ。イヤな汗が全身から噴き出してくる。

俺が感じたものは、死の予感だった。

「おい、そこのお前」

後ろを振り返るとあの鎧があつた。午前中のより一回りサイズが小さい。人ごみの中に異質なものが紛れ込んだ。そして、周囲の人間がいつせいにこちらを向く。

クリスマスイヴだ。こんな人ごみの中で殺しを出来るわけがない。もしやったとするならば、メディアのバッシングで超科学の軍団は社会的地位が危ぶまれるはずだ。しかし、なぜ、こんな人が密集する時期と場所に、こんなやつらがいるんだ。野次馬が集まるだろうに。

「お、俺？」

あくまでも、飄々と答える。

俺の顔は午前中のことで知られているだろう。しかし、まだ一日も経っていないのだ。組織内に知らない人間がいたとしても、おかしくはない。言わば、この鎧が知らないということに賭けているのだ。

しかも、今は七紫もいる。だから、戦えない。

「そつだ。お前、このあたりに超能力者がいるというウワサはあるか？」

ドラム缶のようなヘルメットから、機械を通して伝わる声が俺の緊張をよりいっそう増幅させる。

「目撃情報がちらほら……でも、詳しくは知らない。なんせ噂話だからな。七紫は何か知ってるか？」

「いや……別に」

「そつか」

「ところで、さ」

七紫が口を開く。その声は鋭かった。

「あんたら、ウソ、ついてるんじゃないのか？」

「ウソ？ 我々が？ そんなはずはない。技術は非公開だが、ウソなどは……」

「それがウソなんだよ！ ウソをついてないっていうウソだ！ 許せないんだよ、そういうの！」

彼女は喉がはちきれんばかりに叫んでいた。七紫の今の顔は誰にも見せていないような剣幕だった。鎧が一瞬、気圧されているかのようでもあった。

「お前…… 人類を救おうという我々に刃向かうのか！？ もしや、反乱因子か、お前は！？」

「人類に救い……？ 信仰宗教かい？ 馬鹿馬鹿しい。あんたらはウソばかりだ。そんなやつらは……」

七紫はブレザーの奥に手をつ込み、
「あたしがぶつとばしてやる！」

モデルガンを取り出した。それは、確かにモデルガンだった。プラスチック製の拳銃の偽者だった。そして、それが一瞬、歪んで見えたあと パァンッ！
「っ！？」

甲高い発砲音。クリスマスムード一色だった人々は一気にパニック状態になり、鎧も、俺たちももみくちゃになっていた。俺は彼女の手を掴み、

「七紫っ！ これに乗じて逃げるんだ！」

「いやだっ！ ウソは許せないんだ！ あいつに本当のことを吐かせるんだっ！」

「ダメだ！ あれに拳銃は通用しない。だから、今は一旦体勢を立て直すんだ！ お前を死なせるわけにはいかないんだ、頼む！」

まただ、何で俺、こんな人助けなんかしてんだろ。柄でもないのに。今日だけで二回だ。自分が自分で無いような気もしてきた。

「……分かった」

彼女は苦虫を噛み潰したような顔をし、俺の手を取った。人の流れに乗るようにして、その場から離れる。この人の波の中、鎧がど

ここに行つたかなんて分かるはずもなかった。

「七紫。お前……超能力者だったのか……？」

「……ああ。失望したなら、あたしを見放せば良い。どうせ、あたしが超能力者だって分かつた瞬間に離れていつちまうんだろ？」

「大丈夫だ。その心配はないぜ。なぜなら、俺もお前と同じ超能力者なんだからな」

彼女は俺の顔を覗き込むように見て、

「……ウソはついてないな」

「こんなんでもウソつくやつはいないさ。隠してたってバレるのが関の山だ。とにかく、今はあの鎧の野郎から逃げ切ることを考えるんだ」

「ああ、分かつたぜ」

さて、これからどうする？ 七紫を家に帰すか、帰さないか。彼女の名前まではまだ知られていないはずだ。早めに家に帰らせよう。そのほうが安全のはずだ。

「そんで、これからどこ行くんだ！？」

「お前、ここから家までどれくらいだ？ お前を家に帰したいんだけど……」

「徒歩で十五分くらいだぜ。嬉しいけど……大丈夫なのか？」

「まあ、なんとかなるだろ……。住民票を手に入れてるほどではないはずだ。軍隊でもあるまいし」

「じゃあ、こつちだ」

どうやら、話を聞く限り七紫の家は俺のアパートとは反対方向にあるらしい。帰るのは遅くなりそうだ。

夜に年頃の女の子の家に踏み入るというのもなんだか気が引けるのだが、緊急事態なんだからしょうがない。そう、仕方ない。決して、気分が高揚したりしないはずなのだ。

と心に思いつつも、七紫の家ってどうなっているのだろうと想像にふける高校生の姿がそこにはあった。それはまさに、俺であった。しかしそれは送り届けるだけなのだ、と意識すると、その夢は遠く

離れた幻想だと分かったのだった。

そんなことに自己嫌悪を覚えつつ、人が少なくなってきた道を歩いてみると、俺はあることに気が付いた。

「いまさらなんだけどさ……」

「なんだよ？」

「警察……来るんじゃないか？ 色々、面倒なことになるぞ」

「げ……」

俺もあの時は鎧が目の前にいて、冷静さを失っていたからそんなことは到底想像がつかなかったが、鎧よりもしかりとした団体があるのを完全に忘れていた。俺も何回か連れて行かれそうになった思い出がある。

本当に色々厄介なのだ。あれだけはやめて欲しい。

「だ、大丈夫だぜ……」

「身体が震えてますよ、七紫さん。まあ、来ないことを祈ろう……。そういえば、お前の親御さんはどうなんだ？」

「いや、まず親は基本、家にいない。父親は帰ってくるのがメチャクチャ遅いから、実質あたしは一人暮らしなんだ。母親は別に死んだりとかはしてないぜ？ ただ別居状態なだけさ」

「へ、へえ……」

えと……それって危なくないっすか。年頃の男女二人が、そんな状況に陥っていいわけがない。俺だって思春期なんだし……ね？
って誰に話しかけてんだ俺。

ちよつと気が動転しているらしい。平常心を保つんだ。

「七紫、良いのかよ。俺なんか家に上がらせて？」

「良いも何も……友達を家に招くなんて普通だろ。小学生のときお前友達いなかったのか？」

彼女は小学生のときと感覚が進化していなかったようだ。よく今まで何もなかったものだ。

「まあ、お前が良いって言うんなら良いんだけどさ……」

七紫は頭の上に？マークが浮いているように困惑顔であった。な

んというか、鈍感というか、純情というか……マンガやアニメの主人公を見ているみたいだ。

「ああ、ここがあたしん家だぜ」

「へえ……」

一人暮らしをするには大きすぎるくらいの一軒家だった。外観はというと、塗装もはがれてなければ、汚れもあまりない。築十年は経ってないはずだ。

「この家、一回リフォームしたんだ。家自体は築十五年くらいだつて父親が言ってた。寒いから中、入ろうぜ」

「お、おう」

冷え込んではいない家の中に入る。年頃の女の子らしい装飾などはほとんどなく、生活に必要な最低限のものだけがあった。

「ってかなんで俺、家の中にまで入ってんだ……？」

送り届けるだけで良いのに。まあ、妄想のことはどうでもいいとして。

「七紫、俺帰るわ。お前の家に居座るのも悪いし……」

「泊まっていけよ。もう遅い時間だしさ。寝床も貸すぜ？」

「……え？」

何いつてるんだ、この少女は。お泊り会とかいう次元の話ではなくなるぞ……

「いいだろー。なあーなあー。それに今晚は油断できない状況だし、あの鎧、銃弾弾いたし。色々危険なんだ」

「まあ、あの鎧は爆弾まで凌げるからな。でも……仮に俺が泊まるとして、俺はお前とは完全に別室で寝るぞ。俺とは距離離れた方がいい」

「なんで？ あたしのこと嫌いなのか……？」

「いや！ そういうことじゃない！ う……まあ、そのだな……別室にして欲しいだけなんだ。そういう習慣なんだ」

一緒に部屋にされたら一睡も出来ないだろう。別室にされても睡眠時間はいつもの十分のくらいになってしまいそうだ。

「お前がそれで良いんなら良いぜ。よし、じゃあ決まりだ！ そうだ、まだあたしの能力について話してなかったな。修学旅行気分では話すか」

「そんな軽々しく扱っていいのか！？ で、お前の能力は？ 俺の能力は物質を変化させる能力だ」

ほら、と言って俺はカバンに入っていたペットボトルを取り出し、形を変形させる。

「すごい！ 便利だなあ……。で、あたしの能力は偽者を本物に変える力だ。さっき撃った銃はもとはモデルガンだったんだ。モデルガンって拳銃の偽者だろ？ だから、本物に出来たわけ」

実に七紫らしい能力である。ウソを真実に変えてしまう、彼女の気質と同じような、能力だ。感心する俺とは裏腹に、七紫の表情は曇っていた。

「こんな能力、持っても意味ないんだ。これを持ってるからって正義の味方になれるわけでもないし、持ってるって分かったら、みんな離れて行くんだし……。一回、ガキの頃に経験したんだ」

「……だから、部活とかにも入らないのか？ 能力がバレてしまうのを防ぐために？」

「ああ、そういうことだ」

超能力、というしがらみのせいで彼女の本当に好きなことができていないのだ。周りに輝きを振りまく彼女だからこそその気遣いである。

俺は、そんな七紫をかわいそうだと思った。俺は能力のおかげで生きて来られているが、彼女の場合は能力のせいで自分を殺しているのだ。俺とは全く正反対。精神的にも辛いはずだ。

「でも、これでもあたしは満足してるんだ。贅沢を言っちゃいけないからな」

「……お前」

人に打ち明けられない悩みが普段は明るい彼女にもあったのだ。いや、人として当然だろう。

それを俺は先入観で打ち消してしまっていたらしい。相応の責任を自分の中で取らないときが気がすまなかった。

「七紫、俺はお前と同類なんだ。普通の友達に打ち明けられない話は聞け。電話だって構わない。気が滅入ったら話しかけてくれ。力には……微力だけどなれると思う」

彼女は柔らかい笑みを浮かべ、
「サンキュ」

と、今まで聞いたこともないような、落ち着いた物腰で言った。

「拷問かよ……」

絶賛正座中である。なぜなら、今七紫がシャワーを浴びているのだ。床で水が弾ける音が漏れてきているのだから、非常に悶々としている。俺だつて男なんだ！

「……だあああああああ！」

いけない、苦しみもだえるあまりについ、絶叫してしまったではないか。事情を知らない人が今の俺を見れば、数分後にほぼ間違いなく、この家の周りでサイレンの音が聞こえてくるだろう。

こんな一人さびしい夜なので、はっきり言おう。俺は七紫みたいな女の子がタイプである。恋愛感情的に七紫は好きではないが、少なくともタイプではあるのだ。

彼女は明るくて、屈託のない生き方をしている。典型的ではあるが、そういう人間に惹かれてしまうのだ。俺とは正反対に感じるから。そう、感慨にふける俺であつたが

「おーい、綾瀬。風呂入りなよ、貸すぜ？」

「はっ、はい!？」

湯上がり。バスタオル一枚。熱で上気した頬。艶かしい肌。すらつとした、モデル勝りのくびれ。少し濡れた、綺麗な髪を下ろしていた。

「お前……早く着替えろよ……」

「まあ、分かってるけど……。なんであたしから目を逸らすんだ？
気のせいかな？」

がつがつ食つてるところを見られて恥ずかしがるくせに、なぜそんな格好で俺の目の前に出現しても恥ずかしくないのだろう。男口調のクセに男心を理解していないではないか、と俺は心底思った。

「……んじゃ、入らせてもらう……」
「ゆっくりしてってくれ」

この後、俺のテンションがおかしくなつて石鹼で足を滑らせて転倒し、湯船で沈みかけ、風呂場から出るときにも転倒したことは誰にも言うつもりはない。一生俺の中で封印しておくことにした。

あれから三十分後。俺はあまりにも調子が狂いすぎてしまったので、外に出て頭を冷やしていた。冬の冷気が良い具合に俺の全身を冷やす。

「はあ……。これだけで調子狂うのか……。ダサいな、俺も」
とりとめもない妄想は今ほ保留にする。

ケータイを開くと、氷室さんからメールが来ていた。内容は、『明日、事務所に来ること。詳しく話す』と簡素な文章だけが液晶画面に映っていた。どうやら、超科学についての収穫はあるらしい。それだけで感謝だ。

続けざまにネットの記事を開く。超科学に関する内容は更新されていた。そこに書いてあったことは、こうだった。世界中にあの鎧は散らばっていて、ある程度の超能力者のリストはあるらしい。しかし、未だに技術は非公開。そして一番驚いたのが、江戸時代の不平等条約のようにこの団体に日本の警察は一切関与しない、だそう。通りで騒ぎになってないワケだ。

世界各地のことはあまり詳しくは書かれていなかった。短期間だから、日本だけのことしか調べられないのだろう。

「おう、綾瀬。そんなところいると風邪引くぞ」

「お前もだろう？」

「そうだな。あたしはもう寝るぜ。綾瀬は好きところで寝てくれ。布団は和室にあるから」

「ああ、サンキュ」

では、お言葉に甘えて寝させてもらおう。流石に眠い。布団だけ被って、俺は暗闇に、意識を落とした。

戦争勃発（後書き）

このサイトに投稿するのははじめてですが、よろしくお願いします。

秘密のはなし（前書き）

1話の続きです。

秘密のはなし

七紫が起きる前に彼女の家を出た（窓から）。とりあえず、家に泊めてくれた感謝の意を込めて、朝ごはんのパンだけは置いておいた。睡眠時間は少なく、二時間しか寝ていない。予想通りの結果である。はあ、眠い。あくびをかみ殺しつつ、まだ夜が明けて間もない、霜が降りた自分の足音以外物音がしない住宅街の道をふらふら歩いていると、

「恭耶さんじゃないですか。ふふ、やっぱりわたしを捜していたんですね、感激です」

「お前……なんでこんなところにいるんだ？」

天笠時雨が俺の背後に立っていた。最近、背後に人がいることが多いな。ゴルゴ13のデューク東郷のように、背中の人にがいることを察知できる感覚が欲しくなってきた今日この頃である。

「いえいえ、わたしは恭耶さんのいるところならどこへでも行きますよ？　それで、恭耶さんはどちらにお出かけになっていたのですか？」

「ああ、今まで七紫の家に……」

「へえ……こんな朝早くからですか」

その瞬間、俺の真横のアスファルトが地盤沈下のごとく、沈んだ。一メートルほど。そして俺はたった今気付いた。

踏んではいけない地雷源の中の一つのを踏んだことに。

「浮気はいけませんよ？　恭耶さんはわたしの王子さまなのですから。王子さまがお姫様を裏切るなんていう童話は聞いたことがあります。だから、ね？」

「……………」

彼女のその言葉に不気味さまで覚えた。何かにすがっていかないで生きていけないのか　俺はそう言いたかった。しかし、言えなかった。なぜなら、過去に縛られて生きているのが俺だから。

縛られるも、すぎるもほぼ同義だ。

「天笠……俺はお前の王子さまなんかじゃないんだ。俺はあくまでもお前のカウンセラーのようなものなんだ。いい加減分かってくれ」
「……恭耶さんがそういうのなら」彼女は一拍置いて、「では、今度からわたしが早起きして恭耶さんの朝ごはんを作りますっ！ 期待してもらって大丈夫ですよ？」

「話に何の脈絡もねえじゃねえか！？ なんでそうなったか聞きたいわ！」

「わたしが恭耶さんのお嫁さんだからです。まだ、年齢が足りないからこうしているだけで、恭耶さんが望めばいつでも主婦になります」

「……もういいや……。俺、今日学校行けないと思うけど、お前はちゃんと行けよ？」

「……恭耶さんが言うのなら」

渋々声をあげる。そんなに俺がない学校がイヤか。結構休んでるけどな、俺。そして、俺は彼女に背を向けつつ、

「それと天笠。あまり人の前で怒ったり、泣いたりしたらダメだぞ。何せ最近物騒だからな。俺との約束だ、分かったな？」

「はいっ！」

彼女は元気よく答えてくれた。天笠は俺の大切な友人だ。そんな人間を超科学の連中に殺されてたまるか。

人を殺す人間でも、これくらいの感情は残っているものだ。

「じゃあな、天笠」

「さよならです」

天笠とは別れ、雑居ビルへと向かう。しかし、この時間だと早すぎるな。流石の神出鬼没の氷室さんでもないと思う。だから俺は一旦家に帰って、着替えることにした。

ちょうど良い頃合いに家を出て、今度こそビルへと向かった。俺

の足取りは普段と比べたら、ほんの少しだけ軽かったような気がする。数少ない敵の情報を入手できるからだろう。

俺が歩いている駅前には、通勤や通学をする人間が溢れている。どれも普通の人間。それを見て、俺はふと思う。その普通の人間の中の幾ばくかは普通じゃないことを求める。そして、俺のような普通の人間ではない人間は普通を求める。

普通ではないというのは案外大変なことなのである。友好関係だの、能力を表に出さないようにするだの、そんなことで怯えていなければならぬのだから。そんな世の中に超科学なんていう集団が出てきて、超能力者を抹殺するといわれたら、おかしくなるヤツがいても不思議ではない。

「俺は案外冷静なほうなのかも」

ぼそりと呟く。そして、雑居ビルを上り、事務所の扉を開けると、綾瀬くん、おはよう」

「おはようございます」

書類の配置が変わっているということは、誰か客が来ていることの一種の表現みたいなものだ。その書類の山で客の顔がイマイチ見えない。

「こちらに来たまえ」

書類の山を崩さずに歩くと、

「沙希!？」

「あ、綾瀬さんですっ！　こんなところにいたんですかつ！」

昨日会った、神原沙希が事務所の椅子にちょこんと座っていた。

「なんでこんなところにいるんだ？」

「色々あってここに漂流したのですっ」

「東京は砂漠と言われたことはあるけど海じゃないぞ。もしかして氷室さんが拾ってきたんですか、このホモサピエンス」

氷室さんは、不敵な笑みを浮かべ、こう答えた。

「たまたまなのだ。外出先でたまたまこの娘の住んでいる近くに寄ることになって、たまたまその町で買物することになって、た

またまこの娘に会ったのだよ。それで、私が声を掛け、話をしているうちに神原くんが依頼をしたいということでここに来たというわけだ」

あんだ、絶対ウソだろ、それ。たまたまというのはウソに違いない。人型ウソ発見器である七紫をつれてきてやつても良いというくらい確信が持てた。

「追求するだけ無駄か……。で、沙希。依頼ってのはなんだ？ 人探しか、それともペットでも探してんのか」

「いいえっ、違いますよ」

「じゃあなんだ」

俺は面倒くさそうに言った。昨日だけで分かったことだが、実際こいつは面倒な子である。

「あの鎧に関することですっ。自分のみは自分で守らないといけませんから……。この前みたいに助けてもらうことも出来ないでしょう……。それで、この方があれに関することを知ってらっしゃることですっ」

「で、情報を教えてもらいに来たと」

鎧の情報を手に入れるという事は、戦うということを前提にしているのだ。

「はいっ」

大人しく暮らしていればいいものを。まだ、リストには載っていないのだろうし、何もしないで普通に暮らしていれば普通の生活が送れるだろうに。だから、俺は、

「……沙希、お前帰れ。そんなこと知る必要はないだろ」

「昨日実感させられたんですっ。他人に頼っちゃダメなんだってことをですっ。だから……」

「まあ、綾瀬くん。彼女がそう言うのだ、私も説得してみたが聞かなくてな……」

「そうですか……」

氷室さんが言っても無理だったという事は、俺が言っても彼女を

説得することが無理であることは火を見るより明らかである。

「……沙希、くれぐれも気をつけるようにな」

「分かりましたっ」

氷室さんの目線に気がつく。彼女はにたにたしながら、俺のほうを見ていた。面白い話をしようとしている少年のような顔つきだ。
「女の子にやさしくするなんてらしくないじゃないか、綾瀬くん。なんだい、惚れたのかな？」

「そ、そうなんですかつ！？」

「んなわけねえだろうが！」

全力でツツコんだ。というか、こんなホモサピエンスが彼女になるなどあり得ない。無理だ。たとえそうなるとしても、飼い主とペットみたいに見えるんじゃないか。

「何が悲しくてこんなホモサピエンスと……」

「はっはっはっは！ 若いな、君も。さて、雑談も交えたところでそろそろ本題に入ろうじゃないか。幸い、二人とも目的は同じようだから、二度手間をかけないで済むな」

氷室さんは書類の山からA4サイズの紙を取り出し、俺たちの前にぽんと置いた。

「君たちが去った後に私がビルを調べたんだ。そしたら、形状の変わったおもちゃが落ちててね。それ、知っているだろう？」

おそらく鎧のヤツが持っていたプラズマガン、というやつだろう。確かに外見はおもちゃだが、威力はハンパではない。コンクリートの壁に一撃で穴を開けるほどだ。

「それは流石に持って来れなかったが……それを解析して分かったことが何点かあったんだ」

「解析……？」

ほんの少しだけ違和感を覚えた。まあ、氷室さんならどんな手を使うか分かったもんじやないので、詮索はやめておく。

「まあな。で、その分かったことはだな……まず、私が拾ったモノに普通の銃弾は通用しない。一撃で貫通させるためにはせめて……」

「そうだな、徹甲弾くらいの威力は必要だ」

「徹甲弾って……」

徹甲弾というのは戦車が使った砲弾の一種だ。そんな火力をもってしても、やっとなげるほどの硬さ。末恐ろしい。さらにそれがプラズマガンの素材と来た。鎧はどれくらい硬いか見当もつかない。

「それと、あれには色々武装を追加できるらしい。実際、何かしらの武器が追加されていることは確認済みだ。カメラの画像を思いっきり拡大させて、解像度を上げればわかる」

「そうなんですかつ……」

氷室さんの出した紙には、その画像とプラズマガンの設計書のよなものが載せてあった。おそらく、今までで一番いい情報だろう。さすが、不審者の異名は伊達じゃないな。

ただ、プラズマガンのほうは俺のような初心者が見ても専門用語がずらつと並べてあって、何が書いてあるのか分からないのだ。

氷室さんは、？マークが頭の上に浮いている俺たち二人に、

「プラズマ……代表的に使われているものはプラズマ切断機などだよ。普通のガス切断できないようなものに使うんだ。合金の切断を瞬時に行える」

「ようは、熱いんですか？」

「一概に言うのだがね。プラズマというのは本来、超高温の電離気体だ。物質の第四の状態とも言われる。温度を変えるたびに、違う性質を見せるんだ……神原くん？寝てしまったのか、目を回しているだけなのか……。どっちだい？」

「おそらくただの知恵熱だと思います」

この娘、印象どおりアホのようだ。このまま氷室さんの講義を聞かせ続けると頭から湯気でも出てくるのではないのだろうか。

なんだか期待してみたい気持ちになった。

「それで、そのプラズマを発射する方法は、まず、肩当の部分を開かせて空気を取り込む。で、この機械の中でそれを圧縮、電離させる。そして、銃口の部分を展開、撃ち出すというわけなのだ……」

…神原くん？ 病院に行かなくても大丈夫かい？」

「ただの知恵熱です」

本当に湯気っぽいのが出てきた！ すげえ、人間……じゃなかった。ホモサピエンスがまた進化したぞ！

「まあ、良いが……。あのプラズマガンについて分かっていることはこれくらいだ。鎧のほうはほとんど分からない。さすがにそこまですると私も危険だ」

「ここまで調べてくれただけで感謝してます。……ホモサピエンス、講義の時間は終わったぞ。起きろ」

「はいっ！？ わたしっ、いつの間に気絶してたんですか！？ こはどこですかっ」

沙希ははっとして、飛び上がるように起き、あたりを見回した。

「お前、アホだろ」

「さつきからひどいですう……。わたしはアホじゃありませんし、ちゃんとした人間ですっ！ ホモサピエンスって呼ばないでくださいっ！」

「いや、だってホモサピエンスじゃん」

「呼び方に問題があるんですっ」

まあ、雑談はこの辺にして彼女はもう帰らせたほうがいいだろう。これ以上、込み入った話を聞かれるのもなんだし。そう俺が思った矢先だった。

「氷室さん」

沙希が言った。

「あのう……わたし、ここでバイトできますか？」

「採用」

「ダメだよ！ はやいよ！」

またしても全力でツツコんだ。書類の山を一つ崩してしまうくらい全力で。

「なぜだね？ こんな優秀な人材は中々いないはずだが？」

「コイツ、アホですよ。脳は空っぽ、言語知能はどこぞの民族ぐら

いしかありませんし、唯一の取り柄は能力ですよ？」

「そんなに罵倒しないでくださいよ……」

彼女はしょんぼりとうなだれていた。

「まあ、要検討という事にしてもらっていいかな？」

「はいっ」

彼女の元気な声を気に一度お開きとなった。氷室さんが帰り際、
『身の回りに気をつけたまえ』

と言ったのが唯一の気がかりだった。

「送り迎えはやらねえぞ」

「なぜそんなに拒絶が早いんですか……。そうだ、綾瀬さんに二つ聞きたいことがあったんです」

「なんだ？」

「どうして、わたしがあそこに入るのを止めてくれたんですか？」

わたしのこと心配してくれたんです？」

それを聞かれると返答に困る。

自分自身なぜ、こいつの心配をしているのか分からないのだ。俺は今まで人とはあまり深く関わらないようにしてきた。だから、友人に心配などということはしたことがなかった。

俺の中の何かがいつの間にか変わっていたのだ。それも、つい最近から。一体何なのだろう。良心にでも目覚めたとかだったら滑稽だが。

「さあ？　なんでだろうな」

「えええええ！？　意味もなく止めたんですかっ。そんなにわたしが嫌いですかっ」

「嫌いじゃない」

「えっ？」

確かにこいつは嫌いではない。一緒にいて楽しいし、疲れないのだ。気兼ねなく離せる親友みたいな距離。出会って間もないが、彼女にはそういう印象を抱いた。

「ほら、とつとと帰れ。そして遅刻してでも学校行け。お前アホだから」

「な、なんなんですかっ。言うことちらほら変えて！ もういいですっ、さようならですっ」

それにしてもあいつ、俺と同年齢なのにどうして敬語なのだろうと彼女の背中を見つつ、今頃ながら思った。

それから、十分足らずのことだった。

「迷いました」

「早えよ！」

三度目の全力ツツコミ。流石に疲れてくる。

「で、なんで迷ったんだよ。ここに来るときはどうやってきたんだ？」

「氷室さんと一緒に来ました。でも……わたし、氷室さんの車の中でうっかり寝てしまったわけですよ、これがっ」

彼女は得意そうな顔で言った。そのような顔をしていないと彼女が言ったとしても、少なくとも不安は感じていないだろう。

「……で、俺にどうしろと」

「送って行ってください」

「最初断ったよな送っていかないって……。まあ、することないし、別にいいんだけどさ……面倒なんだよね」

「良いじゃないですか。デートだとも思ってください」

「いい加減お前ナルシストやめろ。嫌われるぞ」

なんだか、こいつ友達少ないような気がする。根拠はない。第六感がそう告げているのだ。それにしても最近、第六感的中率が上がってるような気がするな。

「き、嫌われてなんかいませんよっ！ ただ、学校に行っていないだけですよ！」

「世間一般常識で今の言葉を訳すとだな、『わたしニートですっ』になる」

「え……」

世界の終わりでも見てきたかのような顔になった。そこまで無知だったのか。

「……分かった。駅までは送って行ってやる。それからは何とかなるだろ。駅つつうのはアレだ、お前の家の最寄り駅のことな」

「ありがとうございますつ。やっぱり綾瀬さんはなんやかんや言ってもやってくれるんですね。やっぱり優しいですつ」

「そうですか……そりゃどーも。それじゃ行くぞ」

駅へと向かう。ここからはそれほど時間はかからない。せいぜい徒歩十分くらいだ。ああ、寒い。今日はよりいっそう冷える日なんだとか。

会話も特にせず駅に到着。俺は携帯を改札機にかざして通った。後ろに沙希がいないなと思うと、彼女は切符を買っていた。このご時世に切符とは……相当文化が遅れているようだ。彼女は改札を通ると、

「いいなあ……わたしもそういう機能欲しいなあ……」

「あんな、今はケータイかICカードをかざせば自動改札機は通れるんだ。となると……あれ、お前この前どうやって乗ってたんだ？ ICカードは持ってないんだろ？」

「回数券です」

まだそんなものがあったのか。アレって相当古いものじゃないか？ 鉄道オタクにでも売れば、原価の二倍くらいで買ってくれそう。なぜなら、今は回数券を売っている駅自体がほとんどないのだから、入手困難というわけだ。

「わたしも買おうかな……ICカード……。今度ついて来てくださーいよ」

「そんなの一人でやれるだろ……俺はお前の親かよ……」

「てへっ」

「可愛くないし、無駄だから」

気が付くともう駅についていた。

「一回降りないとダメだな……めんどくさ」

ひとまず電車から降りる。

「ほいじゃ。気をつけて帰れよ」

「はいっ」

彼女の背中を見届けた。なんだか安心する。こういうのを親心と
いうのだろうか。

……帰っても暇だ。どうしよう。寝るか、寝るか、寝るか。

「ニートかよっ！」

まあ、いいや。この町をぶらついていこう。

都心に近くても、この一帯は静かだ。ベッドタウンというわけ
でも無さそうだし、こういう下町っぽいのもいいかもしれない。

ただ、アレを除いては。

「ちっ……」

鎧だった。単数。見つかったらマズイことになるかもしれない。
なるべく避けていこう。というか、なんでこんな過疎地域にいるの
だろうか。普通なら人が多いところを捜せば、それだけ超能力者の
確立も高くなり、見つけやすいだろうに。

不意に、ソレがこちらを見る。

（まずいな……そろそろ顔は割れてるはずだし……）

一歩一歩確実に近づいてくる。恐怖で動けない。昨日の夜は二人
で行動していたが、今回は一人だ。人も少ないし、殺されてもおか
しくはない。

「ああ、ちよつと君」

ドラム缶の頭が聞いてくる。

「は、はい……」

どうする……。能力を使って逃げるか、それともなんとか口上で
逃げ延びるか……。究極の選択だな。

「名前は何というんだい？ 学生証を見せてもらえとなお助かる」
「……職務質問ですか？ 今日学校サボっちゃったんですよ。だか

から見逃してもらえると助かるんですけど……」

「演技は良い。死ぬか、投降するかどうかだ、綾瀬恭耶」

やはり、名前を知られていたようだ。なら、取る手段は一つしかない！

「おらあつ！」

至近距離。俺の物質変化が効く範囲内。ようは、殺すことの出来る距離。俺は手を突き出し、鎧に触れる

「甘い」

鎧が五メートル後ろに跳躍するまで一秒もなかった。俺の初撃ははずれ。先制攻撃を逃してしまった。

「前のやつは上手くいったようだが、そうはいかないぞ。貴様の能力はこちらでおおよそ把握している」

「ふざけんな……」

新武装があるのかもしれない。警戒しながら戦うしかない。そう、俺には逃げるといいう手立てはないのだ。あの鎧は車に匹敵する速さで走ることが出来るからだ。下手に逃げたら、背中を見せるだけになってしまう。それは死を意味する行為だ。

「さあ、死んでもらう。この世に超能力者は必要ない」

「なんでだ。なんでお前らは俺たちを否定するんだ！ お前達だって今は人殺しだろ！」

「超能力者は人などではない！ ただのバケモノだ。それ以外何者でもない。綾瀬。お前だって、自分が人間でないことぐらい理解しているだろう？」

「俺は……」

人間だ、とは言えなかった。俺は人知をはるかに超えた力を所有しているのだから。それは、俺の自己嫌悪でもあった。

「答えられない、か。まあ、お前も自覚はあるのだな。ならさつさと楽になったほうが良い。人が苦しむ姿を見て興奮する性癖は持っていないんだ」

「はっ……殺されること前提かよ……」

「当然だ」

昨日のように上手くことが運ぶか分からない。いや、運ばない確率のほうが高いだろう。この鎧は、前のやつは上手くいったようだが、と言った。ということはこちらの先方をどうやってか把握しているのだ。うかつに同じ手を出すと迎撃されかねない。

これが絶体絶命というやつか？ 妙に喉が渴く。そして、鎧が俺の目の前に瞬時に踏み込み、腕を振るう！

「ふんっ！」

「っ！？」

目の前を何かが通り過ぎていった。

明らかに見たことのない、何か。時間差で俺の頬から一筋、血が流れた。斬られたのだ。両方のひじから生えていた、大振りの刃によつて。おそらく氷室さんの言っていた新武装だろう。鎧は抑揚のない声で、

「ああ、これが……。なあに、たいして驚くことはない。上には上がいるんだ。しかし、それを見ぬままお前は死ぬんだけどな」

どれほどの切れ味かは分からないが、おそらく俺の身体なんて包丁で豆腐を切るように容易く切られてしまうだろう。しかし近づくなければ、あれは使えない。

「なら……！」

一点に向けてコンクリの柱を射出する。速度はあまりないものの、重さだけなら相当な圧力がかかるはずだから、それを繰り返し返せば鎧にダメージは出るはずだ。長期戦は必至だ。しかし、

「甘い甘い」

肘から生えた刃によつて、コンクリの柱はいとも容易く断ち切られた。作業のように何本も何本も斬っていく。

勝てる気がしなかった。鎧にさえ到達しない俺の攻撃。逆にその鎧は俺との距離を一步步詰めてきていた。死ぬまで後何歩なのだろうか、という考えが一瞬だけ脳裏を掠めた。俺はその考えを瞬時に振り払った。メンタルまで弱ってしまったら本当に勝機をなくし

てしまうからだ。

まだどこかに勝機はあるはず、と俺は模索していた。

「どうした、綾瀬。随分と押されているなあ！？　やはり、人間のほうが上か！？」

「ごぶっ……」

なんか、頭がクラクラしてきたぞ。血の使いすぎ？　それともプレッシャーに耐えられなくなった？　ああ、思考がおかしくなってくる。まずい。

コンクリ柱の嵐の勢いが衰えてくる。能力のほうも限界に近づいてきたようだ。

俺の能力は使いすぎて、血がなくなってくると自動的にその消費量をセーブしようとする機能がついている。命は投げ捨てさせないようにでも出来ているのだろうか。

「さらばだ、綾瀬」

もやがかかったような視界で鎧を捉える。捉えるのに少し時間がかかった。まあ、いいや。どうせここで死ぬんだし。

「意外と楽しかったよ」

どういうことだ、と尋ねる前に、俺の首に向けてギロチンのように肘が振り下ろされた。俺の首ははねられ、滝のように血が流れる

わけじゃなかった。止まったのだ、いや、弾かれたのだ。起動が逸れ、地面に激突して砕け散り、石礫が俺に当たる。

「虫どもが……」

「あたしはお前みたいなウソつきは嫌いなんだ」

「なな……し……？」

デカイ銃器を持った七紫がいた。髪は結んでおらず、綺麗に伸びた長い髪を下けている。彼女は走ったのか、少し息が切れていていた。

「お前は超能力者か？　答えがどちらであろうとも邪魔をしたのだから、殺すけど」

七紫は躊躇というものを見せずに、

「お前の敵だぜ」

「ふん、女のクセに。よく軽口を叩けるものだな」

「何度だって言ってるぜ。それに、うそつきは泥棒の始まりだ。

泥棒はいけない。だから、お前らはここにいちゃ、いけないんだ！」

七紫が模造刀を掴み、変化させつつ、踏み込む。俺は心の中で叫んだ。近づくな、と。

しかし、その俺の心の叫びは無駄に終わった。なぜなら、七紫がさも当然のごとく鎧の刀を受け流していたからである。

キーン、キーンと金属が打ち合う音を俺は混濁した意識の中で聞いていた。鎧が振り下ろす刃の速度も速い。そして、七紫もそれに反応をし、上手く力を逃していた。彼女は刃の重圧を身体を使うことによって手から足、足から地面へと受け流していた。これなら、長期戦も持つはずだ。

「ならば……！」

鎧が大きく距離をとる。三角型の銃口。あれは……………プラズマガン。

「七紫！ 伏せろ！」

「へっ？」

無意識のうちに叫んでいた。七紫は一瞬ぼかんとした表情になったが、すぐに伏せてくれた。その刹那。高速でバチバチというスパーク音と共に彼女の頭上をプラズマが駆けて行った。

コンマ数秒でも伏せるのが遅れていたら、人間が焦げるのを見ってしまうところだった。七紫もこれには驚いたようだった。

「隙を見せたな！ 綾瀬！」

「やばっ」

伏せたおかげで彼女は大きな隙を相手に見せてしまった。鎧は助走もせず、脚力だけで四メートル近く飛び上がり、彼女踏み潰そうとしている。

防げない。瞬時に分かった。あの質量と高度だ。落下速度は尋常

ではないだろう。しかし、彼女は変化させた模造刀で鎧の頭を切りつつ、横に飛び上がって避けた。過負荷のせい、刀は折れたしまったが。

鎧の頭が真つ二つに割れた。これで肌が出る

「な……あ……お前……」

鎧の中から出てきたのは女だった。しかも俺の良く知っている女だった。

「あら、ゴミ瀬。ごきげんよう」

湖南英理子だった。機械で出力していた声だったから彼女だとは分からなかった。しかし、なぜ彼女が超科学にいる？ あいつはただの美人局だろう？ ちょっと道化を演じるのが得意な女の子だろう？ ただの、普通の、一介の、何の変哲もない、今どきの女子高校生だろう？

「ビックリした？ でもビックリしたのはこっちだけだね。あんたまさか超能力者だなんてねえ……。まあ、別にどうでもいいか。そういや、この娘学校で見たことあるんだけど」

「な、なあ、綾瀬ということだよ……？」

膝がフルマラソンを走った後のようにカタカタ震えているが、それでも俺は立った。気分はだいぶん楽になってきた。ただ、思考がぐちゃぐちゃだった。

「七紫、こいつは俺のバイト仲間だった。だったんだ……」

「そんなことに絶望してんの、アンタ？ ぷっ……あははははははははははははっ！ ウケる！ 友情やら絆やら……そんなものアニメの中だけだったの！ ここは現実。分かる？」

「そんなのってねえだろ……」

湖南はひどいやつだった。自己中で、傲慢で、ナルシストみたいなところもあつたけど、嫌いではなかった。なんだかんだで楽しかったのだ。しかし、今は殺すか殺されるかの関係になってしまった。それが俺にはたまらなく悔しかった。初めてだ。こんなことは。

「七紫は隣のクラスのヤツだよ……」

それを何とか受け止める。手首が一瞬で持つていかれそうになるほどの重さ、そして両肘に刃がついてるから次の攻撃までが早いのだ。次の攻撃はほとんど、無意識のうちに受け止めていたに近かった。人間の防衛本能というやつだ。目視で確認したわけではないが、七紫は俺がいるからなのか銃を撃てないでいるようだった。

これを何回も繰り返されたら、こっちがもたない。何か、方法はないのか。何か

「ぐっ おおおおおおおおおおおお
 おおおおおお！」

ほんの一瞬。俺は鎧の後ろに駆けた。

「七紫！」

「おりゃああああああ！」

銃が乱射された。あのまま乱射し続けても弾切れになるのは明白である。その前に湖南を倒すしかない！

「くっ……邪魔だ！ 超能力者！」

七紫のほうへ距離を詰める湖南。俺は安堵していた。

なぜなら、湖南の捨てたプラズマガンが俺が手に取っていたからである。こいつの威力は徹甲弾よりは上のはずだ。そう、信じて俺はプラズマガンを持ち上げる。重いが、持てない重さではなかった。しっかりと狙いをつけ、そして、

[illegible]

思った以上に反動はなかった。撃つときに、ガシャガシャ！と機械やらスプリングやらが動く音が一瞬だけ聞こえ、雷光の弾が発射された。それは、確実に湖南の背中を捉え、

「くそっ、しまっ……！」

バチバチバチ！ と超高压電流が鎧を駆け巡るのが分かった。死んだ？ 死んだのか？

湖南は七紫の目の前で膝から崩れ落ちた。俺の手には彼女を殺したプラズマガンがただ一つ。ガタン！ という音を立てつつ、それを落とす。左腕を動かそうとする。……動かない。歩こうとする。

……足が動かない。急にめまいがして、俺はそこに倒れこんだ。ぼたぼたと血をだらしなくたらしながら。
もうげんかいだった。ぜんぶうごかない。のうのかいてんもわるくなっていつてる。だれかがちかづいてくる。だれだっけ……まあ、いいや。どうだってかまわないし。

「おい、どういふことなんだよ!? 説明してくれよ!」

……誰の声だ。重い。身体が重い。全身に人がのしかかっているよう。視界もはつきりしない。どうやら、俺は横になっ
っているようだ。

「わたしは知らない」

女の声だ。とても透き通っている。そう、氷室さんの声だ。

俺は確か、超科学であつた湖南と戦つて、プラズマガンで湖南を撃つて、倒したはずだ。そこから記憶がぱったりと無いという事はそこで俺は力尽きてしまったのだらう。ああ、なんと情けないことか。

七紫はどうなった。俺の身体はどうなった。湖南はどうなった。なぜか、声を出すのに時間がかかる。

「が……ああっ……」

肺の中から濁っていた空気が一気に外へ出る。そして、

「おっ、気付いたか、綾瀬!」

「……七紫か? ここはどこだよ。俺、確か……」

「ここは事務所だよ。君は秋月くんに運ばれていた。一度、秋月くんの家に運ばれてきたんだが……彼女が君の名刺を発見して、ここに電話してきた」

明滅する意識が徐々に安定した視界に変わっていく。見慣れた天井だった。

体を起こそうかと思うと、全身に鋭い痛みが走る。焼いた鉄と背

骨を入れ替えたような痛みだった。七紫が救急車を呼ばなかったのは、俺たちが超能力者だとバレてしまう可能性が高いと思ったためだろう。あんな惨状を見て、一般の人が助けしてくれるはずもない。最悪の場合、来た人間がパニックを起こして殺されてしまうかもしれない。なかったのだ。

「ああ、身体は動かさないほうが良い。全身打撲のようなものだ。しばらくは安静にしたまえ。君のかかりつけの医者を呼んであるから、じっくり診てもらおうといい」

「ははっ、かかりつけの医者まで知ってたんですか……。怖いなあ…… 現代社会」

「何か言ったかい？」

「いえ、何も」

今の俺の身体は、指が触れた程度で痛みが走るくらいの症状なのだ。ああ、こんなときに沙希がいてくれれば、『もとに戻す』能力で戦闘前まで戻してもらえるのに。

そんなたればの思考をしていた俺は、

「七紫、サンキューな。お前に運ばれてこなかったら、俺、のたれ死んでいたと思う。だから今日からお前は俺の命の恩人だ」

恥ずかしながらも話す俺に対し、彼女は屈託のない笑顔で答え、「友達だからな。当然だぜ。それに綾瀬もあたしの命の恩人だ。お前がやらなきゃ、あたしは死んでたんだからな」

「お互い様ってことか」そして、俺は続けざまに、「七紫、あの鎧どうなった？」

ほんの少しだけ声色を変えつつ、たずねる。すると、彼女は、

「いや……あたしは知らない。綾瀬が倒れたあと、すぐにお前を運んだから、あいつの容態は知らないんだ。それで、あいつはお前の…… その…… 友達なのか？」

「ちよつとしたバイト仲間だ。まさか……。あいつが、ねえ……」

現代の怪人二十面相。

どこまでうその皮を被っているのか分かったものじゃない。超科

学にいるのだって、彼女の本望ではないはずだ。いや、そう信じた
い。

「氷室さんは聞きましたか？」

「ああ……気の毒な話だ。ここの子どもたちが血で血を争うような
戦いをするとは……。悲しいものだな」

「湖南に今までそういう傾向ってありましたか？ そうだと、怪我
が直ったあとに探りやす」

「ダメだっ！」

俺の言葉を絶叫で遮ったのは、七紫だった。

「これ以上、危険な目にあうな！ 次は本当に死んでしまうッ！
友達を死なせるわけにはいかないんだッ！ もう、二度と！」

ぎりり、という音が聞こえるほど彼女は、何かの激情を抑えるよ
うに歯を食いしばっていた。確かに、彼女の言うとおり俺は一步間
違えれば脳天から真ッ二つに斬れていた。今回も運よく、倒せただ
けのことだった。

俺はそれでも超科学の連中とは戦うつもりでいた。超能力者とし
ての意地なのか、人間としての生存本能なのかは分からない。ただ、
戦わなければ死の道へは一直線だ。なら、俺はとことんまで抗って
から死のうと思った。

「死ねないし、死ぬつもりもない。俺は男の子だから、カッコつけ
て死にたいんだ。だから、無駄死にだけはしないから」

「綾瀬……」

七紫が何かをぐつとこらえて、その唇が言葉をつむごうとした瞬
間、

「あー、綾瀬くん？ これ、何なのかな。君の名前を知っているよ
うだったから……」

「うがーっ！ わたしは人ですっ！ 下ろしてくださいっ、変態ッ

〜！」

「ぐあ……………」

シリアスな空気をぶち壊す人間どもがこの場所に馳せ参じたのだ

った。タイミングが悪いとかいう問題ではない。千紀は氷室さんが呼んだといていた。しかし、なぜ、彼の腕にナマケモノのように神原沙希がくっついていいるのだろう。

きつと幻想に違いない。幻想ではなくとも、彼女はここにいないはずだから、スルーしていこう。

「ありや、随分派手にやったね……。まあ、事情はあえて聞かないけど」

右手を上下にブンブン振りながら答える千紀主治医。珍しく、今日はタバコのようなものをくわえていない。あれは保健室専用なのだろうか。

いや、まず吸ってる時点でダメだが。

「ああ、今日はアレ吸ってないんだよ。呼び出されたおかげで休憩時間が丸つぶれだよ。もう。一日の楽しみが」

「ふがーっ」

「アレを一日の楽しみにしちゃいけないと思うんだが。で、先生。さつきからあなたの右手に巻きついていいるものはなんですか」

「わたしは人間ですっ！ ものじゃありませんっ！」

ようやく彼の右手からずり落ち、俺のもとへと寄ってくる。

「綾瀬さん…… なんのケガですか？ とっても痛そうですっ」

「全身打撲だよ」

俺の代わりに千紀が答える。

「このケガだと…… 全治三ヶ月くらいかな。何かによる過負荷での損傷。裂傷はないから大丈夫」

「そうなんですか……」

沙希は千紀がかばんから何かを取り出している隙を見計らってこちらへ近づいてくる。氷室さんは自分の業務に戻ってしまったているし、七紫は何かを言いかけたあと、椅子に座ってぼうつとしている。（あの、綾瀬さん。あなたの傷、わたしの能力で治せないでしょうか？ 十五時間以内ならもとに戻せますっ）

（おお！ 本当か！？ そりゃ、ありがたいが……。千紀先生が立

ち去ったあとにしよう。あの人、そういう力とか気にしない人だけど、あまり人前で使うもんじゃないからな)

(分かりましたっ)

全身打撲の原因は斬劇を受け止めすぎたせいだろう。一撃だけで手首が持つていかれそうになったほどの重さだったのだ。いたしかたあるまい。

まあ、まさか、思っても見ないことになった。沙希が来てくれたおかげでこの激痛地獄からは早く解放されそうだから、だいぶ気が楽になった。棚から牡丹餅っていうのかな、こんなときは。

「綾瀬くん、絶対安静だよ。いいかい？ 傷が治ったと思っても暴れちゃダメだよ？ 治ったと思ったたら一回来なさい。分かったね？」
「分かった」

まあ、その必要はないが、彼の前ではこう答えておく。

「じゃあ、僕は診療所のほうに戻る。何かあったらまた電話してくれて構わないよ。患者の面倒を見るのが医者の仕事なのだからね」
そして、彼は俺の耳もとで、

(時には人を疑ったほうが良い)

とだけ言った。彼も彼で忙しいのか、さっさと出て行ってしまった。むしろ好都合である。最後の言葉をなぜ俺に言ったのかは分からないが。俺は沙希に小声で、

(それじゃ、始めてくれ)

(分かりましたっ)

身体の芯が熱くなってくる。芯から広がった熱気はやがて全身へと拡散していく。そして、風船の中の空気が抜けるかのようにその熱気が全身から排出される。どこか懐かしいような感覚。まるで、身体が軽く空中に浮いているよう。そして、身体が一回転したかと思いきや、

(終わりましたっ)

少し、指を動かす。痛くない。いつもどおりである。さて、ここからどうごまかして帰るか。氷室さんは当然、沙希の能力の内容を

知らないのだから、俺が急に動けるようになったら不信感を抱くだろう。七紫は先ほどの通りなので、殴ってでも俺を止めそうだ。

ここは、こいつに送って行ってもらおうという口実のもと、脱出しようではないか。それなら何の不信感も抱かれなはず。この作戦完璧。

「氷室さん、ここにいつまでも置いてもらおうというのも迷惑だと思うので、沙希に家まで送って行ってもらってもいいですか？」

俺は、ほんの少しだけ沙希を見た。彼女もたまには頭が回るようで、俺のやろうとしていることが分かったらしい。その回転の速さを普段使って欲しいものだ。と俺は切に願った。

「ん？ ああ、ならわたしが車で君の家まで送っていいんじゃないか。神原くんもついでに送って行くよ」

「そりゃ、ありがたい」

話が違う方向にいったが、まあ結果オーライだ。家に帰ればいいのだ。そこから、また行動を起こせばいい。湖南について調べないといけない。それと彼女の生死もだ。

となると、今後、氷室さんの協力を仰ぐことは出来ない。怪我人という設定で過ぎさなければならぬのだから。また、生活に縛りが出てきた。超能力者であること、怪我人であることを隠さなければならぬ。そして、そのどちらをも隠さなくていい相手は、神原沙希だけだった。

氷室さんの車に乗り込み、住所を教える。彼女はすぐに分かったようで、今はすらすらと道を走っていた。やはり土地勘はないとダメなようだ。俺はそういうのが全くない。この前の仕事では、ネコを捜して見つけたと思ったら、ここどこ？ のような状態に陥り、三時間ほど市内を放浪したのだ。ようは方向音痴、である。

「綾瀬くん、しばらくバイトのほうはやってもらわないでいいぞ。家で安静にしていればいい。最近は何かと物騒だからな」

彼女は怪我がなかったら、俺がすぐにでも湖南について調べるこ

とを分かった上で釘をさしているのだろう。全く、上司には頭が上がない。

「分かってますよ。こんな身体じゃ動けませんからねえ。動きたくても動けませんよ。まったく湖南のやつめ……」

最後だけは本当の感情だった。湖南をこのままほったらかしにするつもりがなかった。他人ではなく、友達だから、見捨てるわけにもいかなかったし、それに仕事でつけていた貸しをまだ返していない。

そんなことで思いふけていると、いつの間にかオンボロアパートの前に。鍵を出そうとポケットをまさぐる。ない。

また合成するほかなさそうだ。

そこで俺はふと、思う。俺は能力の発現に代償を払っている。しかし、他の能力者たちはどうなのだろう。何の代償もなしに能力を発現できるのか。俺は能力者同士でつるんだことがないから分からないのだ。この際、先に聞いてみるのもいいだろう。沙希に肩を持つてもらい、怪我人のふりをしつつ、聞く。

「なあ、沙希。お前は超能力を発動させるとリスクとかあるのか？俺は能力を使うたびに血を失う。お前はどうかんだ？」

そこで、彼女は一瞬ためらうように口を塞いでから、

「わたしにはそういうのありませんよ。綾瀬さんが特別なんじゃないんですか？」

「そうなのか……」

俺、使えないじゃん。沙希以下。ホモサピエンス以下。アホ以下。「うつつうつつ……」

「わわわ！綾瀬さん、何で急に泣いてるんですかっ！？どこか痛いところでもありましたかっ」

「いや、自分のアホさ加減にうんざりしただけだ……気にするな……」

「どうしてわたしを見ながらそういう事を言うんですか。絶対、私に関することですよ……」

「なんでそう思う」

「女の勘です」

女の勘。それは最もアテにならなくて、最も的を射た発言。これを使われるから、現代の男は草食系とか言われるんだ。まあ、今に始まったことじゃないが。

とりあえず、鍵を合成しなくては。

「お前、金属もってないか？ 金属なら何でもいい。鍵を作る」

「金属……？ ちょっと待っててくださいね……」

「金属なら、私が持っているぞ」

また、背後から氷室さん登場。もう驚かない。

「で、どんなやつですか。見せて下さいよ」

「うーん……君のリアクションが薄い……面白くない……面白くない！ 面白くない！」

だだった子のように言う彼女。車の中で感じ取った上司の威厳はどこへやら。

「面白くなかったから、もうあげないよ！」

「どんな理屈だよ！？ 早く出せよ！」

「何をだい？ ああ、これから動けないからエロ本を出せという事だったのか」

「違いよ！ エロ本はいらねえよ！ あんた話が通じてないのか！？」

「じゃあ、これはもういらないか」

「どうしてあんたは俺の好きな属性まで知ってるんだ」

「私は君をいじるために降臨した人間だ」

なんか、沙希がゴミを見るような目で俺を見ていた。どうやら今ので俺は社会的に死んだようだ。

「いろいろおかしいぞ……。あんた……」

なぜ、氷室さんが俺の趣味である妹系女子のああいふ本を持っているのだろうか。そして、俺はどこまで調べ上げられているのだろうか、と心底不安になるのだった。

「もうすっかりしたから、はい、ヤスリ」

「あんたは何のためにこれをもってたんだ……。ありがとうござい
ます……なんか余計に疲れました」

「面白ければ、全てよしだ」

「絶対あんた、おかしいよ……」

「綾瀬さんのほうが数倍おかしいです」

氷室さんのせいで、こいつに見下されるハメになってしまった。
文句を言おうかと、彼女のほうをふりむくと、すでに車の中であっ
た。彼女は捨て台詞に、

「お幸せにー！」

「するか！」

やるだけやって帰ってしまった。なんとあくどい人か。

とりあえず、沙希の目線が痛いほど突き刺さっているのを無視し
て、ヤスリを合成する。二回目なので、瞬時に出来た。

「サンキューな。沙希。ここから帰れるよな？」

「はい、一応は」

「じゃあ、ちょっと悪いが今日は送れないんだ。すまん」

「いえ大丈夫です。それと、わたしは妹キヤラにはならないので」

「それを言うな！　というか言わないでください！」

思いつき頭を下げる。

「あははははっ、今日の綾瀬さんは面白いですっ」

彼女はとても満足そうな笑みをしながら言った。彼女の見せる素
の表情はとても綺麗だった。

「じゃあな、気をつけて帰れよ」

「はいっ」

「あ、そうだ、ちょっと待て。携帯の番号交換するぞ。そっちのほ
うが連絡が取りやすいからな」

「え、ああ……はい」

赤外線送信で俺の携帯の番号沙希の携帯にを送る。沙希は俺にと
って、重要な人材だ。血も回復できるし、ケガも回復できる。万能

だ。だから、戦いが終わったときに呼べるようにしておくといいのだ。暇つぶしのときの話し相手にもなるだろうし。

なんだか、彼女の表情がいつもとは違う呆け方をしていた。

「おーい、終わったぞー」

「えっ、あっ、はう、はいっ！」

「どうした。体調でも悪いのか？　なら、千紀先生のところに行つたほうが……」

「ただ大丈夫ですっ！　それではさようならっ」

なんだか変なやつだ。いや、もともと変なやつだけど。そんな違和感をすぐに忘れて俺は家に入ったのだった。

『えーあれはおそらく、内部にモーターをですね……』

テレビでハゲたおっさんが何かを話している。議題は『超科学』その技術力は高くない』だった。実感していない者たちには分からないのだろう。

あれは、現代の技術力をはるかに超えている。

プラズマガンだってそうだ。今の科学ではプラズマについては未だ研究段階。それを超科学はいとも簡単に、銃代わりにする。肘の刃はダイヤモンドさえ切断しそうな勢いだったし、あの鎧自体が化け物じみた性能を有している。

現代の科学者達はそれを認めたくないのだろうか、はたまたメディアに出演しているだけなのかは分からないが、一つ確実にいえることは、あれはただの化け物集団ってことだけだ。

「うーん……あんまり更新されてないな……」

ネットの記事を見ても、初期の頃より情報の流出量が減っていた。警察が介入しないという記事からはもうほとんど超科学については書かれてはならず、ただその推測をしているだけだった。

そんなことよりも、湖南だ。湖南の消息情報を掴まなくてはならない。頼れる人物は……今は千紀しかない。

彼なら事情を分かってくれるだろうし、色々な情報のパイプを持

っているから、超科学の情報の一つや二つぐらいは知っているはずだ。そこがダメだったらあとは自分でやるしかない。

「とりあえず、夜まで待つしかないな……」

今日は七紫と一緒に夕食を食べられないことを少しだけ、悔やんだ。

「なんか今のうちにやっておくことあったっけ……」

飯がなかった。このまま千紀のところに行くまで、絶食というのも辛い。そう思ったときに、ピンポンとドアホンが鳴った。

セールスだろうか、宗教団体の勧誘かな、と思いつつドアを開ける。俺はその時、なぜ、ドア越しに誰がいるのか確認しなかったことを後悔した。

「綾瀬さん、こんにちは」

「天笠……」

天笠時雨が立っていたのだ。今さらながら言おう。俺はこの女が苦手だ。

俺に深く入ろうとする。それになぜだか抵抗を覚えているのだ。

本質的に合っていないのかもしれない。俺だって、俺なりに努力はしているのだが……

「宣言どおりにお料理を作りにきました」

「いや……あのな……冷蔵庫に今食材がないから、今日は帰ったほうがいいんじゃないか？ お前の母親も俺と一緒にいたら色々心配するだろうし……」

自分でも分かるくらいに挙動不審であった。今から千紀のところに行くので天笠は連れて行けない。彼女は超科学について何も知らないのだ。死なせたくはない……が、苦手である。矛盾している。「食材なら心配いりませんよ。そ、その……恭耶さんのために買ってきたんですから……」

頬を朱に染めて言った。素直に言うと、その仕草は文句なしに可愛かった。もうこうなったら覚悟する他あるまい。

「……分かった。入ってくれ。俺は飯を食ったら外出予定があるか

「あまり長居は出来ないぞ」

「はい！ 分かりました！」

狭苦しいこのアパートのキッチンほとんど使われていないからとても綺麗である。そんな場所にエプロンを着た女の子が立つというのは天笠が始めてだ。なんだか、何もしないというのももどかしいが、料理なんてほとんどしたことがないのでうかつに手を出せない。

悶々と悩む俺に対して、天笠は楽しそうに食材を切っていた。料理番組で使っているような包丁より二周りほど大きいものを使っていたが気にしない。

「もう少しで出来ますよー」

「あ、うん……」

俺の中でのギクシャクは時間が解決してくれるだろう。ほんの小さな、切なる願いだった。

その数十分後。

「できましたー」

テーブルの上に置かれたのはミートスパゲッティ、サラダ。ガーリックトーストもあった。普段こんなものを食べない俺にとってちよつとセレブ気分である。

まあ、こういうのは大抵、料理が初めてだとかで劇的に不味いというベタな展開があるというのを頭の隅に押しやりつつ、それを食した。

「ど、どうですか……？」

「うまい……うん、うまい」

「良かったですー！」

スパゲッティの麺は俺の好みのおりにゆでられていて、このミートソースも俺の好みの味加減で……。というか彼女はなぜ俺の好みの味加減まで知っているのだろうか。怖い。

最近、俺の内情を探る人間が多くなってきた。現在確認されているのは天笠、氷室さんである。ので、周りに注意しつつ生活し

よう。うん。

「良かったです……お兄ちゃん？」

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

なぜ、俺の機密事項が二人にも漏れているんだろう。怖さを飛び越して、泣きなくなってきた。そんな思いを噛みしめつつ、美味な飯を食べる俺であった。

「天笠、俺もう行くからお前も一緒に出るぞ。早くしろ」

「分かりました……ああ、恭耶さんとの甘い空間が……」

この古臭いアパートのどこに甘い空間があるというのか。わけがわかりません。乙女心はこうも複雑なものなのか。

鍵をかけて、どんよりとした冬の空気に身を投じた。その途端、帰りたいと思った。インドア思考なだけで、断じてニート思考ではない。

「なんか今日は天気崩れそうだな……。早めに帰れよ」

「……むむむむ」

なんだかご機嫌斜めである。珍しい。

「今日は恭耶さんについていきます！ 最近、恭耶さんの周りに汚物がちらほらしているので！」

「汚物？ 俺の洋服になんかついてたか？」

「そういう汚物ではありません！ 恭耶さんの服はわたしが……ではなく。ここ二、三日なんだか女の人が多いです！ 汚物です！」

「汚物って……」

彼女は俺に固執しているが、それ以上に俺に近づく人間への対処が実に刺々しいのだ。この前、七紫と話しているときに天笠が横からカッターを絶妙なカッターさばきで投げてきたのは記憶に新しいことだ。

「いいか、天笠。前にも言ったように偏見は良くない。だから、人

を汚物というのは避けるんだ」

天笠に話しかけるときはほんの少しだが、口調が柔らかくなる。これは依頼内容のためか、それとも他の理由か。

俺は自分のことが分かつてはいない。意識的には分かっているのだ。ただ、それを感情が否定する。分かっているのだが、分かっていない。それが今の俺の状態。頭の中で考えがぐちゃぐちゃどろどろべたべた……。

「恭耶さんがそう言うのなら今度からは直します……。でも、恭耶さんは勝手ですよ……。いつも一人でどこかに行って……」

「そうなのか……」

「そうですね。これでもわたしは心配しているのですよ？ 責任とってくださいよ」

心配させたというのなら相応の責任が生じる。今度どこかで買い物でも付き合ってやるのがいいだろう、と思い俺は渋々、

「……分かった。場所はどこがいいんだ？」

「じゃあ、今ここで……」

天笠は何の意味を取り間違えたのか、服のボタンを外し始めた。

「そういう意味じゃない！ 主語を付け忘れた俺が悪かった！」

「ええ……。せっかく勝負下着だったのに……」

最後の言葉はあまり詮索しないほうが良さそうだったのでスルーする。そして、とてつもなく残念な顔をする天笠。こんな顔は初めて見た。

「そういうのじゃなくてだな……。その……。心配させた代わりに今度、一緒に買い物に付き合ってやるってことだよ」

「ほ、本当ですか!？」

「最近なるべくウソをつかないようにしてるんだ」

「で、デートかぁ……」

拡大解釈しているようだ。本人が楽しければいいだろう。ほとんど変わらないのだし。実のところ、言ったことを後悔しています俺、恥ずかしさで死んでしまいそうだ。

「ま、日にちはおつて連絡するから今日は帰れ。分かったな？」

「でーと……」

ぼーっとしているから、ついてくることはないだろう。二時間くらい動かなさそうだったので、俺のアパートの玄関の横においておくことにした。ここなら雨が降っても濡れないし。

「さあて……行くか」

少し早足で千紀の病院へ向かう。あるいて一五分ほどの住宅街のちよつと外れたところにある。

看板には千紀内科、と書いてある。病院の中に入り、受付の紙を見るとある程度人が入っていたことが分かった。患者の千紀に対する信頼が伺える。今は、休憩時間だから患者では誰も入ってはいない。

「千紀先生ー」

呼ぶと、すぐに彼は出てきた。

「君、全身打撲だったよね」

「そうだけど」

「どうして動けるの？」

「諸事情で」

「……はあ。分かった。詮索はしないよ。で、今日は何の用？」

予想通りに事が運んだ。俺は千紀に超科学について知っていることをある程度しゃべり、彼に情報を集めるよう頼んだ。

「うーん、あれは今話題になってるし、集めやすいとは思っただけど……」

「何か不都合でもあるのか？」

「まあ、ね。最近、それに関する情報の更新が止まっているでしょ。それだけが気がかりなんだ」

「突き止めた人間が殺されているとでも？」

「可能性にはあり得る話だしね」

確かにあり得ない話ではない。数時間に一回は更新されていたものが今ではぱったり、などというのは不審だ。ただ、ニュースで人

が行方不明だとか死亡が確認されたとかいう報道はされていないからその線は疑っていなかった。

しかし、超科学は警察に介入されない。

そこを有利に使い、人の戸籍ごと消してもおかしくはないだろう。警察が介入しないなど、聞いたこともないからだ。『血のクリスマス』だって警察と自衛隊が止めた。それが通用しないともなると、個人で情報を暴き出すしかないのだ。

「とりあえず、何でもいい。何でもいいから、超科学に関する情報を教えてくれ。あと……湖南のことも」

「分かったよ。でも最近君の周りでは事件が起きすぎてる。注意したほうがいい」

だから、事務所を出るときに周りに注意しろだのと言ったのか。真意が汲み取れてよかった。

「忠告どうも。でも俺は簡単にのたれ死ぬ男じゃないんでね。それにしばらくはあのクリムもいらなくなりそうだ」

「へえ。新しい治療法でも見つけたのかい？ それとも幻覚でも見てるのかい」

「クスリはやってねえからそういうのは見ねえよ。どっちかっていうと危ないのはアンタなんじゃないか？」

「ここでは言わないって約束でしょ」

千紀が少し困ったように言う。

「へいへい」

「とりあえず、そのことは時間をかけて調べるから少し待っていてくれないか。何も分からない組織だけに時間がかかるんだ」

「分かった。じゃあよろしく頼む」

メールで伝えるように言い残し、病院から去る。そろそろ患者が来る頃でもあるのだ。患者以外は退散、と。

明確な情報がない限りは動かないほうが身の為である。俺は心底氷室さんのバイトを受けてよかったと思う。こういう思考も全ての事務所の汚い仕事から学んだものだ。

ただ、それでもおかしい点があった。

なぜやつらから手を出してこないのだろう。俺一人殺すなど容易いことなのに。敵とエンカウントしなさすぎだ。

しかし、気にしても陰鬱な気分がループするだけなので考えることをやめた。

「こんなときは楽しいことを考えるか！　って言ってもな……」

楽しいことなどない悲しい高校生の姿がそこにあった。まぎれもなく俺だった。楽しいといわれれば楽しくもあり、同時に怖い天笠との擬似デートを除けばの話だが。

とりあえず日程だけはメールしておこう。来週の木曜日、と。

その後五秒ともたたず返信が来たのは言うまでもあるまい。

それから一週間が過ぎた。どうこう言うまでなく過ぎた。あまりにも日々が無機質だった。後ろから視線を感じ取ったりもせず、襲われることもなく、正月もあまり盛り上がることもなく、たまに沙希とメールのやり取りをする程度の一週間だった。

そして、俺は天笠との決戦に望むべく、待ち合わせ場所に立っていた。周りにはちらほら和服姿の人間が目に入る。今日は初詣にでも行くか。

「うわぁ……。俺、意識しないうちに大胆なことやってたか……？」

日程もあまり考えず来週の木曜って送信し、カレンダーを家に帰ってみるとその日は既に一月であった。しかも、正月近く。

天笠が焦ったのも分かる気がする。やっちまったな、俺……。そんなことで自己嫌悪にふける俺であったが、そんな考えは一気に吹き飛んだ。なぜなら、

「すいません……ちよつと遅刻しちゃいました……」

赤色の和服姿の天笠が目の前に立っていたからだ。ほんの少しだが化粧をしている。彼女はまるで和製人形のように、俺を上目遣いで見上げてくる姿の破壊力はもうプラズマガン並であった。たった

今、俺の頭の中が感電死した。

「恭耶さん？ 怒ってますか……？」

「いやいやいやしょんなことはない！ とりあえず、あけましておめでとう！」

噛んだ。思いつきり噛んだ。焦りすぎて噛んだ。

「え、ええ……。新年、あけましておめでとうございます。早速なんですけど、最初はどこに行きますか？ できれば、和服も着てきたし、初詣に行きたいかなあと……」

「ああ、そうしようか……」

今になって心臓がバクバクになってきた。仕事やるよりも緊張するって一体どういう事なんだ……。

「うふふふ。嬉しいです、こうやって恭耶さんと一緒に出掛けられるのは」

「そ、そうか。それにしてもその和服似合ってるな。高かったんじゃないか？ 材質からいってもなんだか……」

「そう言われるとうれしいです……。これ、うちのお母さんのお下がりでなんですよ」

「へえ……そうなのか」

確かに天笠の家は金持ち一家である。父は企業家、母は元父親の秘書。兄弟はおらず、一人っ子。こんな家計だ、こんな綺麗な和服があってもおかしくはない。

「じゃあ行くか。時間をもてあますのも良くないしな」

「はい」

こうなんていうか……話しかけづらい。お互い無駄に緊張してる雰囲気である。

俺は自分で一週間前にデートではないと意識しつつも、今に至っては、ガチガチに緊張している。自分の身体が自分のものではないように、例えるなら石の身体を動かしているような感触だ。

彼女など人生で一度もいたことがないネクラ系男子にとっては緊張してしまうのである。ましてや初詣。まさに未知との遭遇である。

「こうやって歩くのも初めてだよな。お前と会ってから……ちょうど一年くらいか？」

「ええと……来週で一年ぴったりで。わたしの最高の思い出の日です。恭耶さんの日です」

「そんな日は作らんでいい……。まあ、覚えてるだけ嬉しいかな」

「その日は一周年記念をやります」

「何をするんだ」

ほんの少し期待する。

「恭耶さんの写真の前でお祈りをささげます」

「やめろ！俺が死んでしまっているみたいじゃないか！」

「次にその写真の前でお祝いのケーキを食べます。ろうそく付きで、ろうそくは付けていい！俺が悲しいから！」

「その日の終わりには抱き枕を抱きつつ寝ます。恭耶さんの写真がついてるんですよ。オーダーメイドです」

「怖くなってきた……」

写真漏えい、情報漏えいを確認。まずもってそのオーダーメイドをやってる店が怪しい。よく人の写真が入っている抱き枕を作る気になったものだ。プライバシーがあるだろう。

聞いたところ俺は天笠の中では祈りをささげるまでの存在らしい。いったい、どういう感情なのだろうか。好きとか嫌いといった感情ではないような気がする。

「まあ……死んだ扱いにはしないでくれ」

「死んだ扱いなんかしてませんよ。わたしと恭耶さんは一心同体なのですから」

「始めて知ったぞ」

他愛のない会話をしているといつの間にか神社の前に着いていた。いつもは人気がまったくない神社であるが、正月のシーズンなので参拝客で人が溢れていた。俺たちはその人ごみの中に入って並ぶ。

その中でも天笠は注意を引く存在であり、老若男女問わず彼女の姿を見る人間が多い。彼女はおびえたような様子で俺に近づいてく

る。

仕方があるまい。一年ちよつと前まではいじめを受けて、精神的ダメージを受けたのだから他人におびえても仕方がないと思う。少なくとも、俺は、そう思っただった。

ちよつと目つきを鋭くさせて、周りの目線をそらすようにした。

「ありがとうございます、恭耶さん」

「俺は何もしてないぞ。もとからの顔つきなんだ」

無事にお祈りを終え、おみくじも引いた。俺は凶、天笠は大吉だった。ひとまず、神社を出る。

「今どき凶なんておいてある神社があるのかよ。驚いたが……俺の運勢は一体どうなっているんだ……」

「大丈夫です、恋愛だけは保障できますよ。わたしがついてるんですから」

「そりゃ、ありがたいな」

だんだん俺の彼女に対する今までの抵抗が弱くなっているような気がする。以前は、俺自身が彼女との接触を避けていたのかもしれない。食わず嫌いと同じである。

あまり話してもいないのに嫌い、というのは相手に対して失礼だ。俺はそう思い、一つの提案をした。

「天笠、今日はお前に一日付き合うぞ。言いだしっぺはお前だからな、好きなところに行つてやるから。どこがいい？」

「えっほ、本当ですか!？」

「言ってるだろ、ウソはつかないようにしてるんだ」

「えと……じゃあ、買い物に行きたいです。もとからの予定だったんですけど……」

「確かにな。でもその和服じゃ、ちよつと動きづらいんじゃないか? 一度家に帰つて着替えて、もう一回集合したほうが良いだろ」

「そう……ですね。そうさせてもらいます。じゃあ、場所はさっきと同じで。時間は一時間もらえますか?」

「分かった」

一旦別れる。時間までかなり余裕があるので、俺は千紀のもとへと歩みを進めた。今日の朝メールで、『とりあえず調査終了。詳細はいつでも聞きおいで』とのことだ。なぜメールで詳細まで送ってこないのかは分からないが行ってみるほがあるまい。

正月休みで診療所も休みのはずだ。裏門から、インターホンを押す。インターホン越しに、

『はいー。どちらさまですかー？』

「俺だよ。綾瀬だ」

『なんだ、綾瀬くんか。とりあえずあけておめでとう。さ、中に入って』

言われるがままに奥に進むと、玄関を発見。その玄関から私服姿の千紀が登場した。彼の私服姿を見るのは意外にも、初めてである。と言っても普通の人と何ら変わりはない。

「こんなお正月なのに君も暇だねえ」

「俺だって暇じゃない。あと四十分もしたら忙しくなるんだ」

千紀は俺を舐めまわすように見て、

「そうかそうか。いやあ……良かったね、綾瀬くん。まるでお嫁さんが来た親の気分だよ」

「あんたは一体どんな想像をしたんだ。拡大解釈すんなよ。でもまあ……大体当たってると思う」

「そうかやっぱり！ まあ、立ち話もなんだから入ってよ」

中に入る。流石は医者だ。俺のオンボロアパートからは感じられない風格とにおいがあつた。リビングがまずもって大きい。ソファやテーブルもアンティークだろう。

「うん、じゃあ座って。話は手短に進めるから」

そう促されるままに俺はそのアンティーク感が溢れんばかりに出ている椅子に座る。座り心地は普通だった。

「早速本題に入ろうか。綾瀬くん、今すぐだ。即刻だ。その瞬間にだ。この件から手を引きなさい」

「は？」

「詳しく話すのも良いけど、手を引かない限り話すつもりはない」
千紀の顔色がいつになく険しかった。どういうことだかまったく見えない。そんなに危ない用件なのか。超科学に命を狙われているって自覚が最近足りていなかったような気もする。

しかし、彼は近くで殺人事件が起きたと言ってもほとんど動じないような男だ。そんな男の表情をこんなにも険しくさせるといふことはまさに異常事態なのだろう。

「で、どうするんだい？ 手を引くか、引かないか。引かないとしてもこの件には深入りさせないようにするけどね。君は僕の患者なんだ。みすみす死なせるわけにはいかないんだよ。分かるかな？」

「……………」

俺は齒噛みする。実際、俺の本能は手を引けと言っている。しかし、売られたケンカはきちんと済ませたいのが俺の願いだ。

千紀は俺の死を警告しているのだ。なら、俺が選択するべきなのは……

「……分かった。手を引く。もうこの件には関わらない」

「うん。理解がいいね、君は。じゃあ話そうか」

千紀の雰囲気がいっつも温和なものに戻る。そして彼はタバコのようなものをふかしながらしゃべりだした。

「あの組織はまず人数が少ないんだ。世界各地に飛ばすのがやつとつてとこな人数しかない。日本でも十人くらいしかないんだ」

「通りで……」

「組織の人間は過半数以上が『血のクリスマス』に巻き込まれて、超能力者を恨んでる連中ばかりだ」

なら、湖南も『血のクリスマス』の犠牲者なのか。あの恐怖を胸の中に抱え込んでいる。家族はどうか知らないが、失ったものはあるはずだ。そう、俺と同じ境遇なのだ。

しかし、違う。

俺は超能力者。彼女は普通の人間。だからこそ超能力者を恨んだのかもしれない。

「本拠地は不明、その鎧とやらはたまに見えなくなることがあるらしい。監視カメラには映っているけど、人には見えていない」

「ゲームでよくあるステルス機能でもついてるっていうのか？　あり得ないだろ……」

「でもこれは現実だよ。そんなもって、その兵器は海外で作っているみたい……でも、そこに近づいた人間は全員消息不明になっているらしい。僕の仲間も危ない目にあう寸前だったとか。組織の財源までは突き止められなかった」

「そんなくらい分かれば十分だ。他には？」

「ええと……あ……」

「どうしたんだ？」

彼の表情が曇った。

「ええと、非常に言いづらいことなんだけど……」

「何でも良いけど？　俺は大抵のことは耐えられるぞ」

「神原さんのことなんだけど」

大きな変化（前書き）

終盤からエピソードまで一気にいきます

大きな変化

俺は千紀の家を出て、天笠との待ち合わせ場所にいた。

おそらく今、天笠とデートしてもあまり記憶には残らない。それよりも大きなことが俺の頭の中に叩き込まれたからだ。

（いや……今知ったからって一体何になるっていうんだ……！？）

動悸が激しい。呼吸も平常時に比べて荒い。視界が歪む。頭の中が壊れそう。一言で今の俺の状態を表すなら、パニック状態。それはついに限界に

「恭耶さん？」

「ッ！？」

つい、過剰反応してしまった。天笠は驚いた様相だった。

「恭耶さん、どこか具合でも悪いんですか？ 顔色もあまり優れませんし……わたしの着替えが遅すぎましたか？ そのせいで貧血が

……」

「だ、大丈夫だ天笠。ちょっと酔っただけだ、一回家に帰ってタクシーでここまで来たんだ。そのときに酔ったみたいなんだ」

「そ、そうですか。あまり無理はなさらないでください……わたしの都合で振り回してるんですから……」

「天笠、それは違う。俺は俺の都合で動いてるんだ。こうやって出掛けてるのも俺が言ったからだ。だからお前が気に病む必要はないんだ。分かったな？」

「は、はい……。や、やっぱり恭耶さんはやさしいです」

そう言われたが、俺は何も言わずに、歩き始めた。まあ、顔が赤かったからな……。

「なあ、天笠。どこに買い物に行くんだ？ 俺、そういうところ行っただことないからよく分からないんだ」

「じゃあ、『ローラン』っていうショッピングセンターがあるのでそこに行きましょう。駅から送迎バスが出ていたはずですよ」

「分かった、じゃあ行くか」

こうやって強がって歩いていても、頭の中のもやもやは取れなかった。この擬似デートを楽しめばこれが消えるかもしれないという甘い願いだった。

その『ローラン』という大型ショッピングセンターは最近できたらしい。若者から老人まで楽しめる施設を作ったらしい。

そう言うだけあって、確かに大きい。こんな大きいのは初めて見る。

「わあ……恭耶さんとここに来れるなんて感激だなあ」

「そういうほどでもないだろ。誘ってくれば予定あわせるんだけどな」

「そ、そうなんですか!？」

「誘いは無下に出来ないだろ」

そうは言ったものの、俺はおそらく天笠に限らず、女の子からそんな誘いが来たら俺は逃げるか、噛んでしまつかのどちらかの状態になってしまっただろう。

「こ、今度良かったら……」

「ん？」

「や、やっぱり、何でもありません……」

「そうか。ならいいんだけど」

一体何を言おうとしたのか気になるところではあるが、追求しないというのが紳士。こういうときこそ紳士であらねばならない。

「気付かないんですね……」

それが少し引かかったがそれも追及しない。紳士だからな。

「まあ良いです。恭耶さん、最初はここに行きましょう」

「おう」

店を回っているときの天笠は実に楽しそうだった。年頃の女の子相応の笑顔。店に入っては気に入ったものを見つけて喜んだり、一緒に食べ物を食べたり。

(いつもこうだといいいんだけどな)

と、親になった気分で心の中でぼやいた。

楽しい時間というのはあつという間に過ぎてしまうものらしく、気付いたら陽が沈みかけていた。天笠は帰りがけにお手洗いに行くとのことで俺は現在待機中である。正月でモール内も混んでいたから婦人お手洗いはものすごい混みようだろう。

ぼーっと突っ立っていると、

（沙希！？ どうしてこんなところに！？）

アリの大群のように押し寄せる人々の中に華奢な身体つきと横顔が見えた。なぜこんなに過剰に反応するのは、やはり千紀の話のせいだろう。

そして彼女の周りがおかしい。若い男、スーツ姿の女、コートを着た中年男性。

一見、普通の人間に見えるが、違う。明らかに違う。彼らはおそらく超能力者だ。雰囲気が違う。なんとなくだが、分かる。俺は人ごみをかき分けながら彼らを追った。

だんだん人の少ない場所へと歩みを進めている。

（一体どこへ行くんだ？ 何が狙いで沙希は……）

今どこを歩いているのか分からないが、こんなところで彼らを見失うわけにはいかない。

そして、俺はどこか大きな空間に出た。何にもない、ホールのような空間。

「綾瀬さん」

沙希の声が響くが、彼女の姿が見えない。

「帰ってください。わたしのことはもう知っているんでしょう？」

「そんなことよりもここはどこなんだよ！？ お前は何をしているんだ！？」

「……………」

沈黙が降りる。

千紀の話を思い返す。

神原沙希は、『血のクリスマス』の首謀者、神原茂の娘であると

の事。確かに、最初からおかしかった。

彼女とであつた廃ビルはその神原茂の隠れ家であつたはず。しかし、彼の姿と名前を知るものはいなかった。もちろん隠れ家なんて他の人間が知るわけがない。家族を除いて、だが。

そうになると、氷室さんも色々あるようにも思えてくるが、まずは目先の問題だ。沙希はあの場所も書類の事も、鎧の弱点の事も知っていたのだ。

（千紀先生、約束は破っちまうぜ……）

彼女は一体何をしようとしているのだろうか？

「おい、答えてくれよ！」

沈黙を俺が破った。すると、

「帰ってください」

「何？」

「ここから立ち去ってください、という意味で言つたんです」

「俺には関係ないってか！？」

「そうです」

さっきの沙希の周りにいたうちの二人が俺の両腕を掴んだ。

（こいつら、力強すぎだろ……！）

一気に外に引きずり出されそうになる。俺は必死にそれに抗うが、そう持ちそうにもない。

「俺は、お前を絶対に許さない！ だから絶対に」

俺の言葉はそこで途切れた。なぜなら、突如、轟！ という音と共に天井が崩れ去ったからだ。数銃のつぶてが俺の全身を打つ。

「綾瀬さんを外に逃がしてください！ その人は関係ありません」
恐るべき力で引つ張られた。いや、投げ飛ばされたに近いか。ただ、その投げ飛ばされる一瞬、鎧の姿を視界の端に捉えた。

一気に遠ざかり、そしていつの間にかもともといた、人の群集の中にいた。

彼らは戸惑っていた。どこかで建物が崩れた、と。そんな中に天笠を見つけた。

「きよ、恭耶さん！？ どこにいったんですか？ 電話も繋がらなかったし心配していたんですけど……」

半ベそかいていた。

「事情はあとだ。まずはここを出よう」

「あ、そういえばなんか建物が壊れたーとかスタッフの人たちが言っていましたけど……」

「良いから、早く」

鎧が見えたってことは沙希も危ないが、ここの人間も危ないという事だ。ひとまず避難しないと。スタッフを捕まえて、ウソを言っ
て避難させないとならない。他の人間が殺されるかもしれない。

あの『血のクリスマス』のようになってしまいかもしれない。こんなに他人のことを心配しているのはそれが脳裏をかすめているためだろう。

「天笠、とりあえず出口まで走れ。分かったな？」

「あの、恭耶さ」

きよろきよろしている女性スタッフを捕まえる。

「あの！」

「はい？ どうかなさったんですか？」

「さっき向こうのほうで誰かがショーケースのガラスを割ったんだ！ 強盗かもしれない」

「そ、それは本当ですか！？」

「ああ、店の名前までは覚えてないけど……。ここにいちや、危険じゃないか？」

「分かりました、すぐに確認を取ります」

俺がそう言った突如、ついにドン！ と爆発音が聞こえた。その音が聞こえた方角から人々が走ってくる。俺はスタッフの肩を掴み、「確認は良いから早く避難誘導を！ このままじゃパニック状態になるぞ！」

「え、ああもう！ 就職して一年経ってないのに！ 上司に怒られる……」

そう吐き捨てるように言った。上司の命令を無視して避難誘導するってことらしい。

「みなさん、慌てずにこちらの指示に従ってください！」

「なんか悪いことした気分だ……」

俺も逃げたほうがいいな。沙希は……また会えるだろう。その時に思いっきり引っぱたいてやれば良い。彼女を助けるべきなのか、そうでないのかも分からなかったのだ。

はやく天笠と合流しないといけない。しかしその焦りを加速させるように人の流れは遅い。携帯さえ取れないほど人が密集している。流石にもたまはすぎたようだ。

（うわあ……さっきから携帯のバイブが鳴りっぱなしなんだけど……うおお、取れん……）

あとで天笠がまた泣き顔になりそうだが、それも覚悟しておこう。「どっか他に出口は……」

天笠と回った店や店の周りを思い出す。出口は一つだけ記憶にあった。しかし、なぜその出口に向かわない？ 何かあるのだろうか、それとも人が知らないだけか。行ってみる価値はある。

もし、そこに何もなく、天笠を心配させてしまったらその時は、能力を使おう。

「ちよつとすまんね」

人を押しのけつつ列を抜ける。舌打ちや罵声が聞こえるが無視。今は駆け抜けるのみだ。

人がいないところをひたすらに走る。そして、その出口にたどり着いたが、

「なんだこれ……？」

出口だった、とでも言うべきなのかもしれない。外壁が崩れ去り、鉄骨はひしゃげ、出入り口の原形をとどめていなかった。崩落したビルにも似ている。瓦礫が三メートルほどの高さまで積みあがっていて通れそうにもない。

これを壊したのは誰だ？ 鎧かはたまた沙希の周りにいた連中か

……。まずもってこんな所においては危険なのでひとまずここを脱出しなければならぬと思ったとき、俺の視界に今まで見たこともないような形状の乗り物（？）があった。

一枚の板に、バイクや自転車のハンドルとサドルのようなものがついていて、それが浮いているのだ。先端は二つの板に分かれている。どこかのSF映画にでも出てくるような見た目だ。よくみるとフットペダルがご丁寧にもついている。それが三台ほど俺の目の前にあった。

（おそらく、超科学……）

俺はそう確信する。

「よし、乗るか」

ということとで拝借する（パクル）ことにした。バイクは乗ったところが一度だけあるので少しだけ分かるが……。サドルに座ると自動的に背もたれが出てきて、シートベルトで身体を固定された。バイクにしては珍しいな、と軽い気持ちでハンドルを回す

「うわああああああああああああああああっ!？」

ヘルメットをつけなかったことを即座に後悔した。かかるGがハンドルではない。まるで人に殴られているときのような重圧。ホログラムで速度計とナビゲーションが表示される。時速百キロ、加速時間五秒未満。しかし、なぜか俺はハンドル操作をミスしていない。

（人工知能か……？）

機械が勝手にハンドルを微調整してくれている。だから建物に激突しないし、バランスも崩さない。さらに他の細かい操作も全部人工知能任せ。便利なものだ。

しかし、このままだとあの人の群れの中に突っ込んでしまう。それだけは回避しなければならない。無関係な人間は殺すべきではない。

（こいつ……空気圧と電気で動いてそうだし、上昇できるか……？
それともスケボみたいに滑空するか？）

しかし滑空をするにしてもそれをするに適した地形がない。とな

ると選択肢は二つに一つ。操作も分からない状況での上昇を行うほかにないのだ。

「どうやるんだよ……上昇って!？」

ホログラムのナビゲーターには色々ボタンがある。しかし一体どれを押せばいいか分かったものではない。しかしこのまま長考していたら群衆の中に突っ込んでしまう。

「うへえ……しゃーない」

その中の一つのボタンを押す。すると、

（加速した！？）

身体にかかるGが増す。速度計を見る暇もなく、景色は変わっていく。しかし、視界はかすまない。これも超科学の技術ってことか。

（マズっ……！ あれ最後尾じゃん！）

このままの速度ではまんがのように人を飛ばしながら前進するだろう。俺は手当たりしだいボタンを押しつつ、魂から叫ぶ。

[illegible]

一つのボタンを押した瞬間、重力に逆らうように身体が浮いた。

いや、身体がではない。この乗り物が浮いたのだ。飛行機が離陸するときのような轟音を響かせながら、間一髪のところでは上昇に成功する。

「よし！」

避難をしている人々は皆一様に上を向き、ぽかんと口を開けていた。そんな人々を眼下に俺は『ローラン』を抜けた。

「天笠乗せて行くか……ってこれ二人乗りできんのか？」

そう軽い気持ちになっていると、ナビゲーターに変化が。赤い二つの点が、俺の位置を示す点に接近しているのだ。追っ手、ということだ。エアチエイズなんて人生の中でこれっきりにしてほしいと俺はぼやいた。

さきほど分かったのだが、あのボタンで高度の調整ができるようになっていらしい。これを上手く使えば逃げられるかもしれない。

しかし相手は即興で乗っている俺とは違い、これを使いこなしている手練れだ。いくら高精度の人工知能がるとはいえ、チェイスをして逃げ切れる確率は万に一つあっていいほうだろう。となると、これを使い捨てるしか道はない。

「この辺でいいか……」

高度を落とすにつつ、適当なところで減速し、着地。こんな作業も人工知能の修正がきいているようだ。ナビゲーターで位置は分かっているから、移動に問題はない。周りの目など気にもせず、無心に走る。あんなところにいたら鎧に殺されかねない。

携帯を取り出すと天笠からの着信が二十件以上あった。悪いことをしたとは思っている。しかし、命までかかっちゃしょうがないだろうと自分の中で言い訳をし、天笠に電話を掛ける。それはワンコール目で繋がった。

「きよ、恭耶さんですか！？ 今どこに！？」

彼女の超えはひどく憔悴していた。

「今は説明できない！ とにかく『ローラン』からは離れたほうが良い！」

「ダメです！ それは恭耶さんの言うことでも聞きません！ 何があったかちゃんとお話してください！ さっきの空に飛んでいたのは恭耶さんなんですよね？」

「そうだ。俺だよ」

『携帯に出てくださいよ』

「いや、無理だろ」

『とにかく、一度こちらに戻ってきてください！ 心配してるんです』

「……善処する」

『それはどう……』

彼女の言葉を聞かないで、俺は携帯の通話終了ボタンを押した。ここからだとい室さんの事務所が一番近い。そこに匿ってもらって追っ手をまいたほうがいい。彼女なら事情を分かってくれるだろう

うし、信用に値する人物だ。そう考え、俺は急いで雑居ビルへ向かう。

ビルの階段を駆け上がり、事務所の扉を乱暴に開けた。

「氷室さんっ！」

息を切らしながら叫んだが、返答はなかった。当然だ。いつも書類で埋まっていた事務所がデスク一つだけしか置かれていない空間になっていたのだから。整然とした空間。窓に書いてある『氷室探偵事務所』という文字がはがれている事に焦っていて、気付かなかった。空きテナントになっていた。

「おい……なんだよ……なんだよ、これ!？」

デスクの上にはこの不気味な空間を誇張するかのようにノートパソコンが起動済みで置かれていた。俺は恐る恐るその液晶画面の中を覗く。

普通の風景画のデスクトップだったが、ネットには繋がっていなかった。怪しいと思いつつ、マウスを操作をし、パソコンのデータを漁る。その中に、怪しいテキストファイルを発見した。それをダブルクリックし、開く。

「改変……?」

ファイルには『改変、13を参照』としか書かれていない。

「意味分からん……」

ましてや厨二病でもあるまいし……と思いつつ、そのファイルを開じる。しかし、その考えはあっさりと打ち破られた。あったのだ。その『13』というファイルが。少し焦りながら開く。

「うわ……なんだこれ」

開くと画像が出てきた。設計図だろうか。英語で書いてある。

この形、見たことがある。あの殺人的な破壊力を持つあの鎧と非常に似ているのだ。そしてその画面をスクロールしていく。俺はあるところでスクロールを止めた。

プラズマガンの設計図。氷室さんに見せてもらった、あの設計図だ。

これ一つなら何の違和感も無い。しかし、鎧らしき設計書と一緒の部分にあるということがおかしいのだ。さらに下まである。ざっと斜め読みしただけでも、詳しい内容まで書いてあった。

これは一体どういう事か。氷室さんの独自調査？ ならば話はつく。超科学に深入りしすぎて、このことが連中にばれて行方をくらますほか手段がなくなっただとか、証拠を失くすだとか。しかしそれだとこのパソコンを置いておいた理由が分からない。誰かに見せるため？ いや、違う。ダミーか？ 可能性の話だ。いくつもの考えが頭の中に浮かび、そして潰されていく。そして行き着く考えが、

（氷室さんは超科学に内通しているか、それとも超科学の一員か……）

それが可能性としては一番高い。携帯を取り出し、氷室さんにコールしようと思ったとき、ボタン！ と扉が乱暴に開けられた。

「七紫……？」

「綾瀬？ なんでこんなところにいるんだ？」

「そりゃこっちのセリフだろう」

「まあいいぜ……。それにしても何でこの事務所はこんなにも綺麗になっちまったんだ？ 引越してもするのか？ それとも荷物を整理したか？」

「どっちも違う……とは言い切れない。でも俺はここがこんなすっからかんになった理由を知らないんだ」

「……ウソじゃないな」

さすが人型ウソ発見器。疑心暗鬼にならなくて、話が早い。

「でもあの氷室さんって言う人は何かウソついてる」

七紫は俺の近くによって来て、パソコンの液晶画面を覗き込んだ。「これ、あたしも見たことあるんだ！ それで、これはなんだって氷室さんに聞いたら、わたしは知らない、って」

いつだかそんな口論を聞いたことがある。ああそうだ、ここに運ばれたときだ。

「でもそれはウソだ。あたしには分かる」

「そりゃすごい。あの人、絶対に本音がわかんないからなあ……。なあ七紫」

「何？」

「氷室さんを捜す。一緒に手伝ってくれないか？　ただ、少し危険なんだ。超科学と何か関わりを持っていう可能性も無きにしもあらずでな……。あまり危険なことには巻き込みたくは無いだ」

言っている自分でも恥ずかしいと思う。矛盾しまくってるし。

「この件には関わるなって言ったのになあ……。しょうがないな、綾瀬は。分かった。手伝うぜ。ただあたしが危ないと思ったら手を引かせてもらう」

「分かった。すまないな、こんなことまでしてもらっちゃって」

「いいっていいって。友達だぜ？」

「ははっ、そうだな」

氷室さんが今どこにいるのかは携帯のGPS機能で分かった（大まかな場所ではあるが）。彼女は『ローラン』の近くにいます。

（また戻るのかよ……）

まあ、無事にあえて事情を聞きだせば良いな、と思いつつ七紫と整然としたこの元事務所の部屋を出た。

事務所が空っぽになっていることに気を取られ、すっかり忘れていたが、外には鎧が俺のパクって来たエアバイク　俺がそう命名した　を捜しているのだ。当然、俺の顔は割れているので気をつけないといけないのだが、

「あれ？」

「どうしたんだ綾瀬？」

「いやあちよつとした事情があつて鎧に追いかけてるのかなーとか思ってたんだけど……全然いなくてビックリしてんだ」

「追っかけられてんのかよ！？」

エアバイクを乗り捨てたところには子どもがたくさんいるだけで

周囲には何の違和感もない。『ローラン』に行くには駅に行つて、バスに乗らなくてはいけない。しかしその間に氷室さんが移動してしまつたら元も子もない。

俺は意を決し、子どもたちの輪に飛び込んで行く。

「ちよつといいかい？ すまないね、これ俺の。七紫、乗つて」

お兄ちゃんずるいー、僕も乗りたいーなど子ども達から聞こえる声を無視する。というかよくこんなものが不審物に見えなかったものだ。警察にもつて行かれてもおかしくはない。

「え……ええ！？ ちよつ、なんだよ、これ！？ 浮いてんのか？」

「とりあえずは……二人乗りできるかはわかんない。ああ、ヘルメットはいらないから。事故らない確率100%だからな」

「そ、そうなのか？ なら、お前の言葉を信用するぜ」

七紫がエアバイクにまたがって、俺の腰に手を回す。

小さい手。非常に柔らかい。女の子の肌の柔らかささつてこんなんなのだと思ひ知らされる。さらに背中には彼女の身体が預けられていて、俺の心臓がばくばくして

（落ち着け、俺。深呼吸だ、深呼吸）

「あ、綾瀬はやくしてくれ……」

子ども達が周りでわーカップルだ、だの騒ぐから……！ マセガキどもめ。

「カップルじゃないぞ」

と七紫が言う。俺はハンドルをまわして、車体を浮かせる。

「おわっ！」

「しっかり捕まってるよ」

「う、うん……」

何気ない返事がちよつと可愛いなと思う瞬間であった。ハンドルを握り締め、高速で飛ばす。うーん、気持ちが良いなあ。風になつたような、幼い頃の夢が叶った感じた。

幼い頃つて言っても何を思い出すわけでもないが。

七紫の顔が俺の背中にうずめられるのが分かる。服越しに彼女の

吐息が……

「ってうわあああああ!？」

浮かれすぎて建物にぶつかりそうになりました。人工知能がぎりぎりで修正してくれたおかげでぶつからずに済んだ。よそ見しながら運転をしてはいけないという事を身をもって確かめさせられたのだった。

「あ、あぶねえだろ！」

「悪い悪い……お、もう少しで着くぞ。高さ落とすから気をつけてな」

さっきまでは操作に必死で気が付かなかったが、普通の市街地を歩いている人間の視線もエアバイクのほうへと注がれている。

ちよつとヒーロー気分になる。

「まあ人ごみの中に着地するのはあんまり良くないし……っよし、『ローラン』の中にするか」

あそこなら避難も終わってるし、置いてあつた位置から離れれば超科学に見つかる可能性も下がる。このエアバイクが置いてあつたから、おそらくあの時よろいは『ローラン』の中にいたと思うのだが、なんとなく不安だ。

なぜだかは分からないが、嫌な予感がする。嫌な予感というものは大抵当たるものだ。今日は運が良い予感がするということに限って、階段から転げ落ちたり、財布を落としたりなどする。嫌な予感がするときは大抵当たる。経験上から分かっているのだ。

こつ、背筋にピリツと来るような感触だ。

そんな予感を頭の隅に寄せつつ、着地した。『ローラン』の中は全くと言っていいほど荒れてなどいなかった。超科学が来るという事は超能力者がいるということなのだろうが、戦闘の爪あとにはここにはない。

「とにかく捜さないと……おい、七紫。降りるぞ……って、七紫?」「怖かった……」

「え?」

「怖かったよおおおおおおお！」

七紫がいきなり俺に飛びついてきた。嬉しいことではあるのだが、嬉しさより戸惑いのほうが大きい状況である。バイクを落ちたら急に七紫が退化化した……？

バイク恐怖症なんてあったか？ それとも純粹に速いのが怖かったのか……。

「ふえっ、うっ、ぐすっ……」

「これは一体どういう……」

「た……」

「た？」

「高いところは苦手なんだあっ！」

「えー？」

高所恐怖症だった。意外である。こんなにも男勝りな彼女の弱点が高いところだったとは……なんとも可愛い。ひいきしたくなる。

通りでエアバイクに乗っているときしゃべらなかつたわけである。俺は彼女の頭を撫でてやり、

「も、もう大丈夫だから……」

「う、うん……」

あのー、限界です。たぎってしまいそうです。俺の感情が暴走しそうなので、いったん彼女を俺の体から引き離す。

「落ち着いたか、七紫……？」

「う、うん……」

彼女も冷静になっっているらしく、現在の状況が理解できつつある。

「わ、悪かったな……急に喚いたりして……」

「い、いや。別に気にしてないぜ……？ 怖いものは誰にでもあるもんだ……」

お互い声がかげづらい状況である。そんな状況下で、足音。否、金属音だ。あの、死の予感を察知させるような、金属音。

とっさに俺は身構える。嫌な予感の原因はこれのようだ。

「七紫……逃げろ」

「まだ大丈夫」

「そんなわけ……」

「お前ら、超能力者か？」

「いちいち言わなくても分かっただろ……？」

足が震えている。やはり未だにあの鎧に対する恐怖はある。何せ、今までは誰かに頼って戦ってきたのだから。しかし、いまはそうにも行かない状況だ。できるだけ七紫を危険な目に遭わせず、この戦鬪を切り抜ける。

「まあ、そうだよ。でも組織の中でこれが決まりごとっていうんじゃないよね。仕方がないよね」

鎧が頭の部分を外す。

「湖南……！」

「あれ、前みたいに驚かないの？ つまんないなー。ああいうリアクションを期待してるから、こうやってマスクを取ったっていうのにさ」

「黙れ！ そもそもお前はなんでそんなところにいるんだよ」

「理由は……ああ。これ言くとネタバレじゃん……。いえませーん。あはははっ、これで納得？」

「するわけねえよ……！」

「でもさー綾瀬ー。痛かったんだよ、あたしもさ。あんたにプラスマガン撃ち込まれたときはマジで死ぬかと思ったもん。やめなさいよね、命令だから」

いつもと変わらぬ飄々とした態度。しかし、以前対峙したときと同じだ。殺すか、殺される側か。ただそれだけの違い。

本当にそのままだ。

「殺すか殺されるなら俺は……お前を、殺さない……」

それでも湖南とはバイト仲間だし、いくつか借りもある。そう、俺が言った刹那、彼女は激昂し、

「甘いんだ！ そういうのがいちいち！ あたしは超能力者が憎い！ 恨めしい！ 妬ましい！ 殺したい！ この世から排除したい

！」

そうだった。こいつも『血のクリスマス』で恐怖を植え付けられた人間。

「殺したいから殺す！ それじゃ、だめ！？ じゃあ、あたしはどうすればいいんだ！？」

「自分の信じたことをやり通せばいい！」

このままじゃ、彼女に勝てない。鎧の出力限界は、あの設計書どおりなら分かる。だがどうやってそれに対抗するのか。人よりほんの少しだけ腕力が強くてもあのバケモノには勝てない。

一秒で考え、脳裏に対抗策がよぎる。しかし、これは奥の手だ。使って成功するという保証もない。俺の能力は物質を変化させること。そう、物質。体細胞だ。

身体の内側のほとんど 内臓だ を構成しているのは細かな体細胞だ。筋肉もまた然り。その体細胞を変化させられれば、力を増大させることが出来る。人の限界を超えることが出来る。それくらい力が出れば、鎧の出力とほぼ同等くらいにはなるはずだ。

しかし、だ。いくらそんな有効策があろうとも失敗すれば、体細胞が崩れ、俺の内臓は原型を保っていらなくなる。体細胞を変化させるというのは荒業どころで済む話ではないのだ。

つまり、成功すれば勝利の可能性が残り、失敗すれば 死への直行ルートだ。俺には特に医学の知識があるわけでもない。前に千紀の家でちんぷんかんぷんな医学書を読んだくらいだ。そんな人間に体細胞の形など分かるはずもない。

変化前と変化後の形を捉えてやらないと、失敗する確率のほうが大きい。前にも一回形が分からぬまま物を変化させたらとんでもない形になったときもあったし、すっかり形になったときもあった。賭けをするかしないか 人生の分かれ目だな。笑えない話だ。

「なら、あたしはお前たちを殺す……！」

「くっ……」

もう、使っしか方法はないようだ。俺が精神を集中し始めた、そ

の時だった。

「あんた、さつきからおかしいぜ」

「秋月……」

「あんたとは面識とか、付き合いがないから分かんないけど……あんたは間違ってる」

「お前に話す口など持たないぞ、あたしはあああああああああああ
あああつ！」

「ちよつ……七紫！」

「大丈夫だ」

あろうことが、湖南は俺ではなく七紫に突っ込んでいった。前回と装備は変わっていないように見える。肘の剣、プラズマガンはどこかに隠しているのだろう。

七紫はそれに銃とナイフだけで立ち向かって行く。おそらく、どちらとも偽ものだ。一瞬にして、それを変化させる。

「うおっ！」

「ぐっ……！」

振り下ろされる剣。それを受け止めるナイフ。二つが瞬時に激突し、弾き合い、そしてまた激突する。目で追うのがやっとなスピードで二人は打ち合っている。

七紫はやはり、身体を上手く使い、ダメージを受け流している。しかし、それがいつまでも持つのか？

実際に打ち合った俺はものの数秒でギブアップだ。七紫もいくら身のこなしが良いとはいえ、生身の人間だ。どこかで限界が来てしまう。助太刀に入りたいところだが、

（でも……どうする？）

身のこなし一つ分かっていない俺が間に入ったところで七紫の足手まといになるだけだ。ならば、彼女の足手まといにならないような戦い方……。

「ぐうっ……！」

「とつた！」

七紫がほんの数センチバランスを崩したところを湖南は見逃さず、剣を振り下ろす。

「七紫！ 伏せろ！」

「っ！？」

彼女は俺の言葉に従ってくれたようで、とっさに身をかがめた。その刹那、俺が伸ばしたコンクリの棒がダンッ！ という音を立てて湖南に激突し、よろける。俺はそれを二度、三度とどんどん湖南に当てていく。

七紫の邪魔にならないような戦い方。援護射撃のようなことをすればいい。さらに絶好のタイミングで彼女がバランスを崩してくれたおかげで、俺が攻撃を湖南に当てやすくなったという偶然もありでの成果だ。

形勢逆転だ。七紫が体勢を取り戻し、湖南に斬りかかる。

「せやつ！」

「っ！？」

七紫が狙ったのはむき出しになっている顔だった。確かに、鎧に守られていないところなら攻撃が通るはずだ。

しかし、俺にはできなさそうだった。傷つけるのが怖いから。

なんともバカげた話だ。関係のない人間なら殺すが、自分の友人になると殺せない。曖昧な、甘い立ち位置。ぬるい覚悟では易々と殺されてしまう。おそらく湖南には自分と同じ境遇の人間だから、という理由も無意識的に付加されているのだ。

俺は、非常にみつともない男だ。俺はどうすれば。

「いい加減にしなさいよっ！」

湖南が叫び、プラズマガンを取り出し、構える。湖南がトリガーに手をかけた、その瞬間。

「おりゃあああああああああああ！」

俺は湖南に向かってエアバイクの出せる最大加速速度で突っ込んでいった。彼女がこちらに振り向き、息を飲んだのが分かる。そのまま俺は湖南を轢いて走る。

車体のどこかに引っかかったようで、彼女を20メートルほど引きずっていった。エアバイクのナビゲートモニターからエラー表示が出て、エアバイクが止まった。流石にこの衝撃までは耐えられなかったのか、鎧のところに傷がついている。

「これで……どうだ……」

「こんなもので……！」

「俺はご存知の通り超能力者だ……。このままお前を殺すことだって出来る。俺はお前の身体を、内側から弾けるんだ」

「ちっ……」

彼女は齒噛みし、抵抗する力を弱めた。

「俺はもうこんなのごめんなんだよ。『血のクリスマス』みたいに友達とか、なくしたくないんだ」

「お前は殺しをやっていたじゃない。そんなお前が言える立場なの？ あたしみたいな友達はいいけど他人は殺せるんだ？」

「……そうだよ！ 俺は独善的な人間だ！ お前にこんなこと言う資格なんてないんだ！」

「笑えるわね……」

「笑いたきゃいくらでも笑えよ！ バカにしたっていい！」

「……」

湖南は俺を真っ直ぐに見つめている。俺の真意を探るように。

「俺はお前と同じ境遇なんだよ。お互いあの凄惨な事件の被害者なんだ」

「そんなの知ってる」

「お前は間違ってるんだよ。超能力者を全部殺せばあの記憶が消えるとも思ってたのかよ……」

「ちっ……」

どうやら俺の勘は当たっていたらしい。

「俺は人を殺したよ。……生きていくために」

「言い訳じゃん」

彼女は鼻で笑った。

「金がないと生きていけない。俺には家族はいないんだ。後見人もまともに生活するのがやつとな家計だった」

「だから殺すの？ そしたらお前だって間違ってるわ」

「俺が殺した人間は全員まともなことはやってない人間だ。だからって殺して言い訳じゃない。でもな……」

俺は湖南の事など気にせず、続けた。まるで今まで溜まっていたものが吐き出されていくような感覚にとらわれる。

「でも、お前は一体何を……何の目的のために……殺してきたんだ？」

「それは自分のためよ。自分の悪い思い出を消し去るため」

「なら、俺とお前は一個しか違わない。殺している理由だけだ。お互いに独善者なんだ。お前は悪い思い出を消し去るために殺しているんだ。でも、俺はその記憶を引きずり続けながら生きてみせる。殺しながらでも」

「無理に決まってるでしょ……！ 父親を目の前で焼かれて、母親の脳をぶちまけて殺された記憶を一生引きずるの！？ 心が持たない！」

「だから消し去ろうとするのか」

俺の問いに彼女は沈黙で返答した。俺は言ったとおり真っ直ぐに生きてきた人間じゃない。一回は殺しという仕事をやり、落ちぶれて、這い上がりつつある人間だ。

「それは逃げなんだ。逃げるなよ」

「ちっ……！ 無理なのよ……」

「言葉で言っただけ分らないなら……！」

俺はエアバイクの部品をバットのように変化させ、思いっきり振りかぶる。そして渾身の力それを彼女の顔面めがけてで振り下ろす！

（分かせてやる……！ バカ野郎！）

「おりゃあああああああああああ！」

ギィンッ！ と金属と金属が弾けあう音が炸裂した。叩いたと

ころは正確には、湖南の首の部分だ。そこを狙って気絶させた。今になって気づいたが、俺、ものすごい息が荒げていたんだ。普段言わないようなことを言っただけかもしれない。

「七紫」

「ふえっ!？」

俺の始めて見せた剣幕に驚いているのだろうか。彼女の拳動が若干怪しい。

「こいつを頼む。まあ、目を覚ますのは時間かかるだろうけど、病院に運んでてくれ。轢いちゃったしな」

「わ、分かった。お前はこれあとどうするつもりなんだ？」

「氷室さんを引き続き捜す。こんなところにいちゃ危ないだろうか」

「そ、そうか」

あの時、エアバイクは三つあったから湖南を覗くとあと最低二人はいるのか。厳しいな。エアバイクも壊してしまっただろうベキかな。

俺はこっそりと湖南の落としたプラズマガンを拾い上げた。

「そ、その……綾瀬」

「ん？」

「さっきのお前、ちょっとかつこよかった」

頬を赤らめながら言われた。おお、嬉しい。心臓がドキッと高く鼓動した。

「じゃ、早く戻って来いよ！ 心配するんだかな！」

「おう」

エアバイクはもう動かなくなったから、ここからは徒歩で移動だ。人がいないから余計に広く感じる。しかし、氷室さんは避難している人間の中にいるかもしれない、と思いつつ、携帯を取り出す。

（あの衝突のときに良く壊れなかったな、この携帯……さすが文明の利器だ）

氷室さんの電話番号を呼び出し、通話ボタンをダメもとで押した。

呼び出しコール音は一分ほど続いたが、出なかった。

「……………」

携帯はコールする。ならGPSは反応するはずだ、と判断し、GPSの画面を見るとこの周辺に在るとの表示。まったく手がかりがつかめない。中で捜すと鎧が見つかる可能性があるから、危険だし、やっぱり外に在るのかもしれない。

というか、なんでここまで来たんだっけ……氷室さんを探するためだけど、どうして中のほうでチンタラしてんだ、俺。

湖南も見つけられたし、これでお悩みはあと一つ……いや、二つか。

氷室さんと、沙希だ。彼女の安否が気になる。ついでに彼女の電話番号も呼び出し、コールする。中々、電話に出ず、俺がきろうと思つたとき、

『あ、綾瀬さんですかっ！？』

「ああ、そうだ。お前今どこに在る？」

『……答えられません』

あんなことがさつきあつただ。電話に出てくれただけでも僥倖だ。

「お前は、無事なんだな？」

『とりあえずは、ですけど……』

若干だが息が乱れて在る。走つたのだろうか。

『綾瀬さんのほうはどちらに在るんですか？ もう避難しましたか？』

この『ローラン』の避難を知つて在るという事は彼女はまだこの中に在る。

「いや。俺はまだ『ローラン』の中に在る。というか戻つてきた」
『逃げてくださいつ！ 今すぐに！ 分かつて在るでしょうっ！？』

このシヨッピングモールの中には鎧が在るんですよっ！？』

「お前は……鎧を倒すのか」

『……はい。それが、務めです』

「何でそんな危険なことしなくちゃなんないんだ……？ 他の連中に任せれば良いだろ」

『そもいきません。わたしは、超能力者の集団の長の娘なのですから、そこは皆をまとめていかないといけません』

いつもとは別人のようだった。いつもなら、バカみたいに明るくて、とんちんかんな発言しかしないのに、今は凜々しさまで感じさせるような話し方だ。人の上に立っている人間 氷室さんのような人だ の話し方。

それが今の彼女。前とは別人。それを頭の中で理解する。

「なら、俺はそれを手伝おう。お前には怪我を治してもらった借りがあるからな。それに俺超能力者だし」

『だ、ダメですっ！ 借りなんてどうでもいいんです！ この話はあなたには関係ありませんっ！』

「借りは返さなきゃ済まない性質なんだよ。だから手伝う」

『借りなんてどうでもいいでしょうっ！？ 来たら死にますっ、一人なんでしょうっ！？』

「あーうるさい。少しは静かにしろ。良いか、今から行く。じゃあな」

『え、ちよつ、綾瀬さ 』

通話終了ボタンを押した。なんか天竺のときといい、今といい、会話を一方的に切ることが多い一日だ。今度からは気をつけよう。

まあ、行くアテもないわけなのだが、今は行動を起こすしかあるまい。七紫に、『氷室さんを見つけたら連絡をくれ』とメールをする。おそらく、彼女はどこかで湖南の鎧を脱がせて、湖南を運んでいるのだろう。ならば、その時に氷室さんの姿がちょっとでも見えれば外にいるということになる。

俺は人のいないローランをうろつく。おそらく、沙希がいるならば、あのどこかも分からなかった真っ暗な空間。彼女に行くと行ってしまったのだから行かざるを得ない。

「さてと……どこだ？」

確か、ここからずっと走っていったところにあつたはずだ。とりあえず真っ直ぐ行こう。あの時ももう少し冷静だったら良かったのになあ、と自分の状況判断能力の無さを恥らいつつも前へと進む。

これと言って不審な点は今のところ見つからない。そう思っていると、

（あれ……か？）

店の横にある物資搬入用の扉らしきものが不自然に開いていた。

全開で開けてあるから不審に見える。俺はそこへ近づき、その中を恐る恐る覗く。

「おえっ……」

血の匂い。腐臭だ。何度も何度も嗅いだことのある、匂い。この空間から匂いが出ていないことが不思議に思うくらいな強烈な腐臭。その原因を確かめるべく、俺はその真っ暗な空間を携帯の明かりで灯した。

「ミンチじゃねえか……」

人肉ミンチになっていた死体がまず目に入った。俺はあまりの凄惨さに耐え切れなくなつて、胃の中のを床に撒き散らした。殺しをやっているこんな凄惨な死体をあの事件以来、見たことが無い。

コツコツ、と自分の靴の音が誰もいない空間の中に響く。動いて息をして、立つて、生きている人間がこの空間の中には俺だけなのかもしれない。

しかし、なら、これをやった鎧がいるはずだ。全神経を張り詰め、ブルズマガンを構えながら歩く。殺しをするときのようには死を、意識する。

「はあっ、はあっ……！」

頭が無い死体、全ての関節が強引に曲がらないほうへと曲げられている死体、身体が右半分だけの死体。一体いくつあるか分からないようになってきた。この凄惨な現場、冬の凍てつく冷氣。『血のクリスマス』そっくりだ。

そう考えるとさらに、吐き気が増した。おそらく、この惨状を作った人間は俺のことを嘲っている。気が、狂ってしまいそう、だ。いったいどれくらい歩いたのか。気付いたら、あの大きな空間にたどり着いていた。天井が壊されて、この空間だけは明るい。

「フーッ……フーッ……」

少し深呼吸をして呼吸を整えた。周りを見渡すと、天井から降ってきたであろう瓦礫しかない空間だ。しかし、そんな空間でガラッ、と石ころが落ちる音を聞いた。俺がやったのではない。

「誰だ！」

俺が叫ぶと、

「あ、綾瀬さん……」

「なんだ、沙希か。びっくりさせるなよ。とりあえず来たぞ」

「どうして……どうしてですか！ どうしてこんなところに来たんですか！？」

「だから言つたら、借りを返しに来たんだ。お前が『血のクリスマス』の首謀者の娘だろうが、なんだろうが関係はねえんだよ」

「死ぬのはわたしだけで良かった……あなたは死なないで良かったんですよ……！ なんで来たんですか……」

涙をぼろぼろと流しながら、俺の胸にすがってきた。彼女は華奢な身体だ。今の俺にはとても、儚い存在にも見えた。

「おいおい……なんだよ、困るだろ……」

「だから……」

「え？」

後ろでバチバチ、という音がした。そして沙希は俺に向かって恋人同士がするように囁いた。

「伏せてください……」

俺は、彼女の身体を抱えながら伏せた。直後、高圧電流の塊がいさつきまで頭があったところを通り過ぎた。

「ッ！？」

「なんだ、外してしまったのか。次は当てよう」

声のしたほうへと振り向く。振り向いた先にはプラズマガンを持った鎧がいた。しかし、その鎧というのは今まで見てきたような野暮ったいものではなく、人より一回り大きいサイズで収まっている。頭の部分もドラム缶ではなく、バイクのヘルメットに部品をいくつが加えたような形状をしている。

その鎧からは不気味な動作音がしており、この空間の中にそれがよく響く。

「なんだい、そんな驚くこと無いだろう。科学というものは日々進歩しているんだ。これが変わったとしても不思議なことではないんだよ」

機械から出力される音声ではない。女性の声だ。

「それとその少女はエサだよ、エサ。君を釣るためのね」

「俺を……」

「そう、君だつて超能力者なんだから当たり前じゃないか、綾瀬恭耶くん？ それに神原沙希くん、よく彼をここまで来させたものだ。感謝してるよ」

「わたしは……死ぬのはわたしだけで……」

沙希が嗚咽交じりに言った。

「おい、聞きたいことがあるんだが」

「なんだい？ 死にゆく時間を延ばしても精神的に苦しいだけだよ？ まあ問いには答えてあげようじゃないか」

「入り口にいたやつらをやったのはお前か？」

「ああ、そうだよ。大丈夫。関係のない人間も含まれているかもしれないけど、ほとんど……もしくは全部が超能力者だ。君もそのうちああなるよ」

「そりゃ怖いな」

目の前の鎧と対峙して分かったことがあった。俺は勝てない。ものの十秒もかからずにあっさりと負ける。

入り口の通路にいた人間だけでも最低五人はいたはずだ。一対五でやつても勝てなかった、ということも考えられる。集団でかつ

て勝てないのなら、一対一の場合の結果は火を見るよりも明らかだ。とりあえずは策を練る時間を稼ぐしかない。せめてもの悪あがきというやつだ。

「沙希を……殺すのか？」

「当然。超能力者だからね。しかもその集団のリーダーだった娘だし」

「今まで……何人の超能力者を殺した？ 超科学っていう組織は」「世界中で百人。君たち二人で百二人目だ。でも、能力者の総人口は知らない。超能力者が生まれれば殺すだけ。これは……戦争なのだから」

超科学の発足からまだ一週間とちょっとだ。それで百人は中々に多い。

「戦争だからって……」

俺は『血のクリスマス』が起こる前までは自分が超能力者だなんて気が付かなかった。だから知らず知らずのうちに超能力者になっている人間もいるかもしれない。

何も分らずに殺された、ということだ。

「無意識のうちに能力を使っている人間もいるからねえ……。その人のところまで行って病気の一種だ、と騙して病院に収容した瞬間に殺した件もあったけど」

「その人は関係ないだろ……」

「超能力者だから。といってもまだ能力者として覚醒していなかったけど」

「関係のない人まで巻き込んで……！ もう良いだろ！？ もう『血のクリスマス』は終わってるんだ！」

「終わってない」

その女の声がワントーン低くなり、鋭いものへと変化した。

「終わってないよ、あの事件は。能力者が殺した人間は五千人。なら目には目を齒には齒を。あと四千九百人殺す。それでチャラになる」

「意味分かんねえ……。ラリってんのか？」

「そうだね、狂っているのかもしれない。なら狂うまで狂う。中途半端は嫌いだから……。さあ、そろそろ終わりだ。質問コーナーはここまでだ」

これ以上会話を引き伸ばすのは無理そうだ。あの鎧から出る駆動音が次第に大きくなっている、

何もしないでそのまま死ぬか。それとも足掻いて死んでいくか。

選択肢は二つに一つ。今度こそは逃げ道が無い。

「神原くんともども死んでくれ。この世界をキレイにするためにも」
鎧が踏み込む。

「ふうっ……沙希、下がってろ」

「え？」

俺は死ぬかもしれないけどな。彼女は言うとおりにしてくれたように、俺のそばから離れていった。

（奇跡を起こしてやろうじゃないか……）

目を瞑って、自分の身体を理解する。全身を分解して、部品を大きくし、そして、またもとの型に合わせてつぎはぎする。それを無限に繰り返す。目標とする明確な型などはない。ただ、現在を変えるだけ。それだけだ。

内臓がひっくり返ったような感覚に陥り、吐きそうになる。やがてそれは身体を洗濯機に入れたようにぐるぐると回っていくような感覚へと変化する。ここがどこだかも分からない。

だが、それは悪魔でも錯覚に過ぎない。それを自覚し、自分のいた場所を意識した。

目を開ける。俺は立っている。生きていた。この身体を変化させるまでの時間は約数秒と言った所か。予想よりも早い。

自分の腕を見ると、数秒前より一回り大きくなっている。俺が自分の身体の変化を見ているうちに、鎧が飛んだ。

「はあっ！」

ウソみたいな光景だった。跳躍のスピードが湖南の着ていた鎧と

は段違いなのだ。そしてその威力がはかりしれないとび蹴りが俺を捕らえる　はずだった。

「うわっ……！？」

生存本能が勝手に身体を動かし、その蹴りを避けた。普通の手で避けられないはずだ。自分もついていけないような速度を出せるようにまで俺の身体は変わっているようだ。

これなら、もしかしたら、この窮地を切り抜けられるかもしれない。倒す必要は無い。逃げられればそれで良い。動きを止めれば良い。今なら沙希を抱えながらも逃げ切られる自信がある。

「まぐれか……それとも狙ったか」

「まぐれだよ」

「へえ……」

ダンッ！　という音を鳴らしながら鎧が石ころを砲弾のような速度で蹴り出した。動体視力も強化されているらしく、その石ころの軌道が普通に見える。

それを身をひねってかわしたところを鎧がすかさず追撃する。パンチ技最速のジャブ。それをギリギリでかわす。それが生み出した風が俺の鼻を撫でる。

「らあっ！」

まずは頭の部分を吹き飛ばす。そこは湖南のときもやったように胴体の部分よりもろくできているはずだ。

そこを狙う。しかしまだ俺の身体の変化に頭がついていけておらず、目測とは違う方向にパンチがいった。

「ちっ……！」

一度大きく跳躍し、距離をとる。今、俺は自分の身体に振り回されている。これはもう慣れるしかない。あとは武器を……

「はあっ！」

（またかよっ……！）

複数の石ころを砲弾がわりに射出してくる。全てを避けることは難しい。二つの石を避けた後、コンクリを変化させ棒にし、抜刀の

要領で 抜刀術なんてやったこともないが、見よう見まねで石を叩き返す。

コンクリの棒に当たった瞬間、石ころが砕けた。まだ棒のほうは砕けず、引き続いて、石を迎撃する。しかし、二つ目の石を迎撃すると同時に棒が砕けた。

「うおっ！」

鎧に向かって走る。一瞬の攻防。身体が強化されたとはいえ、少しでも気を抜いたらアウトだ。

（しまった……プラズマガンあそこに落とした……）

無意識のうちにプラズマガンから手を離してしまったらしく俺が一番最初に立っていた位置にプラズマガンが落ちていることを、視界の端で捉えた。

しかしそんな物を取りに行く暇はない。走った勢いで重さを前足に乗せつつ、鎧のボディに向かってジャブを放つ。それはあっさりとかわされた。

だが、それでいいのだ。これはフェイクに過ぎない。本命は顔面への蹴り。

（身体はあんまり柔らかくないけどなっ……！）

重さは無い。しかしスピードならあった。見事俺の放った蹴りが、鎧の顔面へ直撃し、頭の部分が吹き飛んだ。

「やっぱりね……」

「まあ、あれだけヒントを出せば分かるのが普通だがね」

氷室佳苗が目の前に立っていた。

薄々察知はしていたのだ。しかし、頭がそれを肯定しなかった。彼女は俺を拾ってくれた恩人なのだ。そんな人を易々と敵にしたいくなかった。

今度はお互いに距離をとる。

「なんだか君は変わったね。前より素直になったといつかなんといつか……成長しているよ」

「他人から見るとそうなんですかね……確かに俺は今、変わってま

すよ。人を逃がすために働いたことなんて無かったし」

「あの避難誘導を促す措置は優秀だった。さすが私の部下だ」

「ほめ言葉には聞こえないですね」

敵は明確になった。殺す対象がはっきりとしたのだ。なら、それを遂行するだけ。これも氷室さんから教えてもらったことだ。

「なんであんたはそっち側にいるんですか……」

「んー、知ってるはずだよ。千紀くんが情報を集めて、君に伝達しただろう？ その情報を流したのは私だから。あの情報、不自然だとは思わなかったのかい？」

「……………」

そうだ、メディアがつかめなかった情報をなぜ個人のつながりで知ることが出来たのか。彼女の言うとおり不自然だったのだ。

情報に揺るがされてそれに気付くことができなかったことを今になつて悔いた。

「まあまだまだ子どもだね」

「大人なら……大人ならなんでもやっていいっていうんですか！」

「肯定も否定もしない。ただ、君個人、私個人はそんなものに抵抗する力は持っていないんだ。抵抗できないんだ。あの事件で君もそう思っただろう？」

飄々とした様子で彼女は続ける。

「私もあの事件で家族を殺された。自分以外を除いてだが。しかもそれを相手は故意にやったんだ。しかも私の家族を殺したのは神原茂だ。その娘を殺しても当然だ。そして、復讐する。大きな力も手に入れたんだ。しかし君はどうだ？」

「……………」

齒噛みする。自分は無力なのだ。何も出来ない。小さな存在。世界が一つの物質だとするならば俺個人など分子レベル以下に過ぎない。分子以下が一つ消失したとて、何も変化は起きないのだ。

しかし、小さな存在にもプライドはある。

「……抵抗してみせる。小さな反抗とでも思えばいい」

んだ死んだ死んだ死んだ死んだ。

頭の中がどす黒い感情で埋め尽くされ、全身の毛が逆立つのが分かる。この瞬間、氷室佳苗に対する殺意が明確になった。

「よくも……やったなあっ！ 殺してやるッ！」

「あははははっ、それでいいんだ！」

残った血の三分の一を使ってでも目の前の敵を殺す。しかしまだそれは奥の手だ。

「これで私もマシンの本気が出せるな！」

感情のリミッターが外れた。一秒ともかからずに氷室さんの懐へと潜り込み、アッパーカットを顎へと直撃させた。彼女の身体はまるで風船のように空中へと軽く舞い上がる。追撃すべく、ジャンプをし、かかと落としを決める。

「らあっ！」

（ダメだ、重さが無い……！ 殺せない）

あの戦車の砲弾でやっとな破れる鎧をどうすれば破壊できる？ あの鎧は衝撃をどの程度まで吸収するのか。情報不足すぎだ。

とりあえずダメージを重ねていけば、と戦略を立て、着地をする寸前に、頬の横を何かが掠めた。

「ッ！？」

前を向くと氷室さんが手を突き出していた。その手は掌の部分に大きな穴があり、そこから蒸気が出ているのが分かった。

おそらく、当たっていたら死んでいた攻撃だ。

「ちっ……」

「次は外さないよ」

火線か、それともプラズマガンの携帯形か。いずれにしろ、当たれば死ぬ。俺が近距離戦に持ちこむべく、駆け出すその瞬間、

「ふっ！」

閃光が爆ぜる。氷室さんが発射したものは火線だった。俺がその光を目で捉えたあと、一瞬遅れて後ろのコンクリが、溶けた。

俺の呼吸が一瞬止まった。

「ははっ……」

しかし、威力は絶大でも精度は悪いようだ。俺は位置をずらしてないから、向こうのミスだ。命拾いとはまさにこのことだと心底思う。

だが、次の球が来たとして、避けようにも避けられない。目で終えないほどの速度で向かってきているのだ。言うならば光速。

（こうなったら……！）

相手が打つ前に駆け出す。死んだっていい、目の前の敵を殺せるならこんな命を捧げたっていい。ただただ、純粹に殺したかった。

もうだんだん何も分からなくなってきたのだ。

「うおおおおおおおおおおッ！」

懐に入る。それと同時に閃光が爆ぜる。

右手で彼女の顔面を殴ると同時に、左手がなくなっていた。

「があああああああああああああああああああああああああああああああッ!?」

いや、左手が溶けたんだ。痛い痛い。想像を絶するほどに痛い。

筋肉の線が見え、皮膚はただれ、肉はどろどろになり、骨は液と化した。

氷室さんもしりもちをついたが、俺は痛みあまりに倒れる。目の前には都合よく、プラズマガンがある。これを使えば、鎧といえど、殺すことは出来ないが 湖南が死んでいなかったからだ
気絶までならいけるはずだ。

だが、掴めない。能力を無理に使ったせいで身体がびくとも動かないのだ。目の焦点も合わなくなってきた。

「これで決着だ……」

彼女がすこし憔悴を織り交ぜた声で言った。

（すまないな、沙希…… 仇討ちできなかった……）

最後の悪あがき。目の前のプラズマガンに手を伸ばす。届いた。
「はあッ！」

氷室さんが俺の頭に向かって火線を撃つと同時に、俺はその穴に

向かってプラズマガンのトリガーを引いた。バゴンッ！ という爆発音がした。

幸い俺のプラズマガンは爆発しなかった。俺のほうはどうやら撃つのが早かったようだ。氷室さんのほうは手が爆発し、痛みをこらえている。しばらくは動けないはずだ。

「がはっ……」

手から力が抜ける。何も感じない。寒くなってきた。死ぬのだ。

人をたくさん殺したんだ、死んで当然だ。

でも温かいものがほしい。コーヒーとか。

「大丈夫ですか？」

温かいものが手に載せられた。

「本来、わたしがそっち側だったんですよ？ 分かってますか？」

「……ああ」

沙希、生きていたのか。どうやって回避したんだろうか。氷室さんが手を抜くとも思えないし。

「わたしはこうして生きています。だから綾瀬さんも生き延びてくださいね」

「……ああ」

自分の発している言葉が声になっているかどうかさえも分からない。

「今から治しますから……」

身体が温かくなっていく。傷がふさがってゆく。だが、時間を巻き戻しても、意識のゆらぎは止まらない。

（まだあの人は死んでない……）

殺さなきゃ殺されるはずだ。せめて、プラズマガンで昏倒させなければ、と思ったところで俺の意識は断絶した。そんなまどろみにも似た意識の中で俺は沙希がプラズマガンを持ったところを垣間見た。

終章

「ん……」

目が覚めた。俺は病院のベッドで寝ているようだった。千紀の病院ではない、もっと大きな病院だ。ナースがせわしなく働いているのが入り口からみえる。

あれからどのくらい経ったのだろう。というかよくもまあ病院のほうも正月だというのに受け入れてくれたものだ。

古い液晶テレビを眺めているとニュースが流れていた。どうやら超科学の話のようだ。

「そついや戦ったんだっけ……」

寝起きで頭が働いていない。

俺の身体は元に戻ったが、そこまでの時間は戻らなかったようで、左手の感覚がまだ無い。あの時、彼女自身も能力が制御できないくらいに疲弊していたのだろう。

なんだか戦う気力も今は起きないのだ。それにしてもみんなどこに行ったのだろう。天笠にはこっぴどくしかられそうだ。

「やつと起きたの？」

「……あ」

向かい側のベッドに湖南がいた。

「……………」

男女一緒の部屋にするってどういうことなんですかこの病院の先生出て来いよ。

「何よ、その珍しいものを見る目は」

「いや……なんでもない……。とうかなぜこの病院に？」

「忘れたのかしら、このゴミ。あんたあたしのことあれで轢いたじゃない！ 忘れないわよ！ 衝撃吸収し切れなかったんだから！」

「ああ……」

「ああじゃないわよ！ クズ！ ゴミ！ 害虫！ 変態！ モヤシ

！ 死ねっ！」

「罵倒しすぎだって何回言えば分かるんだよ」

「まだ抑えてるほうよ」

「さいですか……」

彼女の表情が少し柔らかくなっている。具体的に言うと、以前のような刺々しさが抜けている。気のせいかもしれない。

俺が彼女の心の変化を知ることができない。ただ、そうあってほしいという願いももっての見解だ。

「そうだ、あたし退院したらもつとマシなバイトする」

「え？ 事務所やめるってこと？」

「まあね。どうせあんたが所長をやっつけちゃったんでしょ。なら、すること無くなるし……普通に生きる」

「そうか」

俺は淡白な返事だけした。

「そ、そうだ。あの……えっと……」

「らしくないな。言いたいことあるならはっきり言ったらどうだ？」

「その……ありがとう」

「へ？」

湖南が……あの超自己中な湖南が。感謝を述べるなど、モーゼが海を裂くくらいの奇跡だ。

「もう言わない」

それっきりぷいとそっぽを向いてしまった。

しばらく窓の外を眺めていた。定期健診の時間で医者がかかるはずなのだが、担当医が来ない。どうしたのだろうとベッドの上でぼうつとしていると、

「やあ、綾瀬くん」

千紀が血走った目でこちらにきていた。実にホラーである。

「千紀先生……どうしてここに……？」

「僕だつて医者なんですよ？ 患者を診るためにはどこへでも飛んで見せますよ？ それで、君はあれほどこかわるなと言つた事象に関わつてその怪我を負つたんですよね……」

「あはははは……」

「笑えば済むんじゃないよ？ 今回ばかりは……そうだ、リハビリのメニューを厳しくするようにと担当医に相談してみましようか」

「やめてくれ！」

「しかしですね……」

彼が真面目な表情に戻る。

「あまり怪我のほうは芳しくない。その左手、動かないでしょ？」

「……ああ」

「芳しくないとはいえ、リハビリをつめばまたもと通りになるんだ。がんばりましょう」

「動かない原因つてなんだ？」

「不明なんだ。不自然だとは思うけど、原因は分からないんだ」

「そうか……分かった。しばらくは入院つてことになるのか？」

「うん、経過観察ということらしい」

「へえ……」

俺がりハビリの想像をしていると、

「綾瀬ー、起きたつてエリコから聞いたぞー」

「おう、七紫」

「あ、秋月！ 来るなんて言つてなかったじゃない！」

湖南がものすごい形相で なぜだか顔が赤いが 突っ込んできた。七紫は先に湖南のほうへ行つて話を始めた。ガールズトークというヤツだろう。

「じゃ、綾瀬くん、僕はこれで失礼するよ。あとは担当医に任せただけ。たまに遊びに来るね」

「分かった。じゃあな、仕事しろよー」

彼は手を振りながら帰つていった。医者はやっぱり大変なのだ、と改めて認識させられた。

「綾瀬、食べ物いるか？ 何もって行っていていいか分かんなかったからとりあえず果物もってきた」

「ありがと。でもあそこの定食屋の料理が久々に食いたいな……」

「今度持つてきてやるう」

「危ないからやめろ」

その前にこの娘なら宅配途中に食べてしまいそうな気さえした。

「エリコは大丈夫か？」

「へ、平気よつ。気にしないでよつ」

「……あ、そうか」

自分の本質を知っている友達は初めてなのだ（どうやら俺は友人として認識されていない扱いだ）。だから恥ずかしいのだろう。七紫は人懐っこいし。

「恭耶さんっ」

「うおっ！？」

天笠が俺のベッドにダイブしてきた。

「まったく、心配したんですから！ 搜してみればみんな倒れてたんですよ！？」

「搜した？ お前、俺が電話したあと『ローラン』の中に入ったのか？」

「ええ」

「はぁ……」

深いため息をつく。天笠、よく見れば命の恩人じゃないか。第一発見者が彼女という事だ。さつさと運ばれていなかったら、氷室さんに殺されていたかもしれない。

とにかく礼を言わねばならない。

「サンキュー天笠。お前のおかげで助かったよ」

「えっ、あつ、はい……」

それにしてもこの空間、賑やかである。大部屋の部屋で俺と湖南しかないのが幸いした。こんだけ病院の中でうるさきやイライラもするだろう。

湖南が起きていたときも賑やかだったのだろうか。俺は今数えると、二、三日は眠っていた。湖南から先ほど聞いたのだが氷室さんはこの病院には収容されていないらしい。どこにいるのだろうか。

その後は異常に不味い病院食と七紫が持ってきた果物を食べながら、みんなと談笑をした。楽しい時間は過ぎるのが早いというが本当だったようで、気付いたときにはもう陽が落ち始めていた。

「じゃあなー、お大事にしろよ」

「恭耶さん、また明日」

「来るんかい……おう、じゃあな。気をつけて帰れよ」

はぁ、と一息つく。携帯ゲームもマンガも全部家にあるし、とつてくる人などいないから絶賛放心中である。今の俺はおそらくとてつもないアホ面をしているだろう。

湖南が昼寝をしているのが幸いだ。彼女にこんな表情を見せたら爆笑必死だ。

「ありや、アホですね綾瀬さん」

「沙希！ お前何してた！？ 心配したぞ」

心配したなんて言葉を使ったのは久しぶりだ。なんだろう、保護欲からくる感情か。

「あはは、ごめんなさいっ。ちょっと道に迷って」

「お前はなんであの時生きてたんだ？ プラズマガンって普通に喰らったら即死だろ」

「入ってきた電気を元に戻したんですよ。でもあまりに量が多かったので気絶してしまいましたっが」

それはおそらく数秒でもずれていたら死の道を歩いているような業だ。俺の身体の変化同様、奇跡が起こったともいえよう。

「また借り作っちゃったな……あーあ。ちくしょう」

「じゃあ、一つ目の借りを返す方法を教えましょっつ」

「なんだよ？」

「綾瀬さんをお名前呼びます。拒否不能ですっ、恭耶さんっ」

「っ……」

天笠には名前で呼ばれているが、それとは何か違う感覚。どこかむずがゆくなる。

「わたしは別の病院にいるのでいつでも遊びに来てくださいねっ。といつてもすぐ退院できそうですが」

「ああ」

「実はわたし、こっそりと病院を抜け出してきたので、これで…」

俺の手が彼女に自然と伸びる。

「も、もうちょっとだけゆっくりしていけ……」

「えっ……？」

「もうちょっとここにいてくれ……借り増やしてもいいから」

自分でも言つて恥ずかしくなる。そんな頼みに彼女は、ひまわりのような笑顔で、

「はいっ」

と答えて俺の横に座った。

超能力者。

俺の能力は物質を変化させる。その能力は俺の人格まで変化させていたようだ。人は変わるのだ、いつか必ず変わる。俺は変わった。一人の超能力者はそう思いつつ、今まで見せたことの無い表情になった。

大きな変化（後書き）

閲覧ありがとうございました。

無差別な奇襲（前書き）

好評のようだったので、続きを書いてみました。一章からご覧ください。

無差別な奇襲

超科学という組織が発足して、二週間あまりが過ぎた頃。

俺、綾瀬恭耶は、『血のクリスマス』 東京北部で五千人の人間が超能力者に殺された事件だ 首謀者の娘である神原沙希と出会い、その超科学の兵士を三人ほどノックアウトさせた後、病院で動かなくなってしまった左手のリハビリを行っていた。

「うがあああああああああ！？」 や、やめてください！ 腕が腕がああああああああ！？」

「大丈夫ですよ。ちゃんと動かせるようになりますから……ふんっ！」

と、サービス精神旺盛な笑顔を振りまくナース。明らかに、その笑顔の後ろには邪惡めいた何かがあるのが分かる。

動かない腕を無理やり動かすりハビリというのは想像以上にきつかった。しかも、このナース、容赦というものがない。全力で俺の腕を曲げている。動かない腕を動かすには、無理やり動かすしか手立ては無いらしい。

「今、思い切り力入れましたよね！？ おかしいですよぐわあああああああ！」

と、俺が病院のリハビリルームで絶叫を上げている最中、窓越しの待機室には、一人の少女がいた。ウェーブのかかった髪、澄んだ瞳、華奢な体躯。そう、神原沙希である。

彼女は俺に向かって無垢な笑顔を振りまいた。しかし、この激痛地獄のときにそんな甘いものには効果が薄いらしく、痛みはあまり、鎮まらなかったのだった。

今日のリハビリを終え、沙希と俺は病院の中を歩いていた。

「いてえ……………。あの人、絶対Sだろ」

「そんなことありませんよ。きっと善意ですっ」

「そうなのかねえ……」

沙希は俺の見舞いによく来てくれる。というかほぼ毎日来てくれるのだ。俺にとっては嬉しい限りだ（こんなことは死んでも口にはしない）。しかし、なぜ彼女が見舞いに来てくれるかは分からない。人の心や考えに立ち入るには相応の資格が必要となる。その資格が俺にはまだ無い。

「ああそうですっ、恭耶さん。あの話引き受けてもらえますかっ？
引き受けていただけるとわたしとしてはとても嬉しいんですがっ」
「ああ、あの話が……」

あの話というのは、沙希がリーダーを務めている超能力者のグループに入らないか、という話。

そのグループは超科学に対抗するために作られたらしい。そして、その構成員は、『血のクリスマス』の首謀者、神原茂の知り合いが多数を占めている。当然、構成員は全員超能力者。俺も超能力者だから、その組織に入ったほうがこの先、生き残るためには有益ではある。

しかし、俺だって『血のクリスマス』の被害者だ。易々と、その中に入りたいとは思うまい。

矛盾はしている。なぜ、その事件の首謀者の娘である沙希には心を開いているのに、その事件の首謀者の知り合いになると嫌がるのか。わがままだとは分かっている。それでも、抵抗があるのだ、その組織には。

「沙希、退院したら、その組織を見させてくれないか。生返事じゃ決められないことだ」

「はいっ。分かりましたっ」

彼女に了解の返事を貰うと同時に病室の中に入る。その病室には俺と、もう一人の人間、湖南英理子だけしかない。俺はベッドに腰掛けながら、

「おうおう綾瀬。神原なんか連れてデートでもしてたのかしら？
それとも介護のパートナーかしら？」

「どっちでもねえよ。ただ、リハビリルームからの帰りだよ」

「ふうん。面白くないわねえ……。あ、そうだ、あたし、明日退院できそうなのよ。良いでしょ？」

「そりゃ良かったな。俺もさっさと退院したいところだよ……で、お前、学校はどうするんだ？ そのまま行くのか？」

湖南はバツが悪そうな顔をして、

「うーん……と、とりあえずは行くわ。あ、秋月もいることだし……」

語尾が小さくなった。はきはきとしゃべる彼女にしては珍しい現象だ。本当の意味で友達になるってのは良いことだ、と実感させられる。

「そっか」

俺は簡単に答えると、いつものように窓を見る。これといって意味は無い。この病室にずっといるから、その習慣でこういう行動をするようになったのだ。

「あのう、恭耶さんっ、今日は用事がありますのでこれで……」

「ああ、そうか。付き合ってもらって悪かったな」

「いえいえっ。ではまた明日っ」

「ああ」

俺は心底思う。変わったのだな、と。

前なら礼なんて言わなかった。また明日といわれても返事をしなかっただろう。それはこの二週間のできごとによるものだ。

窓を眺めながら、ここ二週間弱のことを思い返していると、ファッション誌を読んでいた湖南がおもむろに、

「綾瀬、神原のことでも考えているの？ なんだかぼーっとしてるけど」

「ち、違っ！ か、考えてねえよ、んなこと！」

「いつもは落ち着いた口調で話す綾瀬くんがすごい動揺してるわー。図星なのね。可愛いものだわ」

「うるさいっ」

俺は彼女から逃げるように布団を被るのだった。

その夜。風が強く、寒くなってきたので、深夜に起きてしまった。
「はぁ……」

しんと、静まり返った病院内。そこで音がするものは風の音だけだ。しかし、風の音と言っても窓越しに聞こえる風の音ではない。病院内のどこから風が吹いている。なぜなら、病室の入り口から風が吹いていたからだ。

この病室の向かいも病室だから窓があるはずもない。なぜ、そこから流れているのか。俺は不審に思い、ベッドから這い出て、その扉を開けた。

「……………」

何も無い。ナースセンターのほうだけが明るい。向かいの病室の扉も閉まっている。しかしなぜだか風は、やまない。ヒュウウウウウ……………」

恐怖に全身の毛が逆立つ。俺は、ナースセンターとは逆の暗がりのほうへと足を進めた。病院内の暖房は機能しているものの、風のせいか、やけに寒い。いや、俺が恐怖に慄いているからだ。

老化の窓から差す、南天より少し西に傾いた満月の明かりだけが頼りだ。電灯がついていないときのつきの明かりはとても頼りになる。そう思いつつ、動かない左手を抱えながら暗がりのさらに深いところへと足を進めていると、

「お前が、超能力者……」

「ッ!？」

本능が警告を出す。ここにいてはいけない、と。緊張のせいか、殺しをしているときよりも、胃がきりきりとする。

その声は続ける。超科学の鎧とは違い、機械で出力している声ではない。この空間に誰もいないから、届く声。

「お前は死ぬべきだ」

「……誰なんだ」

「そう、死ぬべきなんだ。だからここで、殺す」

「だから、お前は一体誰なんだ！」

俺が叫んだ瞬間、窓も無いのにもかかわらず、横から暴風が吹き荒れた。簡単に俺の身体は廊下の壁に叩きつけられる。

その衝撃で灰の中に溜まっていた酸素が、強制的に吐き出される。
「がはっ……」

次は下からだった。またも俺の身体は簡単に空中に巻き上げられ、ハリケーンに巻き込まれたかのようにくると回りながら、天井に激突した。奇襲だった。まるで抵抗が出来ない。対策が思いつかない。

地面に叩きつけられる。

「あっ……がっ……」

「貴様のようなものが、生きていて良いわけが無い。だからここで、理不尽に……理不尽に、死ねえ！」

おそらく、次は前からだ。それを見越して、リノリウムの地面を変化させ、壁を作る。案の定、風が壁にヒットしたのだが、その壁は一瞬で崩壊した。

「くそっ……！」

一瞬でも時間稼ぎができれば良かった。あとは、この病院の中を縦横無尽に駆け巡るのみ。逃げの一手。

「おいおい、あれ……俺と同族じゃんか……！」

同族。

超能力者。この世界の異端。そして、同等の代償を支払う者。

あの風は超能力だ。マジックでもない。科学的に発生させたものでもない。床や壁から風は発生しないはずなのだ。

しかしなぜ、同族であるはずの俺を襲うんだ。

「はあっ、はあっ……！」

慣れ始めた病院ではあったものの、今自分がどこにいるのかさえ分からない。そんなことを思っているとき、俺の後ろの壁に大きな

傷が、ビュウ！ という風切り音とともにつけられた。

「かまいたちっ……なのかつ……！？」

かまいたちというのは旋風の中心に出来る真空または非常な低圧により皮膚や肉が裂かれる現象だ。しかしそんなことはありえないと近代的で報告されたという話を聞いたことがある。

ということは、相手の能力は気圧を操ることになる。風よりも低圧なものを発生させる　あくまでも、憶測の粹に過ぎないが、貴重な情報だ。

「ちょこまかと！」

「くっ……！　なんなんだ……」

声の主の姿はどこにもない。

そして今の俺では接近したとて勝てない。左手が動かない。こればかりの痛手だ。そう、今はどう足掻いたって勝てないのだ。

吹き荒れる旋風の影響でもう病院の中は滅茶苦茶だ。なぜ、こんな騒動が起きているのに誰一人気付かないのだろうか。不思議だ。まずは、明かりをつけよう。何で攻撃されているか、明るくなれば分かる、というほんのわずかな希望を信じるべきだ。

ちょうど角に差し掛かったところで、電気を入れるスイッチの光がうつすらと見えたのでそれを押し込む　カチツという軽快な音とともに今走っている廊下の部分だけが照らされる。

「何をしようというんだ？　そんなことをしても無駄だ」

完全に相手は油断している。俺は、そこに付け入る　！

「ふっ……！」

一気に駆け出す。そう、暗いから分らなかった。暗いから声はどこからしているか分からなかったのだ。それを明るくしてしまえば、だいたいの位置は把握できる。機械で出力されていない、つまり近くでしゃべっているということになる。

そして、相手の油断。そこをつけば、形勢逆転できるはずだ。

「そこだあっ！」

「っ！？」

完全に的の隙を突いた。物陰に隠れながら話していたようだ。

「お前、なんなんだ！」

そこには青年がいた。俺と同じくらいの歳に見える。筋肉は人並みだが、長身だ。そして、彼は話す。

「さすが、超科学の鎧を一人で倒した男。機転は利くらしい。しかし……」

その男は涼しげな顔で言った。俺は動く右腕でそいつの胸倉を掴みあげる。いつもより力が入っていない。病院でばーっとしていたせいだろう。

「病み上がりなのか、周りが見えていない」

「どういう……！」

俺が言葉をつむごうとした瞬間、首筋に衝撃が走った。やられた。敵は、一人とは限らないのだ。俺はどうやら、ここ数日で、平和ぼけしてしまっていたようだ。俺の意識は、そこでプツリ、と途切れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3545v/>

超能力者の観察日記

2011年8月20日03時14分発行